

長崎が拓いた アジアとヨーロッパの交流

学部生 和泉 遼
 西條 史都
 山口 夏実

大学院生 城崎 晶子

卒業生 王 星星
 塚原 啓弘
 越田 辰宏

指導教員 金 美徳
 大場 智美

目次

はじめに	9
第一章 17世紀オランダの世界史意味	12
1-1. 17世紀という時代	12
1-2. オランダの台頭と17世紀という時代	14
1-3. オランダの気質と日本の相性	16
1-4. オランダ風説書とインテリジェンス	17
1-5. オランダ東インド会社と日本交易	18
1-6. オランダ東インド会社と日本の経済的関係	20
1-7. オランダ	21
1-8. 結論	28
第二章 三浦按針から浮彫りにされた世界史と日本史の外交	30
2-1. 三浦按針と徳川家康	30
2-2. ウィリアム・アダムスはいかにして三浦按針へとなりえたのか	31
2-3. 結論	41
第三章 世界経済と銀の島	43
3-1. 銀の世界史的役割	45
3-2. 銀と江戸経済	45
第四章 鎖国時代の長崎と中国	48
4-1. 中国の鎖国＝海禁	49
4-2. 日本の鎖国政策（外交と通商）	50
4-3. 日本の近代化への遅れ	52
4-4. 中国文化の相対化と日本人の自国意識	52
4-5. 長崎と中国	53
4-6. 結論	58
第五章 鎖国と四つの交流窓口	60
5-1. 四つの交流と交易窓口	61
5-2. 四つの情報収集ルートとインテリジェンス	62
第六章 三つの口	65
6-1. 対馬口と朝鮮通信使	66
6-2. 朝鮮通信使外交（日朝の視点）	67
6-3. 善隣外交と征韓論	67
6-4. 薩摩口と琉球王国	69

6-5. 琉球使節と朝鮮通信使	70
6-6. 松前藩の対外交渉	71
6-7. 田沼意次と赤蝦夷風説考	72
第七章 長崎口とオランダ風説書	73
7-1. 長崎口とは.....	73
7-2. 港湾都市としての長崎	76
7-3. アジアダイナミズムにおける長崎県の地政学的優位性	77
7-4. 出島とオランダ東インド会社.....	78
第八章 株式会社の原点 オランダ東インド会社 (VOC)	80
8-1. 16-17 世紀のプロテスタント国オランダと進出するオランダ東インド会社 ..	80
8-2. 日本の貿易体制、中国冊封制度を拒絶.....	81
8-3. オランダ支配下の台湾	82
8-4. オランダ東インド会社設立.....	83
8-5. 株式会社オランダ東インド会社の仕組み.....	83
8-6. オランダ東インド会社に対抗するイギリス東インド会社.....	84
8-7. 成功したオランダ東インド会社と追うイギリス東インド会社.....	85
8-8. 結論.....	86
第九章 キリスト教とアジア	88
9-1. キリスト教と日本との相性.....	90
9-2. 中国・朝鮮とキリスト教の相性.....	91
9-3. キリスト教と親鸞	92
第十章 日本人の思想と宗教観	93
10-1. 儒教諸派の興隆	93
10-2. 日本人の真心と中国の漢意 (からごころ)	95
10-3. 経済と宗教～胡椒と救霊～	96
10-4. 文化と宗教.....	97
10-5. 軍事と宗教.....	98
10-6. 共生とアジア的思考	99
おわりに	103
補足資料	107
1. 年間スケジュール	107
2. 四つの口 (図解)	110
3. 年表.....	111
4. フィールドワーク報告書	112
4-1. 島根の石見銀山	112
4-2. 長崎県視察 (2016 年 9 月 1 日～3 日)	114

4-3. 神奈川県横須賀市逸見町視察 浄土寺	127
4-4. アジアをつなぐ長崎ロード～日中の絆を深めた人々～シンポジウム参加	127
参考文献	131
謝辞	137

執筆担当

はじめに	越田辰宏
第一章	越田辰宏、山口夏実
第二章	越田辰宏、和泉遼
第三章	越田辰宏
第四章	越田辰宏、王星星
第五章	越田辰宏
第六章	越田辰宏
第七章	越田辰宏、塚原啓弘
第八章	越田辰宏、西條史都、城崎晶子
第九章	越田辰宏
第十章	越田辰宏
おわりに	越田辰宏
補足資料	越田辰宏、城崎晶子、山口夏実、西條史都、和泉遼、塚原啓弘

はじめに

現代社会はグローバリズムと宗教・民族・国家の意思が複雑に交錯する時代である。理論・理屈主体の虚構の経済学では、複雑にして不条理な現代の諸問題を決することは困難である。こうした諸問題を最適解に導くには、歴史（グローバルヒストリー）を重層的に理解する視界が求められる。

E.H. カー（1892-1982 年）は『歴史とは何か』において、「歴史は現在と未来との対話である」と論じるように、歴史は我々の現在と未来を照らす鏡となる。とりわけ、現代の世界と日本を相関するには、世界史、東アジア史、日本史を連関させながら、同時に政治・経済、民族、宗教分野にも考察を複合的に巡らす、広くて深い視界を持つことが求められる。

米国の世界認識・資本主義の世界化に大きく影響されてきた戦後日本の社会認識に対し、個人・企業・国家の各価値観を相対化しながら、全体知をもって物事の本質を判断できる人間力を錬磨しなければならない。

17 世紀における世界の地平を鳥瞰してみると、アジア地域の日本では、乱世を制して日本を統一した家康から始まる徳川幕府が、欧州文明・中国冊封体制から離脱を試み、儒教平和主義を受容した時代であった。中国では、豊臣秀吉と朝鮮での戦いで戦力を消費した漢民族の明国が衰退し、代わって満州民族が台頭して清国（1636-1912 年）に政治が移行する時期であった。

また、欧州地域では、新旧キリスト教両派による宗教紛争の三十年戦争（1618-48）後の講和会議であるウエストファリア条約（1648 年）の段階が、近代国際会議の始まりであり、これによって主権国家体制が確立される新しい時代への幕開けとなった。

B・ウィレーは『十七世紀の思想的風土』（1958 年）において、「我々は逆立ちの 17 世紀である」と喝破し、17 世紀時代の思想的背景には、現代を裏口から理解する極めて教示に富む歴史的方法があるとした。そして、現代の危機、或いは社会不安と呼ばれる世界の諸現象は、400 年前の歴史と同根であるとする。

現在の姿は、既に制度化された近代思想が、刻々変化する現実の具体的事象を適時適切に処理しきれなくなっている事態に起因しているのであろうか。思想の運命は一回転して、今日の我々を 17 世紀的思想的風土と逆に対応するような立脚点にまで運んでいるとのウィレーの論考は示唆に富んでいる。

こうした 17 世紀以降の近世・近代史を紐解き歴史を観る思考の中に、現代を生きぬく問題

意識を発見し、課題を解決する指標が示されていると思われる。過去を主体的に捉えることなしに未来への展望は拓けない。混沌とした現在の社会では、過去を見る眼が新しくならない限り、現代の新しさは本当に掴めないのである。

ヨーロッパは何のために、どのようにしてアジアに来たのか。こうした現実に関心を向けることが必要であり、そこから明治期以降の日本のアジアへの姿勢が見えてくる。これからのアジアとの関わり方がわかってくると思われる。

多摩大学・寺島実郎学長主宰インターゼミ（社会工学研究会）におけるアジアダイナミズム班の共同研究は、歴史的な情感溢れる九段下にあるキャンパスを志学の地として、本年で8年目を迎える。

研究テーマとしては、第1回目が2009年「多摩大学留学生獲得戦略」、第2回が2010年「近代日本のアジア像」と「日中韓の経済」、第3回目が2011年「日中韓の人物交流」、第4回が2012年「日中韓の領土問題」、第5回が2013年「飛鳥寺」、第6回が2014年「江戸期の日中韓交流～朝鮮通信使の外交・文化的意味と現代的意義～」、第7回が2015年「琉球国と東アジア交流～琉球史から沖縄の経済的自立を考える～」であった。

第8回目を迎える2016年度研究テーマは、「長崎によって拓かれた日本-アジア・ヨーロッパ交流」である。各章の展開は、ここ数年来の江戸期を中心とした研究成果を見据えながら、東アジア交流の窓口としての、対馬、薩摩、長崎、松前の四つの口の観点から概観を行うとともに、その後の各章では、三浦按針、オランダ東インド会社、オランダと日本、長崎と中国、鎖国と情報戦略、隠れキリシタンといったキーワードをもとに、各担当者がテーマの深堀を行っている。

本稿では、寺島実郎氏の四半世紀の集大成といわれる『脳力のレッスン 17世紀オランダからの視界』（2010年～現在「月刊世界」岩波書店）の論考を、多摩大学アジアダイナミズム班における共同研究の先行文献としている。共同研究のメンバーは、寺島学長ゼミの講義を通じて政治・経済・宗教などの問題意識を高めて世界観を拓けるとともに、重層的に物事を観る眼を養ってきた。これまでの数年来、蓄積してきた研究成果や課題を踏まえ、文献調査、有識者との面談、そしてフィールドワークといった手法を通して情報感度を高めてきた。

共通の視点としては、「歴史は干からびた記録の堆積ではない」という認識の下、現在の眼で過去を見つめ直す視座である。歴史の機能は、過去と現在との相互関係を通して両者を更に深く理解させようとする点にある。未来を考える営みなしには、過去は現在から見え

ないし、未来を思い描くことはできない。

「いかなる（歴史の）曲折を経ようとも、結局のところ、歴史は条理の側に動く」（寺島実郎 2016）ということ、歴史を学び考える過程の中から各々が実感して捉え、現代を生きる視界へと広めていく糧としていきたい。

第一章 17 世紀オランダの世界史意味

1-1. 17 世紀という時代

初めに、世界史と日本史の関連の視点から、17 世紀という時代の様相を概観してみたい。戦国時代に先駆けとなった応仁の乱（1467-77）と同時代の日本史から世界史へ俯瞰してみると、欧州による世界への「大航海時代」の始まりに重ねることができる。コロンブスの米大陸発見（1492 年）、バスコ・ダ・ガマのインド航路発見（1498 年）、マゼランの世界周航（1522 年）などを思い浮かべることができる。歴史が大航海時代へと向かう背景には、マルコ・ポーロの『世界の記述』（東方見聞録）による東洋への憧れ、航海術・造船技術の発達、イスラムからの国土回復運動（レコンキスタ）として激しく戦う宗教的情熱など、様々な要因をあげることができる。

こうした中で、国家としての纏まりをいち早く進めることができたスペイン（イスパニア）とポルトガルは、国土拡大と商業利潤を目的として、世界規模での中継貿易や征服事業に乗り出した。

これに宗教が加わる。ローマ教皇アレクサンドル 6 世は、この勢いに乗じて大西洋上に縦軸に境界線を設定した。将来発見される島の領有権を、境界線から東側をポルトガル領、西側をスペイン領とすることを認めた。スペインとポルトガル両国間で結ばれた「トルデシヤス条約」（1494 年）である。これによって各領域では、航海・征服・統治・交易、キリスト教（カトリック）布教を独占的に進めてよいとされた。

こうした状況下において、先行して事業を主導したのがポルトガルであった。15 世紀に入ると、ポルトガル船はアフリカ喜望峰に至り、15 世紀末にはインドに到着した。当時、インド洋から東アジア海域では、ムスリム商人を主役とした東西貿易が活発に行われていたが、ポルトガルは、海域の港町を攻撃しながら、イスラムの海を支配下に置き、海の帝国を築き上げていった。

ポルトガルとスペイン両国の覇権争いの進む中、日本史に目を転じると、1549 年にポルトガルの国家事業と結んだイエズス会の宣教師フランシスコ・ザビエルが鹿児島に上陸している。ザビエルはスペイン人であったが、日本への布教は、ポルトガル国王の布教保護権のもとで始められた。スペインは 35 年遅れの 1584 年に初めて平戸に来航した。西洋発の大航海時代の波が日本に到達した歴史の瞬間である。

1479 年統一国家となったスペインは、当初ポルトガルに後れを取っていたものの、南北アメリカ大陸に進出して植民地を拡げて、16 世紀半ばにはアジアにも進出した。フィリピン諸島を占領して、マニラを拠点とする植民地活動を展開した。

英国にスペイン無敵艦隊が敗退する 1588 年までの間において、スペイン国王・フェリペ二世の治政下（在位 1556-98）では、「太陽が沈まぬ時代」（スペイン・ナポリ王国、ミラノ公領、ネーデルランド・アメリカ・メキシコ・ペルー・フィリピン領、ポルトガル併合）とも称される黄金期を謳歌した。

栄華には終章があり、その後、セルバンテスの著書『ドン・キホーテ』では、騎士が風車に突進する情景は、スペインを象徴する騎士道ドン・キホーテが、17 世紀台頭するオランダを象徴する風車に敗退する隠喩（メタファ）として使われている。16 世紀スペインの栄光と衰退を象徴している。

ここで動的な対外的活動から静的な思想的展開をも概観してみたい。16 世紀は「エラスムスの世紀」といわれる。カトリックの中世的権威主義に対し、覚醒した知性で固定観念を打ち壊すという意味で、オランダ人のエラスムスは先駆な思想家であり活動家であった。

エラスムスは、カトリック教会の旧態依然とした諸問題を批判しながらも、中道を標榜し続け、プロテスタント側に投じることはなかったとされる。しかし、「エラスムスが卵を産み、ルターが孵した」という言葉があるように、キリスト教改革の機運が起こり、時代の勢いはキリスト教を二分する方向へと進んでいった。

続く 17 世紀の西欧は、別名を「天才の世紀」と呼ばれる。人間の生活と思想の全領域において驚く多彩な独創的な偉業が奇跡のごとく行われた近代の一世紀である。中世から近世・近代への転換期を代表する 17 世紀の西欧の思想が注目される。

このような宗教思想の影響を受けて、17 世紀の英国では、「革命の時代」と称される。清教徒革命と共和制の時代を経て、王政復古から名誉革命の時代へと続き、立憲君主制に立つ連合王国の基礎を築き、やがて世界史の中心に座す時代を迎える。英国の歴史は、プロテスタント内部の対立・分裂とカトリックとの重層的に絡み合い、中心軸が複雑に揺れ動く。

英国教会がカトリックの圧力と清教徒に挟撃を受けながら、次第に宗教的寛容に落ち着いていく過程が見えてくる。オランダのエラスムス精神、革命とキリスト教内部の葛藤を通じた三角測定の視点に基づく論考の展開に多くの気付きを覚える。

ここで、本稿の「はじめに」の中で触れた、B・ウィレー（1958 年）『十七世紀の思想的風土』について整理しておきたい。ウィレーは「我々は逆立ちの 17 世紀である」として、17 世紀の理解は現代を裏返しして理解することと論じた。17 世紀の時代の思想的背景を提供するためには、文字又は宗教が当時の所謂、「思想の風土」climate of opinion によってどのように影響されたかという問題を絶えず眼中におくことを主張する。近代は単に近代的には捉えられない。思想一回転して今日の我々を 17 世紀的思想的風土と逆に対応するような立脚点にまで運んできた」と論じる。

また、日本に目を転じると、17 世紀の江戸幕府は、鎖国・キリスト教の禁教へと方針転換を行う時期である。背景には、家康が、欧州の政治力学を理解するにつれて、カトリック国のスペイン、ポルトガルに警戒的になっていったことがあげられる。そして、1600 年にオランダ船に乗って現れた英国人の三浦按針（ウィリアム・アダムス）の登場によって及ぼす幕府への影響の大きさを示す一端は、外交顧問と武士身分（領地）の付与という史実を通して、宗教の問題は古くて新しい問題であることを印象づけられる。

1-2. オランダの台頭と 17 世紀という時代

寺島は『脳力のレッスン 17 世紀オランダからの視界』¹の本質的意味について、「オランダは近代の揺籃（事の初期段階）器」と述べ、17 世紀オランダの世界的意味を深く考えることの中から、時代や環境の制約を乗り越えて、現代に通じる「世界を知る力」を高めることの重要性を力説する。

1620 年メイフラワー号が新大陸を目指して大西洋を渡った背景には、宗教改革を洩る国王ジェームズ一世(1603-25)の清教徒の失望があった。寺島は、英米蘭の歴史的位相を象徴するのが、二人のルーズベルト大統領の登場であるとし、セオドアとフランクリンの先祖は新大陸への移民であると述べる。

現代の世界の考察を深める上で、アメリカの位置づけの相関を比較する視点は必要である。アメリカ社会の基底には、17 世紀オランダの影響が深く埋め込まれており、オランダの影響としての DNA（連邦制、宗教の自由）を知るうえで、アメリカ社会の基底にオランダとアメリカの歴史的関係を知ることは重要である。大英帝国から独立したことからアメリカは、英国的文化や値を引き継いだ国と考えがちであるが、アメリカ理解には欧州からアメリカを観る複眼的視界が必要である。

合衆国憲法の基本精神を想起しても、「共和主義、法の下での平等、民主的意思決定」といった政治のあり方、「自由と多様性、寛容の精神」などの社会的価値の尊重は、近代合理主義の揺籃器となった 17 世紀オランダの影響を受けたものである。

ここで 17 世紀オランダの国情を概観してみたい。17 世紀のオランダは、王国ではなく諸州が独立的な政体を有するネーデルランド連邦共和国（1581 年スペインから独立宣言）であった。自治の精神に満ち、カトリックの権威と中世的支配に反発するカルヴァン派を中心とするプロテスタントの国であった。専制的なスペインやローマ法王を頂点にピラミッド式の組織を持つカトリック教会に比べて分権的といえる。

¹ 2010 年～「月刊世界」岩波書店

徳川家康との交渉過程をみても、中央が全てをコントロールするのではなく、出先機関の者たちがかなりの自由裁量を持っていた。しかも、会議の決議によって相手国への対応にし、贈り物においてもより柔軟な対応が可能だった。17世紀の世界商戦におけるオランダの覇権の理由の一端を垣間見るようである。オランダは、北欧とイベリア半島を結ぶ仲介貿易で力をつけ始めた新興国であった。「鯨がオランダを創り、オランダが世界貿易を造った」という言葉があるように、北海で捕れた鯨の塩漬けや酢漬けをスペイン、ポルトガルに売り、その代金でアジアからスペイン、ポルトガルが持ち帰った胡椒などの香辛料を北欧に販売していた。このように、欧州海上貿易の半分と北欧漁業の半分以上を取扱い、さらに、当時の欧州 11 カ国が保有する船舶数に匹敵する 1.5 万隻を所有するなど、欧州商船の半数はオランダ所属であったといわれる。当時のオランダは、香辛料など東方貿易の大半を扱っていたといわれる世界の貿易国家として繁栄を謳歌していた。

このような黄金期オランダの世界展開の戦略的装置としての位置づけが、オランダ東インド会社の存在である。オランダ東インド会社は、単なる貿易会社ではない。商事会社でありながら、アフリカ最南端の喜望峯より東方、マゼラン海峡より西方での貿易独占権、交戦権、条約締結権をオランダ共和国の連邦議会から認められた企業体である。

また、もう一つの重要な側面として、オランダ東インド会社は有限責任の投資を可能にした世界最初の株式会社である。650 万ギルダーを集めて、出資金を 10 年間固定して 10 年後に損益を清算する合理的システムを有した会社であった。その姿は欧州の株式会社のモデルとなり、近代資本主義につながる株式会社制度をもたらした。

オランダ東インド会社は、本社を持たない会社で、アムステルダムを含む六つのカーメル（直訳すると「部屋」の意味）は形式上同格であり、六つのカーメルから選出される重役 17 名で構成される十七人会が会社の営業方針を決定していた。

科野孝蔵（1988）『オランダ東インド会社の歴史』によると、オランダ東インド会社の全従業員数は、約 2.5 万人²であった。最も大きな会社は、インドネシアのバタビア（現在のジャカルタ）であり、約 5000 名の社員がいたと記録されている。その他に、スリラン

カ、ジャワ東岸、インドのマラバールなど 17 か所の拠点を持っていた。日本の長崎は、最も規模の小さい支社として、商業的権利しか持っていない商館長を含む社員 11 名であった。このように、オランダ東インド会社は、単に「物流回路」としてアジアから香辛料や茶、銀を持って帰るのだけでなく、欧州とアジアを結ぶ「情報交流の回路」の役割を担っていた。後述する長崎のオランダ商館長が残した報告書（「オランダ風説書」）は、当時の国際情勢

² 1753 年時点

を伝える興味深い資料である。栄華は永続しない。オランダの発展後の斜陽理由について、寺島（2012d）は大塚久雄の『株式会社発生史論』から、オランダが「商業ブルジョア」主導国家になったことにより、産業資本の発展が抑えられたことが、オランダが世界発展の大きな制約条件になったことを、英国の「産業ブルジョア」との対比の中で説明している。

ここで、最初の命題について振り返ってみたい。「なぜ小国オランダが、17世紀欧州の覇権を獲得することができたのか。根拠・背景となる事象や事実にはどのようなことが考えられるか。」については、以下のような複数の要因が考えられる。

①エラスムス精神として、オランダは近代合理主義の揺籃器として存在感を示した。米国への影響もその一つである。また、思想の自由、自治の精神、自由と多様性、寛容の精神、独立・分権的（連邦共和国制）のキーワードをあげることができる。

②キリスト教プロテスタント（プロテスタンティズム）

③小国ながら世界一の貿易国家（世界最初の株式会社であるオランダ東インド会社、商業ブルジョア、商人的国柄、実利的判断）

④優れた情報交流回路（「オランダ風説書」の世界情勢）を説明することができる。

1-3. オランダの気質と日本の相性

オランダが生んだ人文主義者エラスムス(1469-1536)は、1511年に初版刊行された『愚神礼讃』などでカトリック教会の腐敗を風刺して、宗教改革に大きな影響を与えた。思想の自由という点では、17世紀のオランダは、ヨーロッパの最先進国であったといわれる。

オランダだけが鎖国の時代に日本と交易を続けることができた理由について、寺島（2012c）は、スペインやポルトガルといったカトリック国では、ローマ皇帝の下における普遍的価値を妥協なく布教として押し出したのに対し、オランダ（オランダ東インド会社）は、商業活動に専心したため、幕府の信頼を得たという認識が一般的であるとする。その上で、オランダなどのプロテスタント国は、領邦君主の地域主権に対して柔軟・寛大であり、主権国家の主体性・自立性を尊重する姿勢を本質的に内包している。こうしたことからオランダは、キリシタン禁制や鎖国政策について、信仰を押し殺して経済的利害を優先する価値観というよりも、地域の特殊事情として許容できる心理が矛盾なく存在したとする。

当時の国際情勢として、ポルトガルと中国は友好的な交易関係を有していた。ポルトガルが中国政府の高官と太い絆を結んでいるという状況を考えると、ポルトガルと中国は一つのグループと考えられる。巨大な陸軍を擁する中国明朝と東アジアの制海権を握るポルトガルの海軍力が結びつけば、強力な同盟体制となる。事実、ポルトガルは中国沿海の島々で交易

を行い、中国の承認を得て、マカオに居住地を獲得するに至った。

日本の安全保障の観点から、日本とオランダとの同盟は必須と考えるのは自然な流れであった。東アジア情勢において、琉球は明の藩属国であり、琉球が侵略されることになれば、宗主国たる明国は侵略者の島津藩を攻撃しなければならない。琉球国を巡る戦争となれば、勝敗を握るのは、海軍力の優劣となる。ポルトガルが中国に味方をするという想定は、家康にとって最悪の想定であった。こうした中で、オランダは、商人的であり市民的な国柄であった。宗教を押し付けず、商売のためなら相手に対して低姿勢をとれるのがオランダ人である。このようなオランダ人の気質が、オランダをヨーロッパ諸国の中で、唯一交易国として存続することができた一因であると考えることができる。

1-4. オランダ風説書とインテリジェンス

外交と通商は表裏一体である。オランダは、貿易上の競争相手であるスペイン、ポルトガルを追い落とすため、ポルトガル、スペイン等の海外情報を 1641 年「オランダ風説書」（海外情勢報告書）開始前の 1630 年以前から幕府に情報提供していた。その内容の中には、彼らカトリック教の国では、貿易と布教は一体であり、布教の後方には軍事的攻撃・征服を伴うのが常であるといった話が含まれていた。

「オランダ風説書」（ふうせつがき）とは、日本との貿易許可を得る条件でオランダ商館長が幕府から要求された世界情勢の書であり、特にスペイン、ポルトガルなどのカトリック国の動向について伝える報告書であった。日本との通商を続けたオランダは、長崎出島の商館長（カピタン）の世界情勢報告書（日本最初のインテリジェンス情報レポート）を、1641 年から 1859 年までの 200 年以上もの間、毎年のように幕府に提出し続けた。

オランダ風説書の主な内容は、ヨーロッパ、西アジア、インド、東南アジアであり、アメリカ大陸やアフリカに関する情報も含まれていた。当地での戦争、王位継承、自然災害など時事的な話題が盛り込まれていた。

オランダ風説書の形態は、大きく分けて通常版と別段版の二つに分類される。通常の風説書は 1641 年から 1857 年まで、別段風説書は 1840 年から 1857 年まで、1859 年に作成された最後の風説書は両者の折衷版といわれる。通常の風説書は、年間 1 から 2 通であり、最多で 6 通であった。オランダ船到着後、最も確実な情報を持つ商館長により作成された。別段風説書については、年間 1 通作成されて日本に送られた。

木村（2016）によると、19 世紀初頭にかけてロシア、イギリス、フランスなどの船舶が日本沿岸に出現するようになると、従来のオランダ風説書より精度の高い情報、すなわち、これら西洋諸国は、どのような意図で日本近海にいるかについて確認を必要とした。

インテリジェンスとしての世界情勢報告の情報網について、松方（2010）は、利益追求を絶対の目的とするオランダ東インド会社が、徳川幕府だけのために、会社が世界中の時事情報を集める費用があるとは思えないと説明する。

イギリスの歴史学者ピーター・バーク（2004）『知識の社会史』によると、オランダ共和国は都市の大商人層が支配権力を握っていたので、自由に情報が流通していた。17世紀になるとオランダ共和国は、ヨーロッパの情報の主要な発信地であり、消費地であった。17世紀オランダでは、情報の流通が非常に活発であり、情報はすでに商品と見做されていたと論じている。

	作成時期	オランダ語	作成地	政庁の決議
通常の風説書：商館長作成。 幕府への定期的報告書	1641～1857年	なし	長崎	なし
別段風説書：バタビア植民地 政庁作成の現地の生情報	1840～1857年	あり	バタビア (ジャカルタ)	あり
第三類型	1859年	あり	長崎	なし

表 1. オランダ風説書の類型³

「風説」とは、うわさという意味である。風説書を幕府に提出したのは、オランダ（『オランダ風説書』）と、中国や東南アジアから来航する唐船（『唐人風説書』）からの情報があげられる。こうした情報を幕府は噂であっても情報提供してもらうことを強く望んでいた。鎖国時代を通じて、限られた情報回路で世界を認識することは幕府にとって至難であったが、こうした中で、世界情勢を伝える回路としての風説書の存在意義は大きい。

1-5. オランダ東インド会社と日本交易

1635年の鎖国令によるポルトガル人の追放以降、1641年から日本との貿易は、オランダの独占となった。オランダにとって日本との貿易、特に平戸商館時代は、世界に30数か所あった全商館の中で最も利益をあげていたといわれる。オランダにとって日本との貿易は、キリスト教諸国からの非難を浴びながらも日本との交易を継続するに値すると判断された。日本の自立自尊が進む中、18世紀後半、オランダのアジア拠点バタビア（現在のジャカルタ）の総督府では、衰えつつある日蘭貿易の中で、消極論や撤退論が浮上する時期であった。こ

³出所：松方冬子（2010）『オランダ風説書』

のように長崎貿易が縮小する中で、長崎の役人の給与が、1782年には4割減の影響を受けた。幕府としては、オランダとの貿易関係の悪化により、オランダが撤退して対外情報が入って来なくなることを恐れたことから、採算を度外視しても長崎での行政を継続したといわれる。

欧州に目を転じると、1813年に英国亡命していたウィレム五世の息子が、オランダ国王ウィレム一世となり、オランダは復活することとなった。ウィレム一世は、アジアにおける復権を目指す戦略の中で、日本でのオランダ優位に着目し、国家財政の建て直しを図るため、貿易の純益が最も高かった日本との関係を一層深めることに力を入れることに画策した。

その一環として、日本の歴史、国土、社会制度、物産などについての総合的な自然科学的調査を行う方針が検討された。これは、対日貿易の振興に向けての一種の対策であったが、同時に、日本に対してオランダを好意的に受け入れてもらうために、文化的貢献もその視野に入れていた。

オランダが打ち出した政策は、日本で特に歓迎されると考えられる医学の振興であった。それまで現地に対する文化政策などを考慮したことのないオランダが、日本に対して文化政策を行った理由には、利潤の大きい日本との貿易を従来どおり独占的に継承し、さらなる発展振興を図る上で基本政策を検討するための基礎資料の必要性があったためと推測される。事実、この時点までのオランダは、日本の国土、自然、歴史、社会制度、物産についての知識は断片的であり、総合的な調査を行ったことはなかった。

また、東インド会社は、開始当初、私企業による貿易であったが、1799年会社解散以降の日蘭貿易は、オランダの東インド植民地が直轄する国家貿易へと変じていたため、国家の施策として文化政策を講じる必要性がでてきた。

日本への派遣の白羽の矢となったのが、ただの医師でないシーボルトであった。鳴滝塾として知られるシーボルト塾は、江戸時代にヨーロッパ人が作った初めての私塾（私立学校）である。開塾に当たっては、東インド政庁と出島商館長と周到な準備があった。つまり、オランダは、幕府の建前と本音の別を熟知していたからこそ、こうした超法規的措置のもとでの学校設立もできたと解される。

鳴滝塾は、日本側からは医学を学ぶ大学の役割が期待されたが、シーボルトは日本についての資料と情報を収集・分析する日本学研究所の役割をこの塾に期待した。シーボルトの真の意図は、日本についてのあらゆる資料・情報の徹底した収集にあった。塾生への博士論文、或は学位論文を課すことによって、シーボルトは所期の目的を果たすことができた。

シーボルトから医学以外の分野を含む多様な領域について、大場（2001）によると、オラン

ダ語でその論文を書き提出することを求められたという。シーボルトは居ながらにして、日本各地の植物やその他の事物に関わる情報を集めることができた。行動が厳しく制約された日本において、必要かつ質の高い資料・情報を得るのに優れた方法であった。こうした中で、オランダの意図を幕府や長崎奉行所は、当初全く気付いていなかったと述べている。インテリジェンスに対する情報感度は、江戸時代も今も本質的に変わっていないものと思われる。

1-6. オランダ東インド会社と日本の経済的関係

江戸時代の「鎖国」政策下の中対馬、琉球、長崎、蝦夷にてそれぞれ貿易あるいは交易が行われていた。この事実を「四つの口」と呼ぶ。「鎖国」という国を閉じる政策のイメージとは裏腹に、四つの口を通して鎖国政策下でも対外的な交流や貿易が存在していたのである。その中で唯一幕府が直轄していた長崎では唯一の西洋勢であるオランダと貿易関係が結ばれていた。

幕府が鎖国政策に踏み切った背景にはかの有名なカトリック宣教師であるフランシスコ・ザビエルが種子島へ辿りついてから始まったポルトガルとの貿易関係が関連している。貿易関係を築く上の交換条件として提示されたキリスト教布教への不安感を募らせる出来事が起こった中で、宣教師によるキリスト教布教の後植民地支配体制を築いている実態を把握したこと、そしてオランダ商館長ニコラス・クーケバックルによるスペイン・ポルトガルの排除と朱印船貿易の中止に関する進言により幕府は鎖国体制をとることを決定する。

朱印船貿易中止に伴い一番の問題であったのは、当時需要がありながらも国産化されなかった生糸と絹織物の確保である。国内で生産する術のなかった当時の日本は、その供給源を全て中国との朱印船貿易に依存していたのである。

一方、その中国も倭寇を始めとする海賊行為を統制することを目的に明代より解禁政策を取り中国民間船による貿易を禁止する。加えて、その倭寇には日本の没落した武士団の首領が乗船、海賊行為をしていた。これは国内の戦争で所領を失うと、海賊行為をし成功をおさめ、自らが失った財産を取り返そうとしたからである。また、失った財産分を取り返すどころか以前の争いで失った所領すらも帳消しに出来るほどの成功を海賊行為で試みるほどの資金をためてまた戻ってくるのである。武士にとっては千載一遇のチャンスともいえるハイリスクな行いであった。

倭寇を取り締まる目的で行われた明代の海禁政策、海賊行為を働く倭寇には日本の武士もいた事実、加えて豊臣秀吉の2回に及ぶ朝鮮出兵など、中国は日本に対し警戒をするようになっていったため、当時の日本船は、例え民間船であっても中国に近づくことさえ困難であった。その状況を打破したのがイエズス会による中継貿易であったが、ポルトガル排

除後に生糸と絹織物の供給を定期的に確保できるか幕府はとても慎重になっていた。

その様な中、同じようにアジア圏内で力をつけていたオランダ東インド会社に目をつけ、幕府は当時オランダ商官長であったニコラスに聞き取りをした。ニコラスはオランダはあくまで日本とは経済的関係のみ徹し、幕府の要求どおり平戸から出島への移転と出島における幕府管理下の朝貢貿易の形成を順守する旨を伝え、更に日本による朱印船貿易は倭寇の海賊行為や禁教により日本から締め出されたスペイン・ポルトガルの報復を考慮すればかなりリスクが伴う、よってオランダ東インド会社に対外貿易を任せるほうが良いのではないかと説き伏せた。

なぜオランダ人は鎖国政策下に貿易関係を築くことができたのだろうか。実は江戸幕府はオランダとは国交を結んでおらず、オランダ資本で始まった世界初の株式会社オランダ東インド会社と貿易をしていたに過ぎないのである。オランダ東インド会社は 1602 年に現在のインドネシアの首都ジャカルタに位置するバタヴィアにその拠点が建設された。香辛料貿易によって得られる利益を追求した結果が、会社の拠点を東南アジアに築くことに繋がったのである。当時ヨーロッパにおける香辛料の需要は高く、需要に対して供給が間に合っていないほどの状態であった。その理由は東南アジア、南アジアから香辛料を運ぶイスラム商人がそのルートを抑えていたこと、そしてポルトガル、スペインと列強諸国がこぞって香辛料貿易の利権を管轄していたことが関係している。

1-7. オランダ

ここで、オランダの歴史を振り返ってみることにする。現在のオランダと呼ばれる地方は 16 世紀に独立を宣言するまでの間、長らく西欧に築かれた大国の一部として在るのみであった。フランク王国時代には低地諸国と呼ばれたこの地区にはフランドル地方があり、中世以降毛織物産業が活発化していた。

しかし、後にオランダとなる低地諸国は、ユーラシア大陸の西の端に位置し、緯度も高いその地政学上、毛織物産業以外の産業は上手くいかず、結果低地諸国は周りの大国に比べて貧しかった。

また、王国の政治の中心と深い関係がありながらも、海や川で隔離された場所であったためオランダは大国に属しながらもかなり独立していた。王国の代表として地方貴族がいながらも貴族が持つ影響力は政治の中心から離れた低地諸国では弱く、大部分の貴族家系は 1600 年頃までに途絶えた。もちろん、西欧社会において大きな力を持っていた宗教の力も貴族がもつ影響力と同様、本来ほどの力を発揮していなかった。低地諸国内に存在する教会はヒトレヒト司教区のみであり、その存在力と影響力は希薄であった。そのため教会と貴

族階級が重大な影響力を持っていない低地諸国では、力を持つ中心的な勢力は商人階級にあり自由都市を形成した。これらの都市は大国の統治下にありながらも独立的に発展し、オランダ黄金時代と称される 17 世紀オランダの経済的繁栄の基盤はこうした中世の諸都市の自由貿易によって形成された。

宗教改革以後、カトリックとプロテスタントの対立は宗教改革・反宗教改革という二項構造となって世界中へ広まった。反宗教革命勢力は台頭するプロテスタント勢力へ対抗するべく、また長い歴史の中で対立し続けてきたイスラム勢力の脅威に対抗するため、アフリカ大陸最南端に位置する喜望峰を通り、インド洋を経てアジア圏に進出する航路が確立され その航海の中でカトリック宣教師によるキリスト教を布教しその信者も着実に増やしていった。

先に日本の種子島への漂流をきっかけに、その後自らとの貿易の条件に幕府からキリスト教布教を許されたポルトガル、そのポルトガルを吸収し一気に世界覇権を握り、その勢いから太陽の沈まぬ国と称されたスペイン、両国ともにカトリックを信仰していた。

対照的に、後に独立しオランダとなる低地諸国として存在した地域では、元来貴族階級、政治的圧力、そして教会による宗教的な影響力が少ない地域であったため、自由精神風潮が地域内に存在しており新しいプロテスタント主義を受け入れる土壌が整っていた。そのためフランスで弾圧されていたユグノーと呼ばれるプロテスタントの一派であるカルヴァン派信仰者の多くが低地諸国へ亡命していた。

カルヴァン派とは、フランス人ジャン・カルヴァンにより誕生したプロテスタント主義の一宗派であり、カルヴァンは『キリスト教綱要』を執筆し、その著書の中で「魂の救済はあらかじめ神によって決められている」という予定説を唱えた。また信仰において「神に栄光を帰すこと、神に奉仕すること」が重要だと唱えた（寺島 2012c: 20）。

それまでのローマ教皇やカトリックとの戦いなどではなく、あくまで徹底して自らが神と向き合うその心性を唱えたことで、キリスト教をより純粹かつ民衆、つまり多数の社会的弱者たちの個々のものへと近づけたのである。また「自己の職業を神に与えられた天職として禁欲的に勤労すべし」とするカルヴァンの教義は、当時新しい産業社会構造の中で台頭し出していた事業主や技術職人、商人に強く訴えるものがあつた。それは禁欲、そして勤勉に神が与えた職業生活に生きることへの正当性を染み込ませたのである。なお、そうして職業生活に生きることを通じて得た経済的利益に関しては、無論肯定し、更に勤労に基づく営利と蓄財を正しい営為としたのである。

上述のとおり、低地諸国にはこのカルヴァン派の考えを寛容的に受け入れる下地があつたことに加え、商人階級が力を持っていたことからカルヴァン派は主に商人に強く信仰された。カトリックで卑しいとされる職業がカルヴァン派の「予定説」では神に認められている職業

であり、人が作ったものを横流しにしてもその行為自体が職業と考えられ、真摯に職業に取り組んでいるとされたのである。これはオランダが海運事業に強みを活かしきれた精神的な支柱ともなつたと考えられる。

スペイン王フェリペ2世は近代的統一国家確立を目的とした改革の一部として、新しい課税制度の導入を考えていた。この課税制度はより強固な中央集権化を目指したものであったため伝統的に経済的自治権を重んじる各都市はこの制度に大きく反発した。特に自由精神を培ってきた低地諸国はこれまで中央集権化とは名ばかりの環境下、長い歴史において自由な生活を営んでいた独自の風潮があった。よって、自由精神を守るべく低地諸国はスペインに強く反発したのである。したがって、この反乱は単に自由を擁護するためではなく中世社会から培ってきた既得権を守るための反乱でもあった。

また、経済的な理由のみならず反乱にはいくつかの重要なポイントがあった。それは宗教的な相違と低地諸国が自らの手で生きていこうとする独立への意識の芽生えであった。フェリペ2世は熱心なカトリック教徒で、彼は課税政策の他に統一政策の1つに当時帝国領内で急速に拡大していた新教であるカルヴァン派を含むプロテスタント主義を弾圧を掲げていた。スペイン国内においてカトリック教徒を唯一の公式な宗教とすることで国内の結束力を強固にし、更には反宗教改革の一環として台頭するプロテスタント主義を一掃することを目指していた。

低地諸国は長い歴史の中で常に大国の一部の属してきたが、徐々に低地諸国は自らの手で「独立」を掴み取りたいという意識が芽生えていった。1580年にポルトガルがスペインに併合されると、スペインを潰すことがオランダの独立という目的にかなうことだという認識になった。これは当時低地諸国がその地の利を活かし、イベリア半島と北欧を結ぶ仲介貿易と運送事業で徐々に経済的な力をつけていた真っ只中、1585年スペインフェリペ2世によりオランダ船のリスボン寄航が禁止されたことが関連している。ポルトガルが世界覇権を握っていた時代から始まる香辛料貿易による高い利潤の獲得は、アジアで獲得した香辛料をリスボンで各都市の商人に売りさばくことにあつたため、スペインフェリペ2世によるオランダ船のリスボン寄航禁止はオランダにとって死活問題であつた。

結果として、オランダが生き残るためにはスペインから独立を果たし、自らの手で香辛料貿易が継続できる環境を整えることにあつた。しかし、既にポルトガルを吸収したスペインは大国であり、そのスペインの利益に食い込み、追い越すことは容易ではない。そしてスペインに邪魔されずに自らアジアへ進出する新航路を探し、マゼラン海峡を越えて太平洋へと進出する航路でアジアへ進出したのである。つまり当時徐々に力をつけていたオランダには

アジア進出をするしか自らが生き残る術はなく、例え非常にリスクが高い航海であっても実行し富を得ることができたのはそれこそ歴史的な激動な時代の中で常に国家としての生死をかけた時代があったからである。

オランダ東インド会社とは 1602 年に設立された正式名称「連合東インド会社」（オランダ語名“Vereenigde Oost-Indische Compagnie”または”VOC”）のことを指す。オランダ東インド会社はそれ以前にあった多くの先駆的諸会社と呼ばれた貿易会社を統合して設立された。

オランダがアジア進出を始めてから 5～6 年の間に 65 隻の船がアジアへ派遣され、香辛料貿易において急速にオランダが大きなシェアを占めるようになった。これにより各企業間の競争が激化し利益が損なわれる問題が生まれた。ポルトガルが独占していた時代の香辛料貿易では香辛料の高価格に定められていたにもかかわらず、需要が供給を上回り慢性的にヨーロッパ地域における香辛料の需要を満たしていなかった。従ってオランダは国内すべての関連企業を 1 つの大きな会社に統合し、アジアの香辛料を安く仕入れ、ヨーロッパで高価格を一定に保つことで安定的な利益を得る構想を生み出した。そして彼らの目的達成のためには香辛料供給源を独占することが必要不可欠であった。

香辛料供給源を独占するために既に香辛料貿易で利益を成していた歴史的先駆者のポルトガルとスペインの強大な勢力と争いその供給源を確保することに加え、アジア各地で行われる香辛料の取引には、大量の金、銀が必要であり、日本で手に入れた金、銀、銅などを取引の際の決算手段として使用していた。そうして手に入れた香辛料などを持ち帰り、ヨーロッパで販売することで巨額の富を手に入れたのである。この背景にはアジア地域においてヨーロッパ産の工芸品などがあまり受けなかったといわれている。またオランダ東インド会社もアジアに対するヨーロッパ商品の供給を目的としておらず、あくまで香辛料による高利益の安定的享受が目的であった。よってオランダはマラッカを中心とする現在の東南アジア地域において最も必要とされていた金、銀、銅などを香辛料等を獲得するために使用する必要があった。

オランダ東インド会社の強みは圧倒的な物資の種類と構築した航路であった。これは江戸幕府がオランダ東インド会社のみと貿易をしていた理由に繋がる。中国は明後半から税金を銀で納める一条鞭法導入により銀が不足しており、逆に日本は中国製の生糸を必要としていた。またオランダに金、銀、銅を供給していた日本は当時中国産の生糸と綿織物を重宝しており、当時中国との貿易関係に築くことに失敗したオランダは中国船やポルトガル船に対す

る海賊行為をすることで生糸や綿織物を強奪し、日本との貿易に必要な物資の供給を行っていた。

オランダ東インド会社は本国オランダが行っていた仲介貿易を基盤に、それを陸路ではなく航路で世界中で行っていた。幕府はオランダ東インド会社を通せば世界中のあらゆるものが手に入ると考えていた。それはオランダ東インド会社に所属した多くのメンバーが自国を自慢していたことから容易に理解できる。実際当時アムステルダムには世界中の品が集まっており、アムステルダムで手に入らないものはないとまで人々に言わしめた。

多種多様な物資を確保と必要な航路をオランダ東インド会社が手にしていた理由、そして各都市で拠点を建て規模を拡大できた経緯には、当時はありふれた行為であった「海賊」や「密貿易」をベースとした物資の確保が上げられる。加えて、1623年にはアンボイナ事件によりオランダは力づくでイギリスを東南アジアから排除した。これらの点から、オランダ東インド会社が世界覇権を握れた理由は単なる幸運ではなく、彼らが自らの手で文字通り掴み取ったものである。

彼らは当初の狙い通りより安定的な物資の獲得と供給のために各地に拠点を建て、香辛料の供給源を独占していったのである。そうしてたくさんの拠点が東南アジアと始めとするアジア圏内外に誕生し、それぞれの販路を駆使し世界中で中継貿易を行いその利潤を得ていった。

一条鞭法とは明代の後期から導入された税制で、それまで物々交換であった市場に銀による貨幣制度を導入した。これにより中国では必然的に一時期大量の銀が必要であったが、中国国内の銀鉱山では既に産出量の減少が始まっており需要を見たすだけの銀を産出できていなかった。そのため、当時既に確立されていたフィリピンを経由するルートからメキシコ銀、そしてオランダ東インド会社を仲介人にし隣国日本から日本銀を調達していた。

銀は当時の主な鉱物である金、銀、銅の中で最も加工がしやすく、しかも多くの人が使いやすい金額であったため通貨として銀が選ばれた。金では額が大きすぎて使いづらい、また銅だけでは少額すぎてたくさん貨幣が必要になる。その間に当たる銀が、一番使い勝手が良かったため銀が流通することで経済活性化につながったのである。

日本産の銀とその品質を支えた技術力 日本には石見銀山を始めとする銀鉱山が多く存在しており、そのことは他国にも「銀の国日本」と知られているほどであった。オランダ東インド会社も「プラタレアス群島（銀の島）」と地図上で日本を呼称しており、そのことからオランダ東インド会社が日本へたどり着いたことは決して偶然の漂流ではないことが分かる。石見には精錬技術がなかったが、近くの港、最初は鞆の浦、後に温泉津、から博多や朝鮮

半島まで銀鉱石が送られていた。

1533年には朝鮮半島から灰吹法と呼ばれる銀と鉛りの合金から灰を使って銀を分解する製錬技術を取り入れて、石見での製錬に成功した。これは事実日本の銀の質の向上に大きく貢献した。純度が高く、そして世界の産出量の3割以上を占めたといわれる日本産の銀の需要は、隣国中国と香辛料貿易での利益を狙うオランダ東インド会社から非常に高かった。特にオランダ東インド会社の香辛料貿易は、日本産の銀がなければ香辛料を買い付けすることができなかったことから、日本産の銀がオランダ東インド会社の反映に直接繋がったと言っても過言ではない。

また日本は銀だけでなく、他金、銅の産出でも有名であった。しかし、日本産の鉱物の価値を高めたのは産出量だけでなくその質であった。当初日本の銅には銀が混ざっていることが多々あったが、朝鮮半島から伝わった銀銅分離の洗練技術を住友の先祖が堺（大阪府）で取得し、この技術を「南蛮吹」と名づけた。その後大阪の銅附吹屋に伝授し、これ以降日本から輸出される銅に銀が含まれなくなったといわれている。この結果、銅のインゴットと呼ばれる純度約99パーセントの純度を誇る棹銅が誕生した。

銅のインゴット（型銅）はオランダ東インド会社の要請により製造されたもので、ローズレッドの日本銅が人々を魅了した。イギリス本国ではジャパン・カッパーと偽った模造品が市場に出回るほどであった。このように日本産の金、銀、銅の質の高さは、世界でもとても評価が高く、それに伴い需要と付加価値が向上していたのである。

マルコ・ポーロが著した、かの有名な『東方見聞録⁴』中には「ジパング（日本）は東方の島で大陸から1500マイル離れた大きな島で、住民は肌の色が白く礼儀正しい。島では金が見つかるので、この島に向かう商人はほとんどおらず、そのため法外の量の金で溢れている。」と著している。

ポルトガル、スペインとの貿易関係を続けていく中で、キリシタン宣教師による植民地化の実態を知り鎖国政策を取った幕府であるが、その経緯があったのにも関わらず幕府が東インド会社と貿易を続けたのはやはり幕府にも利益があったからである。鎖国下幕府はオランダと国交を結んでいたわけではなかったため、オランダ東インド会社はあくまで貿易商人として見られていた。そのためオランダ幕府自身が東インド会社の出資者になっていたこともあった。

⁴マルコ・ポーロが1271年から1295年までの24年間、東方諸国で見聞したことを記した旅行記。主に元代の中国について記され、この旅行記の中で初めて黄金の国ジパングと呼ばれた日本がヨーロッパで紹介された。

そしてオランダ東インド会社も日本との貿易関係を重視していた。それは中継貿易による最終目的である香辛料の買い付けをするために必要な銀を手に入れることもそうであったが、加えて 16 世紀おわりから 17 世紀にかけての世界覇権は、常に誰が東アジア・東南アジアの海洋権を手に入れるかでもあった。そうした意味で、オランダ東インド会社にとっても日本との貿易関係の持続は非常に重要であった。

またインターネットもない時代であったため、オランダ本国と連絡を取ろうとすると 2 年くらいかかる上、オランダ東インド会社はもともと特許状を与えられた企業であったため、オランダ東インド会社が本国の指示を受けて動くことはなく、現地にいる商館長が適宜状況判断していた。

当時銀を大量に必要としていた中国に対し、日本は生糸を必要としていた。日本で生糸の国産化が始まるのは 18 世紀からであり、17 世紀当時は中国産のものを輸入して使用する必要があった。生糸は、江戸時代の身分制の下効果的に使用された。麻の服を着るのが一般的である中、絹の服を着ていれば身分の高い者という判断材料になり、見た目で身分を分かるようにしていたのである。

更に絹は、甲冑を作る際に装飾やパーツをつなぎ合わせるためにも必要であった。これは当時は徳川幕府により統一された平和な世の中であったが、多くの人々は戦乱が続いた時代を生き抜いたため「いつまた戦争に突入するかもしれない」という思いが常にあった。よって常に戦が始まったときのことを考え甲冑を準備していたのである。

当時の国際情勢は、中国と日本の国交は公式的には存在していない時代であったが、朱印船貿易等通商や貿易のみに限定されていながらもその接点は存在していた。日本と中国は共に自力で貿易することが出来ないという「建前」の中、両者の「本音」としてそれぞれの需要を満たすために中国製の生糸と、日本製の銀の貿易仲介を誰が行うかということになったのである。

最初ポルトガルが先行して貿易仲介を行っていたが、宣教師による関係でポルトガルとの関係は断絶し、その後出てきたのが唐船であり、オランダ東インド会社であった。

もともと幕府は生糸を調達するのにマカオ経由でイエズス会を通じた入手経路を使用していたが、その一方でキリスト教の脅威があり何とか追放したいと考えていた。しかし、生糸の供給はこれまで通りにする必要がある。そこで宗教的利益を求めないオランダ東インド会社に白羽の矢が立ったのである。長年布教活動をしていたイエズス会に比べ実績はないが、当時急速に成長していた点、そして何よりオランダ東インド会社もアジア諸国で中継貿易や

密貿易を行っていたため、幕府はポルトガルに変わる貿易仲介人をオランダ東インド会社に委託することを決断したのである。

1-8. 結論

当時の超現実主義者（リアリスト）達による真剣な外交戦略には各自の好都合・不都合による駆け引きが行われていた。日本側は国内の平安を保つために実行した鎖国政策の影響で日本の民間船による海外出航及び日本帰港が禁止されてしまう。これは同時に当時最高級であり、非常に需要の高かった中国産生糸の供給源を失うことになった。

鎖国政策が行われる前までは、イエズス会との交渉の末、彼らのもつ販路とマカオ拠点から得られる中国産の生糸を中継貿易し、日本が必要とする中国産生糸を供給していたが、結局キリスト教に対する不信感や他国にて宣教師たちがキリスト教を布教した後その国を植民地化している実態を知り、キリスト教を弾圧せざるを得なくなる。

時を同じくして、独立を目指し奔走するオランダの命運を背負う大きなプロジェクトによって生まれたオランダ東インド会社も、自らの目的であった安定的な香辛料貿易の実施及びヨーロッパにおける香辛料の安定的供給による高い利潤の享受をアジアにおける金、銀、銅の供給源を得る必要があった。

また倭寇による海賊行為と豊臣秀吉の2回の朝鮮遠征により関係が悪化した日本と中国との関係の無視できない。中国の属国であった李氏朝鮮を攻撃した日本は李氏朝鮮の宗主国の中国との関係も悪化させてしまったのである。

その中国も新しく導入した税制度で大量の銀の供給源を確保する必要があるのだが、倭寇の取り締まりの関係で海禁政策を取り、日本同様自国の民間船の渡航と民間船による貿易活動を禁止していた。

これら3者のお互いの利益を結び、支える役割を担えたことは、オランダ東インド会社が急速に発展し、世界覇権を手にすることが出来た理由であると考えられる。また、オランダ東インド会社にとっても、当時の世界覇権は東南アジアと東アジアの海洋権を掌握できるた国にあったので、日本との貿易関係を維持することはオランダ東インド会社が世界覇権を握る上で非常に重要な点であったことが指摘できる。もちろん運や偶然だけでなく、突如訪れた絶好の機会を、幕府に対する進言により自ら立候補し、そして何より役割をしっかりと果たすことで生み出した機会をしっかりと掴み取ることができたことも、オランダ東インド会社と日本の経済関係を見る上で重要な事実である。

政治と経済が同一であった時代、オランダの国土が有する空気は宗教による価値観が根ざしていた西洋諸国の中では異質なものであったに違いない。実際、オランダ東インド会

社が経済的利益のみを求めて活動していた点は当時他のキリスト教を信仰する西洋諸国から非難を浴びていた。しかし彼らが持つ自由精神により、政治と経済を分けて考えることができるという視点が生まれたからこそ、結果的に日本と中国の非公式な交流は続いたのである。このような柔軟な視点は、どのような環境や状況であっても自らが求める指針に向けて歩みを止めないオランダ東インド会社が歩んだ経験とそれに伴い生まれたオランダ東インド会社としての誇りが垣間見れる。

オランダ東インド会社と日本の関係はあくまでも経済的なものであったことは、日本と中国の政治的には国交のない時代に交易はあるという「本音」と「建前」を見事に再現することに成功し、その複雑な2重構造を支えた存在になった。この点から考えても、本音と建前を常に上手く「活用」しながら時代を生きていた中国、日本、そしてオランダ東インド会社の3者の関係は非常に微妙なバランスで紡がれたものである。3者共に常に現状と時代の行く末を見据えた本物のリアリストであったからこそ国交なき交易は必要とされ、そして曖昧ながらも細く続いたのである。

第二章 三浦按針から浮彫りにされた世界史と日本史の外交

17 世紀の世界の海上貿易は、スペイン、ポルトガルを駆逐して覇権を握るオランダと、これを懸命に追いかけるイギリスとの競争という形で第二幕の展開が始まる。他方で、同時期の日本では、新しい国造りの契機が日本の内と外の両方から生じる。大石（2009）は、国内の契機としては、15～16 世紀に発生した地域権力者としての戦国大名による自国領内の法秩序や流通システムを形成し、鉄砲を用いた軍隊を通じて国家統一へと向かい、日本の大部分を版図とする新しい国が作られていくと説明する。また、国外の契機としては、大航海時代という世界規模で、キリスト教と交易をパッケージに行った欧州の圧力の動きであったと説明する。

国内外ともに混沌としたパワーゲームを繰り広げ、その中を生き抜く中で、日本は、国家としての自己認識が育み、国家のかたちが築かれていく過程であったと思われる。

江戸時代の 200 年以上にわたる「鎖国」の体制について、大石（2009）は、16 世紀のポルトガル・スペイン・オランダ・イギリスなど西洋列強のキリスト教布教と植民地獲得を目指す「第 1 次グローバリゼーション」と、19 世紀のアメリカ、ロシア、イギリス、フランス、プロシアなど産業革命や市民革命を経験した欧米列強が資本主義拡大を目指す「第 2 次グローバリゼーション」の間に挟まれた時代の国家体制・外交体制であったと述べている。2 つのグローバリゼーションに挟まれた時代状況にあったからこそ、日本は 2 世紀以上にもわたる鎖国という名の政治体制を通じ、日本が、自らの立ち位置を考える時間になったものと思われる。この章では 17 世紀初頭に日本の外交政策の要となったイギリス人、ウィリアム・アダムズの生涯を浮彫りにしながら、日本と海外の交流史について論じる。

2-1. 三浦按針と徳川家康

鎖国の時代に、何故、オランダだけが日本と通商関係を維持できたのかについて考えると、オランダの商船リーフデ号 De Liefde の存在に注目する必要がある。リーフデ号は、エラスムス号と呼ばれ、船尾にエラスムス像を付していた⁵。オランダが生んだルネサンスの人文主義者エラスムスは、スペインやポルトガルが信奉するカトリック教会の狂信を嫌い、人間としての思想の自由を尊重した人物である。

日本史の転換点ともいえるべき 1600 年 9 月の関ヶ原の戦いの 5 か月前の 4 月 29 日、現在の大分県臼杵（うすき）湾の海岸に、日蘭交流の原点（出発点）ともいえるべき、リーフデ号が漂着した。リーフデ号は、日本に漂着したといわれるが、実際は、対日交易の目的を持

⁵ KLM オランダ航空編（1994）

った航海であり、船に積み込んだ武器（大砲 19 門、小銃 500 艇搭載）、毛織物・羅紗を日本に売り、そこで手に入れる日本の銀（主に石見銀山）でアジア諸国の香辛料を手に入れて帰国することになった。

三浦按針らが所持していたアジアの海図に、石見沖「銀鉦山群」と記載されている。島根県の石見銀山は、銀の国日本と石見銀山として知られていたのである。

欧州では、胡椒などの香辛料は、調味料や薬として古くから求め続けた貴重品であった。これまでイスラム商人によって紅海及びペルシャ湾経由で地中海に送られてベネチア商人が独占していた胡椒貿易に、ポルトガル・スペイン、続いてオランダが新しい回路を開いた。家康は、リーフデ号の乗組員・英国人ウィリアム・アダムス（日本名、三浦按針）との面談を通じて、オランダは布教目的でなく専ら交易を求めていることや、スペイン、ポルトガルの旧教徒国と新興国オランダ・英国との対立などの複雑な欧州の政治力学を見抜いた。オランダ船より先着して既に日本に布教・交易活動を始めていたカトリック教会のイエズス会の宣教師は、敵対する新教徒の国オランダからの漂着民を歓迎しなかった。カトリックの宣教師は、リーフデ号の乗員は海賊であるとして、彼らを死罪にするよう家康に助言した。

しかし、家康は、三浦按針の知性・人格、そして博学に関心を持ち、幕府の外交顧問として迎えた。また、日本の外交通商窓口をオランダにする構想をもつとともに、ポルトガルとスペインの仕事をオランダに肩代わりさせ交易を行うこととした。

キリスト教の布教と鉄砲などの武器輸出を混ぜてくるポルトガルやスペインとの交易戦略に対して、家康（1543-1616）は警戒し、そしてキリシタン禁令（1613）を行うことになる。そして、1624 年スペインを追放、1639 年ポルトガルを追放するときには、幕府は、オランダからポルトガルと同量の生糸を輸入できる言質を既にとっていた。17 世紀日本は、輸入生糸の国内需要が大きかったことを見越しての対処である。

キリスト教の扱いについて、信長が宣教師追放したのは「布教権の禁止」であり、秀吉の場合は「宣教全体の禁止と伴天連追放」であった。家康は、日本の社会を神仏儒（神道・仏教・儒教）によることとし、禁教に踏み切った。キリスト教は日本にとって災いと見切ったのである。

2-2. ウィリアム・アダムスはいかにして三浦按針へとなりえたのか

三浦按針は、もともとウィリアム・アダムスという人物であり、三浦群逸見村 250 石の領主、そして旗本身分として徳川家康から授かった名前である。三浦按針という英国人がオランダ船リーフデ号で豊後国（現在の大分県臼杵市）に辿り着いた時は 35 歳であった。1600 年 4 月、つまり関ヶ原の戦いが半年後に迫る時であった。日本史の転換点ともいえるべき

年に不思議なオランダからの来訪であった。オランダが日本に商館を設立し、通商できるように按針が尽力した背景には、彼が1年10ヵ月もの間、オランダ人組員と命がけの航海を乗り越えた経験があったからと思われる。

1609年、三浦按針は平戸でオランダからやってきた公式使節団を乗せた船を出迎えている。使節団一行は、駿府の徳川家康のもとを公式訪問し、三浦按針の尽力により平戸に商館を設立するという満足できる果実を手にした。

オランダ使節の一人ニコラース・ポイクは、この時のことを記した「駿府旅行記」の中で、三浦按針を大切にしなければならないという趣旨のことを述べている。その理由について、「何故ならその者（三浦按針）が良い暮らしをしている男であり、しかも皇帝（徳川家康）のもとで大きな尊敬を得、かつ親密な関係にあるからである⁶」と記している。さらにオランダが日本において貿易を有料に運ぶためには、アダムスに仲介してもらう必要があるとし、「彼（三浦按針）の献身は我々にとって大いに役立つだろう」とも述べている。

実際、ポイクは按針に「皇帝のもとへ着いたら、我々の件を宜しく頼みたい。また我々が当地に残しておくつもりの人々と長い交際を保ってほしい」と要求し、それに対し按針はそのようにする旨を約束し、「自分はオランダ人たちの友人であり、オランダを自分の祖国と思っている」と言った。そして按針はその言葉通りに、日本に英国商館が建った後も、オランダ人への便宜供与を怠らなかった。

三浦按針は1564年9月24日、英国ケント州ジリングムに生まれた。3歳の時水夫であった父が死亡、12歳から船大工ディギンスに弟子入り、24歳まで修行した。1588年、英国の貨物補給船リチャード・ダフィールド号船長としてスペイン無敵艦隊との海戦を支える任務に従事した。1598年6月、実に22か月の航海を経た漂着であった。リーフデ号には出航時に約110名が乗り込んでいたが、漂着時の生存者はわずかに24名で、漂着後も数日で6名が死んだという。生き延びた者の中に英国人のウィリアム・アダムス（後の三浦按針）とオランダ人のヤン・ヨーステンがいた。大西洋を南下して南米大陸の南端マゼラン海峡を回り、チリを経て、太平洋を横断して日本に辿り着いたのである。

また1593年～95年にはオランダによる北極海からベーリング海峡を通してアジアに至る北極海航路の探検にも参加し、北緯82度まで到達したが、17世紀は地球寒冷期で探検は頓挫。この試みには大航海時代に遅れをとったオランダが、先行するスペイン・ポルトガルに邪魔されないアジアへの回路を求めていた事情がある。こうした体験を経て1598年

⁶ 按針タイムズ 14号 2015年5月12日

6月、ロッテルダム組合がアジア交易を求めて派遣する5隻の船団に参加してロッテルダムを出港した。5隻には実弟を含め12名のイギリス人も乗船した。エリザベス一世治世時の英蘭関係は良好で、テムズ川へのオランダ船入港も自由であった。17世紀後半には台頭するロンドン商人の圧力を背景に三次に亘る英蘭戦争の時代を迎えるが、三浦按針の時代まではイギリスとオランダはスペインと戦う盟友であった。

出港時三浦按針は旗艦ホープ号に航海士として乗船、艦隊全体の航海長でもあったが、風向きが悪く4ヵ月もギネア湾に逗留中司令官マヒューが死去。三浦按針はリーフデ号に移る。この航路はあまりにも悲劇的で、ヘーロフ号はオランダに帰航。4隻がマゼラン海峡を越えて太平洋へ入ったが、二隻はスペイン艦隊により没収、撃沈。残された2隻もセント・マリア島で多くの乗船が原住民の襲撃で虐殺され、1600年4月19日、リーフデ号のみが豊後臼杵に到着した。24人が生存していたが漂着後6人が死亡、18人となった。「漂着」とされるが、対日本交易の目的をもった航海であり、日本に武器や毛織物売り日本の銀を入手する意図であった。石見銀山産出の銀の存在を認識していたことは、リーフデ号が所持していた海図の石見沖「銀鉱山群」の記載からも明らかで、この頃日本産の銀が世界の交易サイクルに組み込まれていた。

家康との面談の通訳を務めたイエズス会宣教師は冷酷で、「乗員を海賊として処刑すべし」と何度も進言した。1549年のザビエル鹿児島上陸以来日本での布教はイエズス会が先行しており、そこにプロテスタントのオランダ人、英国人が現れた衝撃は大きかった。つまり、リーフデ号は、ポルトガル・スペインの先行という大航海時代を象徴していた。ちなみに1580～1640年の60年間はスペインがポルトガルを併合し、ポルトガルという国は存在しなかった。本能寺の変（1582年）の少し前から家康時代を経て、家光の寛永一六（1639）年の鎖国令までイベリア半島はスペインが支配していた。そのスペインも1588年に無敵艦隊が英国艦隊に敗れて衰退に向かい、その戦いに参加した男が日本に現れたのである。リーフデ号の生存者の中からも処刑への恐怖心から2名が仲間を裏切りイエズス会に擦り寄る混乱の中三浦按針は必死に徳川家康に語りかけた。この時徳川家康は1598年の豊臣秀吉の死を経て豊臣政権の大老の一人として大阪城西の丸に陣取っていた。

徳川家康は何故三浦按針やヨーステンの命を救い、登用したのであろうか。通訳のイエズス会宣教師の死罪具申にもかかわらず、家康は二人の話に耳を傾けた。そして彼らが布教目的ではなく専ら交易を求めていることや、ポルトガル・スペインと新興のオランダ・イギリスの対立など複雑な欧州の政治力学を見抜いた。

リーフデ号漂着が1600年4月19日、三浦按針との最初の大阪城での面談は5月12日、6月12日に会津・上杉攻めに出発するまでに3回面談している。大阪を空ければ石田

三成が上杉景勝と呼応して家康対討のため挙兵すると想定しての会津攻めであった。三浦按針は四二日間大阪城の牢に入れられたが、解放後家康を追って江戸へ。リーフデ号も堺から浦賀への回航を命じられ廃船前の最後の航海に出る。家康は7月24日光成の挙兵を受け下野小山より西上、9月15日の関ヶ原の戦いに臨んだ。この間に徳川家康は三浦按針の話聞き世界情勢に気づく眼力を持っていた。欧州での新旧キリスト教の戦い、新興国英蘭の台頭を見抜いた。豊臣秀吉の朝鮮出兵による半島との緊張緩和への配慮にも通じる国際関係の構想力を徳川家康は持っていたのである。

三浦按針とヨーステンの二人は家康の外交や航海術の顧問のような役割を果たすことになり、徳川家康は1601年に朱印船制度の確立を決意、1635年に幕府による海外渡航禁止までに365隻もの朱印船がアジアの海に向かったという。日本の「大航海時代」とでもいうべき時代が30年以上も存在したのだ。三浦按針とヨーステンも朱印状を得て、安南（ベトナム）やシャム（タイ）に向かった。異国の地日本にあって、按針は自身のアイデンティティを守りながらも日本の文化や習慣を尊重し暮らした。按針は逸見の領民たちや、江戸屋敷のあった日本橋按針町の人々から慕われた。人々は死後200年以上たっても彼の法要の際、寄進をしている。これほど慕われた外国人は稀である。按針は異国文化交流のフロンランナーであり、グローバル化時代を生きる私たち現代人にとって良きモデルとなり得る。

1594年9月	英国ケント州ジリングム（現メッドウェイ市）で誕生
1576年ごろ	船大工の見習いになる
1588年8月	英国海軍に入る
1589年	ロンドンで結婚
1590年	ロンドンの貿易会社に就職
1593年	北西航路の探検に参加
1598年6月	オランダの東洋遠征隊（5隻）に航海士として参加。ロッテルダムを出港
1600年4月	按針の乗ったリーフデ号、豊後（大分県）臼杵に漂着
1600年5月	大阪城で徳川家康に謁見
1600年9月	関ヶ原の戦いで、リーフデ号の積み荷の武器使用か
160?年	江戸・日本橋（現・室町1丁目）に屋敷を与えられる
160?年	大伝馬町の名主の娘・雪と結婚、2人の子を授かる
1604年	伊東で日本初の洋式帆船を建造

160?年	三浦群逸見村 250 石の領主に。三浦按針の名を与えられ旗本身分の侍となる。
1609 年	平戸のオランダ商館設立に貢献
1613 年	平戸の英国商館設立に貢献
1614 年	大阪冬の陣で英国商館員として軍需品輸入
1616 年	家康の死後、東南アジア貿易に従事
1620 年 5 月	病気により 55 歳の生涯を平戸にて閉じる
1623 年	英国商館閉鎖

表 2. 三浦按針の生涯

漂着したオランダ船リーフデ号の乗組員全員の命を託された三浦按針は 1600 年 5 月 12 日、大阪城に到着。五大老中筆頭の徳川家康と謁見した。徳川家康による尋問の一部始終は、三浦按針本人が後に母国にあてた手紙を引用しながら紹介する⁷。

「王（徳川家康）の前に出ると、王はじっと私の方に眼を注いだが、非常に好意を持っているように見えた。私に向っていろいろ合図をされたけれど、納得のいくものもあり、さっぱり訳の分からないものもあった。結局 1 人のポルトガル語の達者な者がやってきた。王はこの人を介して、一体私がどこの国の者なのか、こんなに遠いこの国まではるばるやってきたのには何か訳があるのか、そんなことを尋ねた」

三浦按針は徳川家康の質問に対し、自分たちの国のことを述べ、貿易を目的にやってきたのだと答えた。

「王はまだ、わが国が戦争しているかどうかを尋ねたので、私は答えて、スペイン人とポルトガル人とを向こうにまわして戦っているけれども、そのほかの国々とは平和につきあっているといった。それから後で、王は私に何を信仰しているかと尋ねた。私は、天と地を造りたもうた神を信じているといった。そのほか宗教のことなどいろいろ質問された。どんな経路でこの国までやってきたのかと聞かれ、私は持ち合わせの世界の海図を王に示した。マゼラン海峡を通過してきたのだという、王は驚いて、私がでたらめをいっているのだと思っているようだった」

緊迫した状況下でありながら、徳川家康の尋問に三浦按針が冷静かつ誠実に答えている様子が見て取れる。話は夜中まで続いたというから、徳川家康がいかに三浦按針に興味をいだいたかがうかがい知れる。

尋問が終われば、三浦按針はまた牢へ入れられた。40 日間というもの、仲間についての情

⁷ 按針タイムズ 第 5 号 2014 年 8 月 12 日より引用

報もないまま三浦按針はひとり牢で不安な日々を送った。

大阪に来て 41 日後、3 度目の尋問の後、ようやく徳川家康は裁断を下す。それは、三浦按針らリーフデ号の船員たちは「日本にいかなる被害も損害ももたらしていないゆえ、処刑する理由も道理もない」というものだった。

この徳川家康の判断は、のちに初代将軍となる人物にふさわしい毅然としたものといえる。猜疑心の強い小心者の支配者だったら、誹謗中傷を真に受けて処刑していたことだろう。徳川家康の人柄の一端を伝える貴重な事実である。

リーフデ号は大阪にほど近い堺の港に回航されていた。釈放された三浦按針は、そこで元気になった仲間たちに再会した。彼らは三浦按針を見て驚き、そして喜びの声を上げた。徳川家康の命で処刑されてしまったと思っていたのである。

感激の再開の後、船内の様子を調べてまわった三浦按針は、略奪者たちによって一切の物が持ち去られたことを知る。残されたものは、家康に見せるために持ち出していた海図と着ていた服だけだった。

言葉の通じない異国において、通訳者はことの成り行きを左右する。リーフデ号の船員たちにとって、通訳にあたったイエズス会士やポルトガル人は、三浦按針が「不倶戴天の敵」と評したとおりであった。三浦按針らは、戦争敵対国の民で異教のプロテスタントを信仰する自分たちを、彼らが決して良くは思わないと知っていたのだ。

「私が牢にいた長い間、イエズス会士とポルトガル人は私やわれわれの船員についてのありとあらゆる好ましからぬ話を王（徳川家康）にしており、われわれのことを他国から盗みを働く盗賊であると伝えていました。」

イエズス会士やポルトガル人は、リーフデ号の船員たちを釈放すればそのうち仲間がやってきてこの国を襲うだろう、彼らをすぐに国外追放するか処分すべきである、と毎日のように徳川家康に進言した。そして海賊である証拠として、リーフデ号の積み荷に大量の大砲や鉄砲、火薬があったことを挙げた。確かにそれらの積み荷は、三浦按針らにとって不利な事実だった。しかし積み荷についての徳川家康の尋問に対し、三浦按針は包み隠さず全てを話した。三浦按針の率直さが、かえって、徳川家康の信頼を得る結果となったようだ。下級階級出身だったが、航海士として経験と能力に優れていた三浦按針は、徳川家康に世界情勢や地理、幾何や天文学を伝えている。三浦按針を通して見えてくる徳川家康は、従来のイメージとは違う大胆で進取の精神に富んだ人物である。

徳川家康は、三浦按針から西欧の宗教情勢や敵対関係について情報を得ることができたおかげで、大航海時代の当時、大国による宣教と侵略の構図を知るところとなる。日本が大国

による植民地化を免れたのは、三浦按針のおかげと言っても過言ではない。

三浦按針を外交顧問として重用した徳川家康は、西欧の大国との外交という難題を乗り切ることができた。またそれにより経済を立て直し、国内の大名たちに厳然とした力を示すことができたのである。三浦按針の導きにより西欧の最新技術を導入したことは、天下統一を実現する一因ともなっている。

徳川家康は世界を見通すための眼として三浦按針に大きな信頼を寄せており、三浦按針から学ぶ幾何学や天文学は大変、徳川家康に興味、関心を引き起こさせた。三浦按針は船長であったため元々このような知識を持っていたのだ。また、西欧の宗教情勢や敵対関係についての情報は、鎖国していた江戸時代、江戸幕府にとっては大変貴重な情報であり、これも三浦按針を信頼し、世界を見通す眼として認めた理由である。

三浦按針は、徳川家康との面談でも、オランダ船で来訪したにもかかわらず英国の話に力を入れている。英国が、スペインとは戦っているが他の国とは平和な関係にあること、マゼラン海峡を越えてスペインによる妨害を避けて太平洋航路で日本に来たことを語り、徳川家康を驚かせた。三浦半島（現在の横須賀市逸見）に所領を与えられ、サムライ三浦按針となって徳川家康外交顧問としての影響力を高めるにつれて、英国と三浦按針の関係は微妙になる。エリザベス一世を継いだスコットランド王ジェームズ一世の英国は、三浦按針のアドバイスもあり日本との交易を望む使節を送る。1613年6月英国船クローヴ号が平戸に到着、船長のセーリスや平戸の英商館長コックスなどは日本での活動について三浦按針に頼らざるを得ない一方、日本人化した三浦按針には疑心暗鬼であった。なぜなら、過去にスペインからの使者として来たビスカイノの傍若無人な振る舞いが家康の怒りを買ひ、貿易どころか全ての交渉が水の泡になったことがあり、その二の舞にならないよう、どうしても日本側寄りにならざるを得なかった。

しかし、三浦按針もしたたかな面があり、英国東インド会社の職員（1613～17年）として英商館に協力しつつも必ずしも英国だけに肩入れしようとはしなかった。

三浦按針の活躍で徳川家康から国王ジェームズ1世への返書を受け取った英国船の総司令官ジョン・セーリスは、上機嫌で駿府をたった。

生立を前に、三浦按針にはひそかな計画があった。それは家康に、セーリスとともにクローヴ号で母国に帰る許しを得ることだった。日本での生活は13年。もはやこの機を逃しては2度とチャンスはないと思われた。三浦按針はまず、老中の本多正純に、そのことを徳川家康に取り次いでくれるよう頼んだ。しかし正純は、「家康公は按針の帰国をいまだかつてお許しになったことがない」と断った。按針は諦めなかった。彼はじかに家康に許しを願い出

たのである。東インド会社に送った手紙に、三浦按針は次のように書き記している。

「私は皇帝（徳川家康）が機嫌のよい時を見はからって、勇気を持って御前に進み出た。そして私に授けて下さった領地（逸見）に関する書き付けを懐から取り出し皇帝の前に置いた。私は皇帝より賜った寵遇に深く御礼を申し上げた上で母国に帰還したい旨お伝えした。皇帝は私の顔をじっと見つめて、それほど母国に帰りたいのか、と尋ねられた。私は心の底から願っていると答えた。皇帝は、私がとてもよく尽くし礼節よく振る舞ってきたので、無理に引き留めては過ちとなろう、と言われた。」

按針は晴れて帰国を許されたのだった。

「退出しようとした時、皇帝は、もし今年出発したくなければ、別の船が来るのを待ってから出港しても良いぞと言われた。そして、またこの国に戻ってくることがあれば、持って来てほしい品があると言われた」

家康より、許しを得た三浦按針は、「どれほど嬉しい思いで司令官のところに戻ったか、言葉で表すことができないほどだった」しかし約1ヵ月後、平戸に着いた時には、彼はその意志を一転させていた。イギリスに戻るクローブ号に乗らなかったのだ。

三浦按針は手紙に、「私はクローブ号で国に帰りたと思っていた。しかし司令官が私に無礼な振る舞いをしたのでその考えを変えた」と記している。日本では徳川家康の重臣として地位もあり、領主となり妻や子を得て尊敬されていた三浦按針だった。しかしイギリスでの身分の保証はない。セーリスにとって、確かに三浦按針は使命を首尾よく成ささせてくれた最大の功労者だった。しかし日本の生活になじみ、日本を尊重する三浦按針をセーリスは最後まで理解できず嫌悪さえ覚えたようだ。下層階級出身の三浦按針に対する差別意識がそうさせたのか、彼は16歳年上の三浦按針を侮辱した。

セーリスは、彼を派遣した英国東インド会社から、何事も日本の王から絶大な信頼を得ている三浦按針に意見を聞いて進めるように、と命じられていた。三浦按針に会わないことには、何事も始まらない。ゆえにセーリスは、一刻も早く按針と連絡を取りたかった。それは三浦按針も同様だった。バンテンからの通信により情報を得ていた三浦按針は、平戸を離れる際に定宿の主人善三郎に「英国船が到着したら手渡すように」と手紙を託していた。事の次第を聞いた法印は早速使者を用意し、三浦按針宛のセーリスの手紙と、家康のもとに船の到着を報じる報告書を持たせ江戸に向かわせた。

しかしあいにくとその使者は、江戸をたち駿府に向かった三浦按針と行き違いになった。その上逸見にも立ち寄ったため、かなりの日数を無駄にってしまった。結局三浦按針に手紙が届いたのは7月半ばだった。こうしたセーリスと三浦按針の間に起こる不幸な手違いがやがて2人の気持ちを遠ざける要因となる。三浦按針がバンテンの商館に送った手紙が届く前

に、セーリスが出航していたこともその1つだ。

さて、すぐさま駿河をたつた三浦按針は17日後に平戸に到着している。当時歩いて江戸から平戸まで40日かかったといわれており、17日というのはかなり早い。

日本における先行きの鍵は1人三浦按針の手中にあった。後にセーリスが紀行文に「私はできる限り丁重に（三浦按針）を迎えた」と記しているように、彼の機嫌を取るため、セーリスはずいぶん気を使ったようだ。

セーリスは歓迎の意を表すためクローブ号を美しく飾り、敬意を表す数発の祝砲を撃った。また、法印の助力で商館として借りた館に按針を招待し歓待した。

しかし、意外にも予想は裏切られてしまう。何故なら、まるで日本人のような立ち居振舞いで、日本の国を称賛し愛着をもって紹介する三浦按針に驚きを隠せなかったからだ。

セーリスらとの会談で、日本との交易が順調に行くかどうかを尋ねられた三浦按針は「他の国くらいもうけられるよう全力を尽くす」と約束した。その答えにセーリスらは満足しなかった。他のどの国よりも母国の利益に貢献しようという確約を期待していたのだ。

セーリスらは失望したが、三浦按針が大切な人物であることには変わらない。セーリスは彼に「商館内のどの部屋でも使ってくれ。コックに何でも好きな料理を作らせよう」と申し出た。

しかし三浦按針はすべて断った。三浦按針は手紙の中で日本について、「この人々は気立てが良くて非常に礼儀正しく、戦争においても勇敢です。（中略）市民は非常に社会的秩序のある方法で統治されており、これほど素晴らしい管理政策により統治された国は世界のどこにもないかもしれません」と紹介している。

すでに日本での生活は13年近くなっていた。日本の習慣になじんでいた三浦按針には、日本を蔑視し、ともすると狼藉をはたらく英国の海の男たちは疎ましく感じられたのかもしれない。しかしセーリスが託された日本での使命を果たすことは、按針にとっても同じ願いであることに間違いはなかった。

また、将軍秀忠に会うために江戸へ来たセーリスは、三浦按針に薦められた浦賀港を見て「船舶にとって申し分ない港だ。ロンドンの町を流れるテムズ川のように、船が安全に航行できるであろう」と褒めている。しかし、この後も二人の仲は修復できず、三浦按針はセーリスからの帰国の誘いを断ったのだ。

イギリス人の三浦三浦按針がオランダ船団に乗り込んだ背景には、スペインとの対立があった。16世紀初めのカルヴァンやルターによる宗教改革で、キリスト教はカトリックと新教のプロテスタントに分かれた。それは、カトリックを信仰するスペインやポルトガル

と、プロテスタントを信仰するイギリスやオランダとの争いに発展した。スペイン領だったネーデルランド北部（オランダ）は、スペイン国王による新教徒弾圧や重税政策に反抗して1568年に開戦し、81年に独立した。これに対し、スペインのフェリペ2世は、統治していたポルトガルのリスボン港からオランダ船を閉め出す策に出た。同港でアジアからの絹や香辛料などを仕入れていたオランダにとっては大きな打撃だった。一方、イギリスは1588年、本国に侵攻しようとしたスペインの無敵艦隊を英仏海峡で迎え撃ち、見事に勝利した。有名な「アルマダの海戦」である。これらのことから、スペインを共通の敵とする両国が歩み寄った。

徳川家康は三浦按針によって、欧州にはスペインやポルトガルと戦う国の勢力があること。また1つだと思っていたキリスト教にもカトリックとプロテスタントの二派があり、一枚岩ではない、ということを知った。この三浦按針の情報のおかげで、徳川家康は外交を大きく方向転換することができた。

1611年、徳川家康の願いをかなえるかのように日本にやってきたのが、セバスチャン・ビスカイノだ。その2年前、フィリピンからスペイン領メキシコへ向かう途中に遭難したスペイン船を、徳川幕府が救助した。彼は、その答礼大使だった。十年来、スペイン領メキシコとの通商を望んできた家康である。

ビスカイノの来訪に、実現への期待を寄せていただろう。しかし、正式な外交のスタートとはならず、むしろ両国の間に相いれない決定的な違いがあることが明らかになった。それは外交と宣教との関係においてだった。スペインが日本との外交において、何よりも優先して求めたのは、キリスト教（カトリック）の宣教だった。ビスカイノがスペインの意向として提示した条件は宣教師の派遣許可と優遇。併せて、プロテスタントを信仰する敵国オランダを追放することだった。1587年、秀吉が配布したいわゆる「バテレン追放令」は破棄されず、徳川政権においても継承されていた。しかし貿易と宗教が密接な関係にあることを察知した家康は、宣教を黙認する対応を取っていた。宣教師たちに大阪、京都、長崎での居住を許可する免状さえ与えたほどである。スペイン商船を招来すべく、さまざまな努力と気配りをしてきた家康だったが、ビスカイノが示した条件をそのまま受け入れるわけにもいかなかった。何よりも家康が不満に思ったのは、これまで何度も求めてきた鋳山技師の派遣が一向に実現しないことだった。家康はスペイン国王への返書に、日本はキリスト教の布教を禁止していることを記し、ただし通商のために船の往来があることは歓迎すると示した。

また、オランダ人追放も拒否した。スペインとの外交が不調に終わったことには、三浦按針が大きく関わっている。三浦按針は、日本がスペインと貿易することに反対したわけでは

ない。浦賀を外交の窓口とすることを勧めたのも三浦按針だった。三浦按針は外交顧問として、徳川家康に対しその都度、適切なアドバイスをしたにすぎない。しかしそれは結果としてスペインに恨まれることとなる。

答礼大使として訪れたビスカイノだが、それは表向きで、本当は日本近海にあると言われた金銀島の探索が狙いだった。ビスカイノは家康に、メキシコからの商船を入港させるために、日本沿海の測量を許可されたいと申し出た。暴風雨により日本に避難することが多いため、沿岸の地理を知っておく必要がある、というのが言い分だった。家康から、そのもっともらしい申し出について相談を受けた三浦按針は、スペインの野望について述べ、測量に反対した。

すなわち、スペイン国王は他国の征服を望むとき、その手段としてまず宣教師を送り込む。そして信者となった民衆を権力者への対抗勢力とし、容易に征服できるよう利用する。ドイツや英国、オランダなどが、宣教師を入国させないのはそのためだ。また欧州では海岸線を外国人が測量するのを許す国などない。それは侵略のための準備にほかならない。このように三浦按針は進言したのであった。三浦按針の話を重くうけ止めた家康だったが、沿岸測量については許可した。徳川家康はすぐに手を下してはスペインとの貿易が無に帰すと判断し、時機が訪れるのをうかがうこととしたのである。

2-3. 結論

江戸時代を生きた将軍はしっかりと自分の言葉に責任を持っており、現代人よりも言葉の重さというものを十分理解していた⁸。日本の政権を握っていた徳川家康は自分の考えを主張すると、その後どのような出来事が待ち受けているのか分かっていたのである。日頃からそのように自分の行動に現代人よりも責任を持って行動、外交をしていたことが、時代の先を見通す力へと養われていったのではないだろうか。

なお、三浦按針の墓の近くには船長である三浦按針をはじめとするリーフデ号乗船者達の名前が書かれた石碑がある。昔から長崎平戸、現地の人は三浦按針らを祀っていたと考えられるが、現段階の研究では三浦按針の遺体は見つかっておらず、これからの調査課題ともいえる。

また、三浦按針が徳川家康からウィリアム・アダムスではなく三浦群逸見村 250 石の領主として三浦按針の名を与えられ旗本身分の侍となった年は、伊東で日本初の洋式帆船を建造した 1604 年から 1609 年に平戸のオランダ商館の設立に貢献した間であると推測さ

⁸ 出所 長崎大学木村直樹准教授聞き取り調査より

れている。三浦按針は徳川家康の外交顧問として現在のグローバル化時代の先駆けとなって活躍した。三浦按針は幾何や天文学を伝え、徳川家康の教養を高め、外交や戦術のスキルアップに大きく影響を与えた。

徳川家康と三浦按針は互いにリアリストであったのではないかとの説がある⁹。お互い、利用せねば、また、生き残るためにはどうすべきであるか、両者とも必死で考え、賢かったのである。

さらに、三浦按針は、徳川家康から朝鮮語とロシア語を学べと命じられた。日本の江戸時代において、鎖国と呼ばれていた期間があり、その期間に開かれていた4つの地域を四つの口と呼ぶ。まず一つ目が長崎口だ。幕府直轄の唯一の開港地でありオランダ、中国（清）との貿易関係があった。そして次に対馬口があげられる。朝鮮との国交や貿易関係があった。また、薩摩口もあり琉球との交易関係がここで行われていた。松前藩はアイヌと主に海産物の通商関係があった。2014年度のアジア班では朝鮮通信使と対馬口、昨年の2015年度は琉球国と東アジア交流として薩摩口を調べている。今年度長崎を調べていく中で三浦按針は朝鮮語とロシア語を学べと徳川家康から命じられていたことがわかった。我々アジア班が4年間をかけて取り組もうと考えている鎖国と呼ばれていた期間に三浦按針は大変活躍したであろう重要人物であり、来年の蝦夷とアイヌとの通商関係にも関わってくるのである。

⁹ 出所 逸見道郎住職聞き取り調査より

第三章 世界経済と銀の島

1271年にベネチア商人マルコ・ポーロ(1254-1324)は、東方(中東、インド、中国、東南アジア等)の各地を巡り歩き各地の情報を収集した。世界の多くの人々は、著書『世界の記述』(『東方見聞録』)により、日本が「黄金の国」であることを知り、大きな関心を持った。

月村辰雄・久保田勝一『マルコ・ポーロ東方見聞録』によると、「ジパング(日本)は東方の島で、大陸から1500マイル離れた大きな島で、住民は肌の色が白く礼儀正しい。島では金が見つかるので、彼らは限りなく金を所有している。しかし大陸からあまり離れているので、この島に向かう商人はほとんどおらず、そのため法外の量の金で溢れている。キリスト教国の教会が鉛で屋根を葺くように、屋根がすべて純金で覆われているので、その価値はほとんど計り知れないほどである」と述べている。

マルコ・ポーロは、訪問先の中国・元朝でフビライ=ハン(1260-94)に重用されている。フビライは彼の情報から、黄金の国・日本を服属させようとしたと言われ、この情報が日本史を騒がす大事件へと発展した。鎌倉時代の北条時宗(1268-84)施政下の蒙古襲来(1274年文永の役、1281年弘安の役)である。

当時の日本は、ペルー、メキシコと並んで銀の世界三大産出国であった(ロナルド・トビ 2008)。戦国時代末期に開発された日本の金、銀鉱山は、豊臣秀吉の時代に最盛期を迎え、日本は、スペイン人の征服したメキシコに次いで、世界第二の銀産出額があったといわれる。この利益のあがる日本貿易を手中したのが、マカオに根拠地を持つポルトガルであった。主要な商品は、中国の生糸であった。この後の徳川時代の日中貿易でも同様に、長崎に来航するオランダ人も、中国産の生糸、絹織物で利益を上げていた。

中南米の銀産出国を領有していたスペインに対して、銀産出地域を直接支配していないポルトガルは、石見銀山をはじめとする日本銀に注目した。スペインとの日本の交易がそれほど密な取引なくして20年ほどで終わったのは、日本との交易、すなわち日本銀に対する熱意の大きさが関係していると思われる。

続く16~17世紀の日本は、世界史的に「銀の島」として知られるようになった。フランシスコ・ザビエルは、1552年の書簡で「カスティリヤ人(スペインの中心民族)はこの島々を銀群島と呼んでいる」と記している。17世紀全世界の銀産出量は、年間60万kg前後と推定されるが、日本銀は、最盛期に輸出額に限ってその3~4割に達していた(水本 2008)。

	所在国	遺産名（名称一部略）	評価概要	登録年
1	ノルウェー	レーロース鉱山都市	厳しい自然に開かれた銅鉱山町	1980/ 2010
2	ブラジル	古都オウロ・プレト	黒い金で繁栄の山間の古都	1980
3	ボリビア	ポトシ市街	世界最大の銀鉱山と栄えた町	1987
4	メキシコ	古都グアナフアトとその銀鉱群	スペインの繁栄を支えた銀鉱山と芸術の町	1988
5	ドイツ	ツェルバハル鉱山など	神聖ローマ帝国を支えた銀鉱山町	1992
6	メキシコ	サカテカス歴史地区	メキシコ初銀ラッシュに沸いた町(1546年)	1993
7	スロバキア	バンスカ等歴史都市など	最古の金銀鉱山	1993
8	チェコ	クトナー・ホラ	銀鉱山町としてのかつての繁栄	1995
9	スペイン	ラス・メドゥラス	古代ローマの金鉱山の廃坑	1997
10	スウェーデン	ファールンの大銅山地域	1000年以上の歴史を誇る銅山	2001
11	ブラジル	ゴイアス歴史地区	中央高原に築かれた金鉱山町	2001
12	英国	コンウォール等の鉱山景観	銅錫の鉱山が織り成す産業景観	2006
13	チリ	シーウェル鉱山都市	銅鉱山都市（企業都市）	2006
14	日本	石見銀山遺跡とその文化的景観	自然との共生を実現した銀鉱山と街道、港、港町	2007

表 3. 世界遺産登録の鉱山（金銀銅）

出所：『日本の世界遺産 石見銀山』を一部編集

大航海時代の 1595 年にヨーロッパで作成された「アジア及び日本図」（テイセラ¹⁰の日本図）によると、地図上、石見銀山付近を指して「銀鉱山王国」と記されている。フランシスコ・ザビエルは、アジア在住のスペイン人が、日本を「銀の島」と呼んでいると本国への書簡に書き綴っている。

世界を大きく変えた銀は、16 世紀の世界貿易は、中国を中心とする東アジア貿易に大きく依存していた。東アジアの朝貢貿易の柱であった。1530 年代から日本銀は中国との二国間貿易であったと言われる。ここから派生するアジア交易圏（琉球国、朝鮮、東南アジア諸国）は、インド交易圏、アラビア湾交易圏、東アフリカ交易圏と交わり重なっている。

¹⁰ テイセラはスペイン王室の地図製作者でポルトガルのイエズス会士

3-1. 銀の世界史的役割

当時の銀の役割は、世界史としての視点でも大きな役割を担ったといわれる。中国では、金に対する銀の価値が、世界のどの地域よりも高く、商品の支払いには銀が求められた。また、中国の明国では北方遊牧民の侵入を防ぐため軍隊を駐屯させていたが、その軍費を賄う税金を銀で徴収する、いわゆる銀経済の時代であった。銀の絶対量が不足している明国に、日本銀を貿易品として活用すれば莫大な利益が約束された。

石見銀山の開発が始まったのはこのような時代であり、ポルトガル人が日本銀で中国産や東南アジア産商品を購入し、それを世界に持ち渡す商売が成立した。ポルトガル人の手で運び出された日本銀の大半は、中国産品の代替として吸収されていったといわれる。

ポルトガルとの貿易により、鉄砲とキリスト教がもたらされたこと日本史の教科書で教わってきた。日本の銀は、ポルトガルを仲買として、中国の生糸や絹織物を引き換えに日本へもたらされた。それが成り立ったのは銀の力である。銀による貿易は、アジアとヨーロッパを一つに繋げ、世界経済の与えた影響が大きいという点で、石見銀山の存在は世界史的な存在であったといえる。

当時の日本経済のあり様は、生糸を中心とした中産品を海外からの銀の力で大量に購入することができた。田中（2009）は、1530年代に始まった鉱物資源でアジアの物資を買いあさる日本が180度転換したのは、1630年代のことであるといわれる。1640年以降の江戸時代は、農業及び手工業振興への技術力によって、アジア依存型経済から自立し、国内市場を活性化していった。海外から侵略や植民地化という事態を被ることのない、世界の中で立ちゆく力をつけることであった。

3-2. 銀と江戸経済

天下統一に向けて歴史を動かした要素（財源）として、鉄砲や火薬の原料である硝石入手のためにも金銀の支配が重要であった。日本国内で潤沢な金銀が産出されたことの意味は大きく、戦国期から江戸時代初期にかけて、日本は前述のとおり、世界一といえるほどの銀産出国であった。群雄割拠する封建勢力の中から、政治的統一という流れを作り出すには、金銀山のような特別な財源を必要とした。

ところが、日本の主要銀山は、17世紀半ばには地表近い鉱脈を掘尽くしてしまい、代わって17世紀後半からは銅山の開発が始まり、やがて当時世界一の銅産出国となっていく。

中国からもたらされる生糸や絹織物に対して、日本からは銀が輸出される。しかし、元禄の時代には日本の銀産山は枯渇してきており、莫大な流出銀をまかなえなくなっていた。新

井白石は、銀を国家有用の材とし、高級絹織物などの贅沢品との交換は国家の損害との立場をとる。この結果出された「正徳新令」では、銀の流出に制限を設け、銅を主要な輸出品に位置付けた。

日本は中国産の商品、特に生糸・絹織物の輸入に対する要望が常に強かったのに対し、中国は商品の輸入に対する欲求よりも、国内の流通に必要な銀と銅に対する要求が顕著であった。銅は朝鮮や中国での産出が非常に少ない中、銅貨が通貨として用いられていたために必要な産物であった。

中国では、圧倒的な規模の中国国内産業に比べて、貿易が占める政治経済的な重要度が低いという考え方が強かった。したがって、中国の貿易観は、本来重要でないと思われる貿易について、貿易を求める周辺諸国の異民族への恩恵或は統制の手段としての外交戦略が基本であった。日本が朝鮮出兵のように中国に被害を与えれば、通行・貿易を禁止し、おとなしいと見做せば禁令を緩めるということを繰り返された。

こうした中で、江戸初期の日本経済は、自由貿易の形で世界市場にさらされると壊滅する危険があった。衣料の多くは、中国絹織物、中国生糸、ベトナム生糸の輸入、香料はベトナム、生薬は朝鮮と中国から輸入していた。これだけ多くの品目を輸入に頼ると、大量の支払いが生じることになるが、日本の支払い手段としていた銀は生産量の減少とともに経済力を喪失していった。

日本は当時、技術力が無く、銀だけに頼って中国技術生産品を購入していた。しかし、銀は枯渇して、輸入品に対する支払いができなくなった日本、国際競争力に破れた日本にとって選択できる道は、日本経済の中国からの自立の道であった。国際競争で負けたことによって、依存状態から抜け出し、今の日本に繋がる新しい時代、すなわち自国生産へ転換することができた時代が江戸時代であった。

銀の不足と輸入人の値上げによって、生糸やその他の輸入品の入手が困難になってくると、日本国内では、輸入品を代替する高品質の国産代用品の登場となる。国内で農民が生糸を生産したり、サトウキビ、朝鮮人参栽培に挑戦したり、商品の質向上させる市場のメリットが増していった。

18世紀国産の生糸は量・品質ともに飛躍を遂げ、品質・価格面で輸入品と競争できるようになっていった。生糸の地方生産は19世紀に入っても繁栄し続け、太平洋戦争開戦に至るまで、日本の主要な輸出産業として、外貨獲得の手段の大半を占め、日本の工業化・近代化を支え続けた。

こうした市場原理とともに、1720年代の吉宗時代に推し進められた、輸入品国産化に向けての政策や実験があった。書物輸入に象徴される情報の移入、農産物の栽培方法、製品精製

に関わる技術の移入など、体系的な国家プロジェクトとして遂行された（トビ 2008）。

国内で技術力をつけ、知性や思想を身につけ、優秀な労働力を育てることであった。鉄砲生産や和時計の発明に見られるように、「人」つまり職人に託された高度技術によって切り抜けていく素地はあった。

アジアから輸入に頼っていたものを自力で作る、輸入を停止する方法であった。日本は優秀な労働力を育て上げることで、中国、インド、ヨーロッパの技術を取り入れ、何の指導もなしに日本の農民や職人たちが独自に技術力をつけ、開発してきた。

多くの産業育ち、国内市場を活性化する仕組みが働いた。西陣工業地帯に興った絹織物の生産、農村での養蚕・生糸の国内生産、木綿生産の国産化、朝鮮人参の人工栽培、肥前を中心に造られた磁器など、「人」つまり職人に託された技術力によって、日本はアジアからの自立を得ることができた（田中 2012）。

戦国時代から江戸時代にかけては、胡椒をはじめとする香料貿易の代価、明王朝の銀本位制による銀の需要など、銀の時代であった。秀吉の朝鮮出兵や徳川 250 年の安定も、銀による経済基盤の確立があったからと思われる。

寺島（2013a）は、幕府による鉱山支配と利益の独占が江戸時代を通じて中国の朝貢体制からの離脱と中華秩序からの自立の源泉となったことに気付くと語る。徳川幕府は、銀の力によって政治的には国内統一を果たしたが、経済面では結果的に日本の自立を促す機会となった。銀に翻弄された 17 世紀であったことを歴史は教えてくれる。

第四章 鎖国時代の長崎と中国

鎖国 national isolation という言葉の登場は、1801年のこととされている。1690年に長崎出島のオランダ商館で働いていた、ドイツ人医師エンゲルベルト・ケンペルが、帰国後に書いた『日本誌』（1727年）の最終章を、約百年経った1801年に長崎通司の蘭学者・志筑忠雄が翻訳し、幕府の海禁政策を鎖国と訳したことから生まれた造語である。その際に、書籍としては出版されなかったため、鎖国という語は広まらなかった。明治時代以降、和辻 哲郎の『鎖国』などにより、その語彙が広まるようになったといわれる。

田中（2012）は、教科書で使われている「鎖国」という言葉にはいくつかの問題点があると指摘する。例えば、開国を善で鎖国を悪とする背景には、欧米崇拜の念が潜んでいること、拡大・外へでることに価値あることとれ、江戸時代の縮小・内に向かうことへの蔑視の気落ちが生まれるなどである。ロナルド・トビ（2008）は、従来の鎖国史観に対して疑問を示している。近代日本の外交方針は、決して国を閉ざすという消極的なものではなく、江戸幕府が主体的に選択していったものと論じている。

鎖国といいながらも、国内外との出入りは限定して行われたので、日本の鎖国は、歴史的には中国の明朝と同様な海禁政策であったといえる。幕府は、日本人の海外交通を禁止し、外交と交易に制限したのであって、国を閉ざしたわけではないからである。朝鮮や琉球国とは「通信」という関係があり、中国（明、清）やオランダとは「通商」という関係があったのである。

ロナルド・トビ（2008）によると、通商を求めるロシア（エカテリーナからの国書）・ラクスマンに対して、当時の老中首座の松平定信は、一時的に拒絶したものの、基本的には問題を先送りすることであったと述べている。定信は日本の対外関係は「古より通信（国家間の外交関係）・通商（商業貿易のみの関係）」の二種類に限定されるとし、通信通商のことが定め置かれた外の国は容易に許すことができないと説明した。定信の構想は、「通信・通商」という対外関係は、「国初より」、つまり徳川家康・秀忠・家光の始祖三代からの「祖法」（御国法）であるからというものであった。この構想はそれ以前にはなく、定信独自の発想であったといわれる。

このような寛政の改革の評価として、定信の幕府構想は、過去の論理に依拠した「通信の国」「通商の国」という枠組を設け、その関係を持つ国（清、朝鮮、琉球、オランダの四カ国）を限定し、これを「祖法」と見做すことで「鎖国」を見出したことに意義があった（トビ2008）。

4-1. 中国の鎖国＝海禁

中国の歴史は、南方の農耕系の漢民族と北方遊牧民族の紛争と盛衰の歴史でもある。中国・明朝は、海外に対して極めて閉鎖的な体制をもっていた。それは、前代の元朝時代においてモンゴル人に征服された屈辱への反動と、再度侵入してくるかもしれないという不安の裏返しでもあった。また、日本に対しても倭寇で受けた被害の影響によって海禁政策が適用された。こうしたことから、中国では通交・貿易政策が治安維持や侵略防止に大きな眼があった。

1603年から始まる江戸開府から約80年間の中国の歴史は、漢民族の支配から北方遊牧民族の支配へと移り変わる転換期であった。続く清王朝268年間は、モンゴル元朝以来の北方遊牧民族の中国覇者として、中国最後の王朝の時代となった。

清朝では、1757年以降、広州に限って欧州人に貿易を許可した。しかし風説書のように定期的に文書が北京に送られることなく、特別な使節を除いて欧州人は北京に行くことが認められなかった。皇帝の代理人である広州の総督も欧州人と会おうとしなかった。その背景には、西洋近代に関する書籍が中国語に翻訳されるのがアヘン戦争数年か月前というように、中国人の欧州人に対する蔑視意識があったからである。

こうした理由の背景には、18世紀後半に至っても、中国の貿易は、絹と磁器の輸出によって西洋に対して優位にたっていたからである。イギリスが中国貿易の赤字基調を克服するのは、産業革命の結果生み出された商品ではなく、インド産の阿片であったことが知られている。

中国文化の威信は18世紀を通じて欧州に極めて高かった。シノワズリ（中国趣味）といわれる装飾様式が欧州の上流階級でもてはやされていたし、知識人についていえば、中国の国家体制と孔子の哲学は大いに賛美されている。

また、軍事技術ではヨーロッパに遅れた中国ではあるが、中国の陶磁器、絹、茶は世界の貿易市場において最も利益の上がる商品であった。18世紀末に至るまでは、中国の平和産業は欧州に対して比較優位を保っていた。

上垣内（1994）は、銃器の使用を停止し、平和の道を選択して鎖国した日本が、中国文明を模範として儒教を取り入れ、文化面でも中国に傾注したことは当然であったとし、貿易でも中国産の生糸、絹織物は江戸時代を通じて日本の輸入品目の最大であり続けたと述べている。

4-2. 日本の鎖国政策（外交と通商）

近世日本の人口について、関山直太朗『近世日本の人口構造』や南和男『幕末江戸社会の研究』によると、1720年頃から1846年頃の日本の人口は、2500万人から2700万人であったと言われている（トビ 2008）。

江戸幕藩体制社会は、幕府と260余りの藩とで組み立てた連邦国家体制である。全国総石高が約3000万国。そのうち幕府直轄領の約400万石（13.4%）、大名領が約2250万石（75%）、旗本領が約300万国（10%）、寺社領が約40万石（1.3%）、天皇・公家領が10万石（0.8%）であった¹¹。

また、各藩についての年貢徴収を始め政治一般は諸藩に任され、幕府がこれに干渉することはなかったが、幕府だけが独占している権利は、外交権と軍事権全般の二つである。（市村・大石 1995）。日本の鎖国政策は、ポルトガルやスペインなどのカトリック勢力による布教、領土獲得から身を守るためのものであったと思われる。キリスト教の根絶という宗教の浸透を防止する形であった。

日本の鎖国実行に当たっては、ポルトガル人が持ってくる生糸などの中国産品をオランダが代行できると確認を行った上での実行であった。長崎の商人には当時、ポルトガル人への資金貸付が多く、ポルトガル人との貿易を禁止すれば債権回収が不可能になるといった理由が幕府に追放をためらわせたが、貿易よりも政治又は宗教を優先した。

秀吉がスペイン、ポルトガルを決定的に危険と感じたのは、1596年のスペイン船漂着事件であった。事情聴取の際、船長は世界地図を示し、いかにスペインが強大であるかを語り、多くの国土がスペイン領となった理由について、宣教師を送り、信者が増えたところで反乱を起こさせ、その混乱に乗じて軍隊を送りこみ領土化すると述べたという。

徳川時代を迎え、交易は続けたいが、キリスト教は危険という心理の中で、31年間の朱印船貿易の時代が続いた背景として、オランダは、宗教でなく経済（交易）に徹し、出島による幕府管理下の朝貢貿易の形式を遵守した。オランダは、日本の朱印船貿易はスペイン、ポルトガルの報復や海賊行為を考慮すれば危険であり、オランダ東会社に任せたほうがよいと説き伏せた（寺島 2012a）。

上垣外（1994）によると、鎖国の国家体制が成立するためには、外国との交際に対する猜疑心、警戒心はそれが現実であろうと空想であろうと、外敵から狙われており、自身を破壊させるかもしれないという恐怖心を人間が抱いたときに生まれると説明する。

1639年の鎖国令の発動には、キリシタンの反乱という様態をとって現われた島原の乱が、

¹¹ 山川詳説（2014）『世界史図録』山川出版社

幕府に大きな衝撃を与えた結果であると説明されるが、これは最終的な段階での動機づけにすぎなかった。

家康の時代は、オランダ船やイギリス船との交易が始まり、また朱印船貿易も開始され、この時期には鎖国政策は見られない。家康没後、1616年二代将軍の秀忠は、キリシタン禁止令が出されるとともに、ポルトガル船は長崎に、イギリス・オランダ船は平戸に寄港地が限定された。1623年三代将軍の家光は、イギリス船はオランダ船との競争に敗れて日本商館を閉鎖、1624年スペイン人は日本渡航を禁止された。さらに、1635年に日本人の海外渡航が禁止され、唐船の入港が長崎に限定された。そして1639年幕府が鎖国令（第5次）を発し、ポルトガル人が追放され、1641年オランダ商館が平戸商館を閉鎖して長崎出島にオランダ商館を移転させられた。

それ以降、江戸時代を通じてオランダが日本貿易を独占することになり、長崎出島とバタビアを繋ぐ中継点として台湾のという体制がその後20年間続いた。台湾は地政学的な位置により、「台湾の権力を握ってきたのは全て外来政権であった」（李登輝元総統の発現）という歴史を抱え、17世紀以降、オランダ・中国・日本の力学の狭間に立って運命を左右されてきた。

それでは、鎖国とは何だったのか。鎖国は、「鎖国」という名の戦略外交であった。遮断された時代ではなく、世界との持続的交流が存在していた。日本にとって国民国家への自立と自覚のプロセスだったことが見えてくる。

鎖国とは、いわば日本が情報の発信を停止した時代であり、海外からの情報を丹念に受信していた時代でもあると形容することができよう。ヨーロッパ情報は、オランダ商館ルートで「オランダ風説書」、そして商館長の江戸参府により直接情報収集を行った。中国・アジア地域情報は、長崎入港中の中国船から「唐人風説書」としてまとめ上げ、江戸へ送らせた。さらにサブネットワークとして、朝鮮半島中心の情報（朝鮮通信使）を対馬藩からの報告として、また、東シナ海を中心とした情報を薩摩藩ルートの報告として江戸に上がる琉球使節から補強収集することとした。

こうして幕府は居ながらにして海外情報を収集できる受信システムを構築したのであった（市村・大石 1996）。対外情報は、長崎のオランダ商館の他、特に、アジア情報は、長崎に来航する唐人情報、朝鮮と対馬藩経路の情報は、琉球国経由で薩摩藩から上がってくる情報、また、不定期であるが、海外から送還されてくる漂流民からの情報も帰国後の事情聴取を通じて入手した（木村 2016）。

本章では、日本の鎖国政策の結果としての産物を中心に論ずる。

4-3. 日本の近代化への遅れ

これまで述べてきたとおり、18 世紀終わりまで、軍事技術・航海技術を除いて西洋文明は中国文明より優越していたわけではなかった。西洋の自然科学、近代思想を知らないというマイナスは、中国・朝鮮の人文学、教育、社会秩序などを学ぶプラスによって十分相殺されるものであったともいえる。問題なことは、開国を行う良いタイミングであった。

18 世紀後半の田沼時代に開国に至らず、むしろ、その後の治世において、従来よりも閉鎖的な体制を採用したことにある。

市村・大石（1995）は、鎖国時代の日本は、軍備をしないうちに富の蓄積が進んだ。田沼時代の日本全地域に及んだ民富の形成・伸長は鎖国政策下の産業育成（内需拡大）の結果と考えてよいと述べるとともに、幕末になってくると、日本の政治体制は非常に硬直化していて、非常時に対応できるような体制ではなかったことが日本の悲劇を生んだ。

情報を掴むと同時に、情報を十分に活かして次の社会に対応できるような有能・柔軟な政治主体を絶えず育成していくということが重要なことである。こう見てくると、五代将軍綱吉以来育成してきた人材本位の政治体制（側用人政治）が松平定信政権によって破壊され、十分修復されないままに幕末を迎えたことは残念であると述べている。

この同時期、19 世紀初めにイギリスは産業革命を起こし、蒸気機関の普及による工業、輸送手段の進歩は、東アジア諸国の水準をほとんど追随不可能とした。19 世紀半ばの時点では鎖国という体制が世界情勢の進展に対応不可能であることが明らかになった時期である。

4-4. 中国文化の相対化と日本人の自国意識

江戸時代の施政は、拡大から縮小への時代であった。縮小の時代であった江戸時代は、配慮と節度という倫理観を社会に打ち立てた。江戸時代は、力でのしあがる戦国時代までの競争社会、拡大主義の流れを止め、秩序を持った縮小社会に収める時代であった（田中 2009）。

17 世紀前半の時点でいえば、日本が鎖国を行ってキリスト教を禁止し、朱子学を主軸とする中国文明を選択したことは当然である。スペイン、ポルトガルは、キリスト教の絶対的な価値を信じる一方で、現住民の文化には軽蔑の念しか持っていなかった。こうした点から見れば海外からの侵略に対して防御力のある日本や中国がキリスト教禁教となったのもやむを得ない事情があった。

徳川時代の日本の国是は和魂と漢才の結合ということであった。羨望と敬意の対象であった中国文化を相対化させ、自己意識に目覚める過程が、鎖国といわれた時代の意味もあった。蓄積された中国への劣等感とその反動としての自負心が、幕末維新を経て、欧米列強模倣の富国強兵路線で自信に変質し、1895 年日清戦争の勝利で優越感に反転して蔑むようになった。

冷静な自己意識の熟成とならなかった。歴史意識を踏み固めて中国と向き合うことが肝要である。

4-5. 長崎と中国

江戸時代、長崎を対外関係の上で重要な地と認識した江戸幕府は、早くこの地を直轄地として長崎奉行を置き、直参の上級旗本を任じて統治させるとともに、対外関係の業務を担当させた。対外関係といっても主としてオランダと中国が相手である。当時、中国は王朝としては明、ついで清であるが、ともに唐と通称し、中国人を唐人、中国船を唐船、中国との貿易を唐船貿易または唐人貿易といった。

唐人たちが「鎖国」以前から九州各地に居住していたが、長崎に多く居住し始めたのは天正十六年（1588）豊臣秀吉がこの地を直轄地として以降、特に徳川政権が糸割符制を開始した慶長九年（1604）が大きな画期と考えられる。

慶長九年（1604）に次第に拡大した唐船貿易に対処するため、在留唐人馮六を唐通事を任じたのが、唐通事の起源であったとされている。以降、唐通事は基本的には「鎖国」前に帰化した在留の唐人及びその子孫を起用された。彼らが日本に帰化して、唐通事職に就くとき、日本名を名乗ることが求められた。多くは祖籍に因む地名をとって姓とした。

例えば、陳は穎川、劉は彭城、魏は鉅鹿、徐は東海というように改めたが、平野や中山、西村のように母方の姓に改める者もいた。唐通事はその職掌や設置由来によって、広義と狭義の二通りに大別である。広義の唐通事は、中国語訳及び通商事務を担当する唐通事役唐方と東南アジア諸国語を主する異国通事のほかに、唐年行司・唐船請人および内通事などキリシタン取締、唐人の身辺処理などを行う担当役人を広く含むのである。

一方、狭義の唐通事は、馮六に始まる唐通事役唐方の大通事・小通事・稽古通事・およびその上の唐通事頭取・唐船風説定役・御用通事・唐通事諸立合、その下の小通事並と小通事末席・稽古通事見習などを指す。

唐通事は専門的な語学能力を要する職人集団だったので、その役株は引退してから、そのまま子弟に譲られるものではなく、各人下級の通事から昇進するのが原則であった。ところが、有力な通事の場合、退役のときには在職中の功により数人の子弟が通事に取り立てられ、昇進も家格に左右されることが多かった。

唐通事の職掌をみると、大別して通訳・貿易・外交・秩序維持などがあげられる。通訳業務について、一般的な通達は口頭で行うが、諸法令や貿易額などの布達と唐人からの請願は必ず書面で行い、通事が通訳して原本と訳本ともに年番通事を介して町年寄に提出し、長崎奉行の裁定を得るのが建前であった。

貿易に関する業務について、唐船が長崎に入港すると、船の起帆地・乗組員の氏名、さらに海外事情などを調査して、風説書の作成、積荷目録の翻訳などを行う。また積荷の荷改帳と値組終了後の値組帳、さらに唐船が帰帆する前の銅渡高書、荷物買渡帳・勘定帳などを作成する。

唐通事目附を置き、唐人の不法の取締や唐人屋敷内の秩序維持、例えば密貿易・喧嘩・火災防止などの責任を負っていた。

外交業務をみると、各船から聴き取りされた海外情報を整理して風説書の形にして幕府に提出する。また、1715年の正徳新例以降、信牌の発行は全て唐通事の名義でなされた。

要するに、正徳新例における諸貿易規定は唐通事と唐人の約条によるもので、唐人との貿易関係を国家背景を持たない民間の形で行われた。また、来航した唐船の所持する信牌と奉行所の持つ発行台帳の「割符留帳」と照合して検査しなければならなかった。

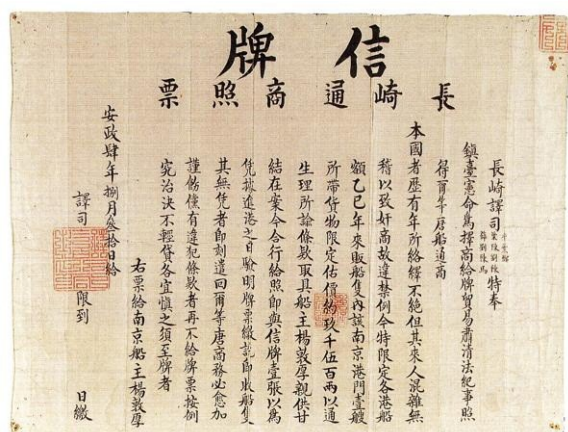


写真 1. 割符留帳¹²

清朝政権が本格的に対日貿易を始めたのは、海禁が解除された後の 1684 年（康熙二十三年）であった。その主な目的は銅銭鑄造用の銅材の調達であった。ところが、日本側は清朝との公的関係を避け、清朝官員の日本渡航を禁止したので、日本渡航の中国船は全て清朝の官銅の調達を請け負った民間貿易船であった。

初期の日本貿易は自由貿易であり、民間商人は中国の各地から長崎に渡航できたが、正徳新例後、貿易船の数が大きく制限されたので、清朝側もこれに対応して、銅の調達制度を数回変更した。官商と民商は全て政府の許可を得た財力のある者であった。官商とは一家に限って、政府から資金の貸付を受けて日本銅の調達を請負う商人のことで、皇室や政府と深関

¹²出所：京都大学附置研究所・センター http://www.kuic.jp/top_sinagawa34.html

わりを有する商人が多かった。民商とは自分の資金で日本銅の買付けに従事する官許の民間商人で、一定の員数に限られていた。官商と民商の共通点は、その経営をほとんど親族や同郷出身の人に任せられたことである。長崎渡航の中国船を見ると、それらの船主や船員たちは、長崎という場で貿易活動をするほか、多くの日本人と交流し、詩文や書道、絵画、篆刻、音曲などを日本に伝え、両国の文化交流に貢献した。

明王朝が崇禎十七年（1644）に崩壊した後の1661年まで、各地で明王朝の諸王を擁立しながら抗清復明運動が継続していた。朱舜水も復明の15年間、主として監國（皇帝代理）魯王のもとで軍資金調達のために「海外経営」を行い長崎に6回訪れ、7回目の1659年に帰化した。

帰化した朱舜水の真意は、貿易、儒教の教示ではなくあくまで明朝に対する忠義、抗清復明にあり、「日本乞師」の思いを秘めていた。「清朝之俗」を拒否し「蹈海全節之士」となる覚悟だったのである。そのため、抗清による断髮拒否と儒教の立場の表明が重ねられていたのである。

明末清初の時期には中国から日本へ多くの文人が渡来した。寛文五年（1665年）には常陸水戸藩主の徳川光圀が彰考館員の小宅処齋を派遣して舜水を招聘し、江戸に移住する。光圀は舜水を敬愛し、水戸学へ思想的影響を与えたほか、光圀の就藩に際しては水戸へも赴いており、光圀の修史事業（『大日本史』）の編纂に参加した安積澹泊や、木下道順、山鹿素行らの学者とも交友し、漢籍文化を伝える。死後には光圀により遺稿の編纂が行われ、正徳五年（1715）には『舜水先生文集』全28巻としてまとめられる。

朱子学の格物説では、事事物物を前にして、一事一物を日々着実に日常の倫理・規範からそれを支える根源的道理まで深めることが要となる。また、陽明学では朱子学の「敬」は「蛇足」としたが、事物への対応を重視する舜水においては、朱子学の格物窮理に必須の「居敬」はどのように位置付けられるのであろうか。舜水は「敬天の一念」を強調し、また、天命に「敬い」の態度を示し、「天命之謂性」に言及している。

「性」「敬」の変質は朱子学の根幹に関わる。舜水の動機は純粹な「忠君愛國」であろう。新たな儒教は「道学」とは異なる実効性のある「儒」でなければならない。舜水は「実行」「踐履」を強調し、「実功」「実用」の学問を主張し、「国家政治」「明風土俗」を重視すべきという。このような「実」重視の観点から事物の「義」も予め決定とはしないで現実の個々の実情また人情の諸関係の中で定めると説き、陽明学へ振れるし様相さえ示したのである。舜水の思想は、明末清初の思想の中で見ると、「経世致用」に共鳴したと言える。また、「儒」の立場で舜水が日本を「邪教」（仏教）が「深く骨髓に入る」と認識した事も明ら

かである。

唐寺というのは、興福寺、福濟寺、崇福寺のことで、唐三箇寺とか三福寺と呼ばれた。江戸時代、長崎に来航した唐船は航海の守護神媽祖が安置されていて、長崎港停泊中は乗組員たちが交代で祀っていた。

このようにして、元和六年（1620）真円によって興福寺が、寛永五年（1628）覚悔によって福濟寺が、さらに同六年（1629）超然によって崇福寺がそれぞれ開創された。その開創の目的は「先亡之菩提，又往來之祈願」とあるように、先祖の供養と航海の安全祈願であった。

江戸時代初期、崇福寺の住持に空席が生じたことから、先に渡日していた興福寺住持の逸然性融が、隠元を日本に招請した。

隠元は、万歴二十年（1592）福建省福州府福清県に生まれ、同四十八年（1652）出家、崇禎十年（1637）黄檗山万福寺の住持となった。

隠元が入った興福寺には、明禅の新風と隠元の高徳を慕う具眼の僧や学者たちが雲集し、僧俗数千とも謂われる活況を呈した。隠元の影響力を恐れた幕府によって、寺外に出る事を禁じられ、また寺内の会衆も 200 人以内に制限された。万治元年（1658 年）には、江戸幕府 4 代将軍・徳川家綱との会見に成功した。その結果、万治三年（1660 年）、山城国宇治郡大和田に寺地を賜り、翌年、新寺を開創し、旧を忘れないという意味を込め、故郷の中国福清と同名の黄檗山万福寺と名付けた。同寺は、以降、黄檗宗の大本山として全国に 500 ヶ寺の末寺を有する。ちなみに、中国の黄檗山万福寺は古黄檗、日本の黄檗山万福寺は新黄檗と呼ばれ、区別された。

隠元が伝えた黄檗宗は、禅宗、さらには臨濟宗の一派である。黄檗宗は、四大将軍家綱、五代将軍綱吉などの帰依のもと爆発的に発展したが、以後も幕府は黄檗宗を準宗旨として優遇した。

明清楽という言葉は中国明朝の音楽と清朝の音楽という意味である。現在では、近世中国から長崎を通じて伝えられた「中国の音楽」という意味に総称して用いられているようである。

明楽が長崎に伝えられた時期については 17 世紀半ばであった。そして、その伝えられた明国の音楽は当時来航していた唐船より考えて本格的な明国の宮廷音楽ではなく雑曲に類するものと黄檗派の僧侶たちによってもたらされた宗教音楽または道士音楽であったと認識された。ただ、その中であって中国福建省福州府の出身で東京船主として来航し、寛文十二（1672）

年彼の二子とともに日本に帰化した魏之琰は明楽を演奏したと記してある。魏之琰の後妻は東京（トンキン・中国）王の一族の人であったというのであるから、魏之琰は明楽の宮廷音楽の心得があったのだろう。彼の曾孫に明楽史上有名な鉅鹿民部規貞（魏君山）がいる。彼は唐通事である鉅鹿家の「家名の相続を不好、上京して民部と称し君山と号し、明楽の師範となり、酒井雅楽頭より御扶持を戴き、安永三（1774）年河原御殿泉水で船楽を奏し……全て本朝にて明楽流行仕候儀は民部より弘まり申候」（由緒書）と言っている。民部は曾祖父の魏之琰が中国（東京）より持参した楽器類を伝えていたが民部歿後六年、安永九（1780）年弟子である大阪の人筒井郁景が楽器を図示した有名な「魏氏楽器図」を出版した。

「魏氏楽」は古楽府・唐詩・宋詞・明詞が主要なる部分をしめ、他に宮中祭祀楽・舞楽・仏楽なども一部含まれている。演奏形態は十名または十一名の男性による唐音の声乐を中心に、管四（笙、笛、簫、栗）、弦三（琵琶、月琴、十四弦の瑟）、打四（小鼓、太鼓、雲羅、檀板）の十一種類の楽器による楽隊がこれを支える。しかも弦楽器と管楽器は列を分けて並べられ、斉奏斉唱の醍醐味を重んじた。

民部歿後、長崎では明楽の系譜は間も無く失われ、当時来航してきた唐人によって新しく伝えられた清楽が盛行するようになった。

明清楽という新しい言葉はまず上方方面で作られたようである。明治10年大阪で出版された本に「明清楽教授版」「明清楽歌謡集」というのがあり、明治初年の京舞井上流番付にも「明清楽合奏」とでている。その頃、上方では明清楽の語が流行していたのであろう。上方においてはこのように「明清楽」と称しての演奏がなされていたのではあるが、実際の演奏内容は清楽のみで明楽はなかったのである。

清楽は清の時代の江南地域で流行っていた民間俗曲及び地方劇に由来する音楽であり、長崎に来航した唐船船主とその乗組員たちによって伝えられた。演奏形態は明楽と同じ唐音の歌に管、弦、打楽器による演奏を伴うが、大合奏の場合を除いては、二、三種類または数種類の楽器による小編成の演奏形態を用いるのが一般である。

明楽と清楽はそれぞれ江戸中期と後期に日本に伝来、流行した中国音楽である。明楽の流行した宝暦末・明和期は、黄檗文化の流入により詩文、書画、篆刻をはじめ陶芸、音楽、茶道、華道などのあらゆる分野において洗練された中国趣味、つまり「雅」なる文人趣味が隆盛した時期であり、言い換えれば明楽はまさにこのような時代の潮流の中で流行を得たとみることができる。魏之琰が明楽を日本に伝えてから、さらに百年近くの歳月を経てようやく明楽の流行が形成されたのも、このような時代背景と密接な関係があろう。

明楽の流行は「華夷変態」（明清交替）の歴史的な事件を経て失われた中華文明に対する日本の知識人たちの再認識と保存意識が働いた結果であり、その時代に「礼楽」重視論と唐音

学習の主張の影響がその前提にあったことも指摘せねばならない。一方、清楽が流入した化政期・天保頃は、中野三敏氏の近世三分説によれば、江戸文芸も壮年期を過ぎて老衰期には行った時期である。したがって、日本の知識人たちはそれまでの中国文人趣味つまりエリート文化に飽きたらず、中国の大衆文化にまで興味を示すようになった。「俗」を加え「雅俗」二元論で言えば、中国趣味の範囲が広がった。

そして、明清楽の伝来と流行において重要な地位を占めた「長崎」は玄関口また発信地となった。

4-6. 結論

十六世紀～十八世紀の徳川幕府時代は、江戸を拠点として、強固な政権と国造りを進めた時代である。その時期、海に囲まれた日本は強く防御に専心した。

幕府初期以来、李氏朝鮮との国交回復が進められたとともに、朝鮮通信使を迎えるなどの友好親善に努められた。一方、東シナ海を挟んで隣国の明は「倭寇」を駆除するため「海禁」を実施した。

その後、日本と中国の交流は「明清交代」の大変動を背景に、「華夷変態」という認識があった。唐船・オランダ船来航する九州・長崎は舞台として、東アジア、さらに東西間の経済、文化的交流が盛んでいた。

明朝系の渡来人は長崎で居住し、住宅唐人として在留が許された。長崎奉行は、そのなかの有能者を唐通事として任命し、対外交渉が行われた。唐船貿易のほか、唐船長が提出する「唐人風説書」は中国またはアジア諸国の情報を幕府に届け、貿易以外にも大きく役割が果たされた。

そして、窓口としての長崎では、宗教・学術・文化面で特別な地域性がみられる。日本三禅宗のうちの黄檗宗はこの時期に創設し、中国明朝風の様式を伝えている。渡来人は明の儒教を伝播させ、日本の漢学をもう一層に発展させた。にもかかわらず、飲食の卓袱料理や音楽の明清楽などさまざまな影響を与えられた。

本研究は、交流史をはじめ、「アジア共通価値」を模索すると考えられる。お互いに不可欠な共通価値や理解を持ち、アジアさらには世界の平和を構築することに貢献を捧げれば幸いだと思われる。

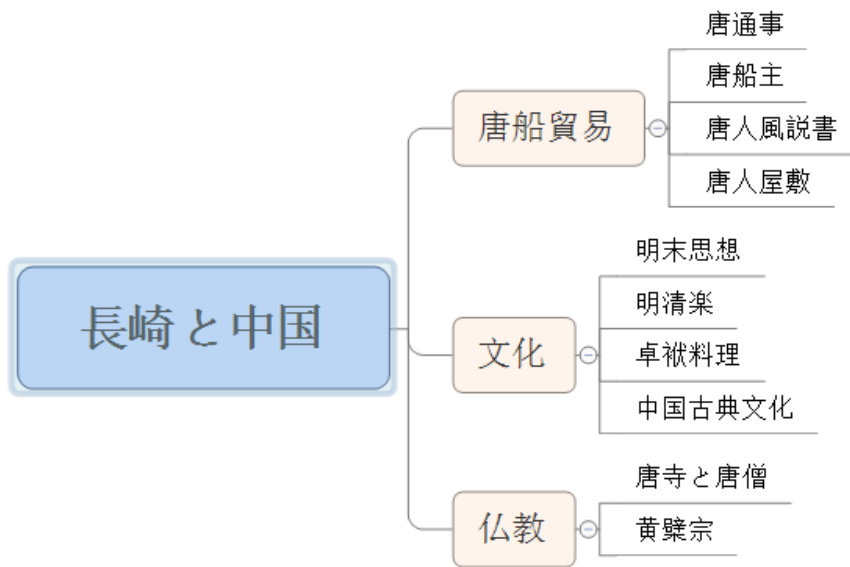


図1：長崎と中国の共通価値の伝来元と一覧

出所：王星星作成

第五章 鎖国と四つの交流窓口

田中（2012）は、江戸時代は鎖国イメージとは反対に、本格的なアジアとの外交が始まった時代であったと述べている。徳川家は、各藩に対して参勤交代制度を義務づけて、江戸城下に諸大名が集まるシステムを作った背景には、各藩が政治的・文化的・経済的に独立状態であったことから、国内戦争を回避するための日本版冊封システムを実施する必要があった。

このシステムによって、膨大な資金が街街道と江戸に落ちることとなり、商業が活性化した。全国の道路網は整備され、人々の旅を促し、飛脚制度や為替制度が確立した。また、船による運搬も活発になり、物資と情報の流通は格段の発達を遂げた。

朝鮮通信使、琉球使節、アイヌ民族の江戸参府、オランダ商館長の江戸参府という外交的な挨拶制度をつくることで、幕府は江戸城を中心とした中国の擬似冊封システムを作り上げた。

通信使の来日は、中国の冊封システムを真似たものである。日本の真の首都は京都であり、皇帝に該当する人は天皇であるが、国際関係における日本の代表は京都の天皇でなく、江戸の徳川将軍であることを印象づけ、権威づける狙いがあったといわれている。この擬似冊封システムは、文明国としての統一体を作り上げるためにも必要であったのである。

松平定信が非開国主義で消極主義であったのに対し、田沼意次は開国思想を持ち、財政経済に積極主義を採って大に経営に努めた。封建制度に付物の因襲主義は、この時代に破られたものが少なくない。これは格式を重んじる幕府の制度から見れば、旧例を破った田沼の見識は、幕府に一種の損害を与えたかもしれないが、全体の時代にとって、新しい気運を起こしたということは事実である。

田沼時代は、一面において混沌濁乱の時代であるが、他の一面では新気運が勃興した時代であり、幕末開国の糸口はこの時代に開かれた。「白河のきよきに魚も棲みかねて元のにごりの田沼恋しき」。国民から恋しがられた田沼の濁りの中には、国民の住みよいところがあった。

辻（1980）によると、田沼が開国思想を抱いていたことは、当時日本に来ていたチチングの著作で確認できると述べている。それによると、幕府は外国人を自由に国内に入れても、国に損害がないことを知っていただけでなく、それによって優秀な科学・芸術を学ぶ機会を得ることを知って国内を外国人に開放しようとした。

1769年、老中の摂津守忠恒が提議をしたが、間もなく亡くなったことにより、立ち消えになったといわれる。田沼が工藤平助の建議を採用して、北海道に人を派遣して、ロシアとの密貿易を調査し、場合によっては、蝦夷貿易、蝦夷開発を計画したが、田沼の没落とともに

廃止となった。

5-1. 四つの交流と交易窓口

江戸時代の「経済」という言葉は、利潤追求と競争の経済のことを指すのではない。「経済とは、国土を経営し、物産を開発し、部内（領地内）を富豊にし、万民を済救するの謂なり」と佐藤信淵が『経済要略』（1822年）でいうように、人を救うことの知識と技術なのである。

田中（2009）によると、経済の目的は本来、「万民を済救」することそのものであった。現代人が学ぶべきものは、この経済・経営・開発・豊かさという言葉が指し示す意味であると述べている。

江戸時代の日本は、海外交流と海外交易のために、四つの口を開けていた。対馬の宗氏を経由する李氏朝鮮との「対馬口」、薩摩に託して琉球国との交易を可能にする「薩摩口」、天領の長崎会所を経由するオランダ人や唐人との「長崎口」、松前藩を経由してアイヌとの北方交易を可能にする「松前口」と繋がっていた。実は、鎖国といいながら、四つの口は、対外交流の窓口であった。

四つの口のうち長崎を除く三つの口は、大名家（藩）によって運営させていたのに対し、長崎口は、將軍直轄であった。キリシタン禁制によるヨーロッパ人の入国管理、唐船貿易との関係が深い九州諸藩との管理運営などがあり、各藩に任せるわけにはいかなかった。また、他の三つの口は家康時代に整えられていたが、長崎口については、二代將軍秀忠から三代將軍家光の時代に整備された。

江戸期の海外との交易接点は、日本が国交をもたない中国へ間接的に繋がるための対中国貿易の経路であった。中国（明、清）で生産される生糸などの商品、漢籍・絵画などへの欲求は日本国内で非常に高かった。

江戸時代を通じて、経済的にも文化的にも日本にとって重要な外国が中国であった。そのために、「国交なき交易関係」が両国間で実態として存在した。

日中貿易での輸入品は、生糸（白糸は京都西陣の織物を支え、輸入商として越後屋（今日の三井の原点が力を蓄えていた）、絹、綿布、薬剤、砂糖、鉱物、書籍などがあげられる。輸出品は、銀（1763年まで）、原銅、俵物といわれた干鮑、フカヒレ、いりこなどの干海産物が17世紀末から輸出品として重視された。中国料理の食材として中国料理を変えたという説もある。

また、養蚕業は国内経済の重要な位置を占めていたが、戦国時代末期ごろから需要超過となり、輸入への依存を増していた。国産の生糸よりも白糸といわれる中国産の高品質のもの

に人気があった。

ロナルド・トビ（2008）によると、1717年の段階で、西陣織で知られる京都西陣で利用される生糸の57%が外国産であった。元禄から享保期の京都は日本最大の産業都市であり、中でも西陣の織物産業は最大の雇用を生み出す一大産業であった。1720年頃から1846年頃の日本の人口は、2500万人から2700万人であったと言われていた中で、1700年の京都人口31.8万人のうち、その6.8万人（21%）が西陣織物産業の関係者であったとの推計がある。

鎖国のイメージの中では、「四つの口」と呼ばれた窓口は、鎖国の例外とされてきた。実際は、鎖国が方針で、「四つの口」が例外であったのではなく、「四つの口」こそが、幕府の方針であった（トビ2008）。

	長崎口	対馬口	薩摩口	松前口
管轄	幕府直轄（天領）	対馬藩	薩摩藩	松前藩
完成時期	三代 家光	家康	家康	家康
使節国（擬似朝貢システム）	オランダ通詞（通訳）約50名、唐通詞800名以上	朝鮮通信使	琉球国の朝貢使節	アイヌ使節
大使館（出入口）	出島	倭館（釜山）朝鮮対馬の貿易管理と儀礼接待のため設置。約500名の日人が常駐。	那覇/福州	
その他	オランダ風説書 唐人風説書	朝鮮通信使	琉球国の朝貢使節	赤蝦夷風説考

表4. 江戸時代「四つの口」の特徴

出所：越田辰宏作成

5-2. 四つの情報収集ルートとインテリジェンス

トビ（2008）によると、幕府は外国情報を収集するための「四つの情報収集ルート」があったという。

第1のルートは、長崎到着の中国人商人→唐通詞→長崎奉行→江戸（老中、林家）。中国船長などに直接聴取して得た情報をまとめた報告書（風説書）を、長崎奉行を介して江戸に

送っていた。この情報は外国政府や地方政府などの利害関係者の介入を受ける危険が無く一般的には最も正確だったとされるが、情報の多くは港での伝聞やうわさ話のレベルという見方もできる。

第2のルートは、北京→福州→琉球→薩摩→江戸。朝貢使は定期的に北京に派遣され、福州には琉球館もあった。また琉球から中国へ渡る留学生もいたため、比較的正確な情報を安定的に得ることができた。

第3のルートは、オランダ商館長→長崎オランダ通詞→長崎奉行→江戸。オランダ人が直接かかわる事例は正確な情報が多かったが、通詞の語学力が十分でなかったため、情報の利用価値が損なわれていた。またオランダ商館長は彼らの政治目的のために報告を歪めることがあったため、必ずしも信頼できるとは限らなかった。

第4のルートは、北京→漢城→釜山→対馬→江戸。幕府は朝鮮との関係を利用して大陸の事情について情報を収集していた。朝鮮は冊封体制による使節派遣を毎年北京に送っていたため、中国の最新情報を入手して釜山の倭館、対馬へと伝えられた。

また、田中（2009）によると、通信使の来日は、日本を中国に見立てた朝貢システムの模倣であったと述べている。1633年松前藩を通して、アイヌ民族に、ウイマム（あいさつ儀礼）を強要した。1633年オランダ商館長に江戸参府を義務づける。1634年～1850年まで18回薩摩を通じて琉球国使節が来日した。

対馬藩や琉球国の人々は、日本本土では決してありえない朝鮮や中国への渡航を日常茶飯事に行っていた。江戸幕府はこの二つの地域が果たしていた中継者的な役割を承認し利用して東アジア世界との接点としていた。さらに蝦夷地においても中国の北方から山丹（沿海州）、樺太、松前と繋がる交易線が存在していた。

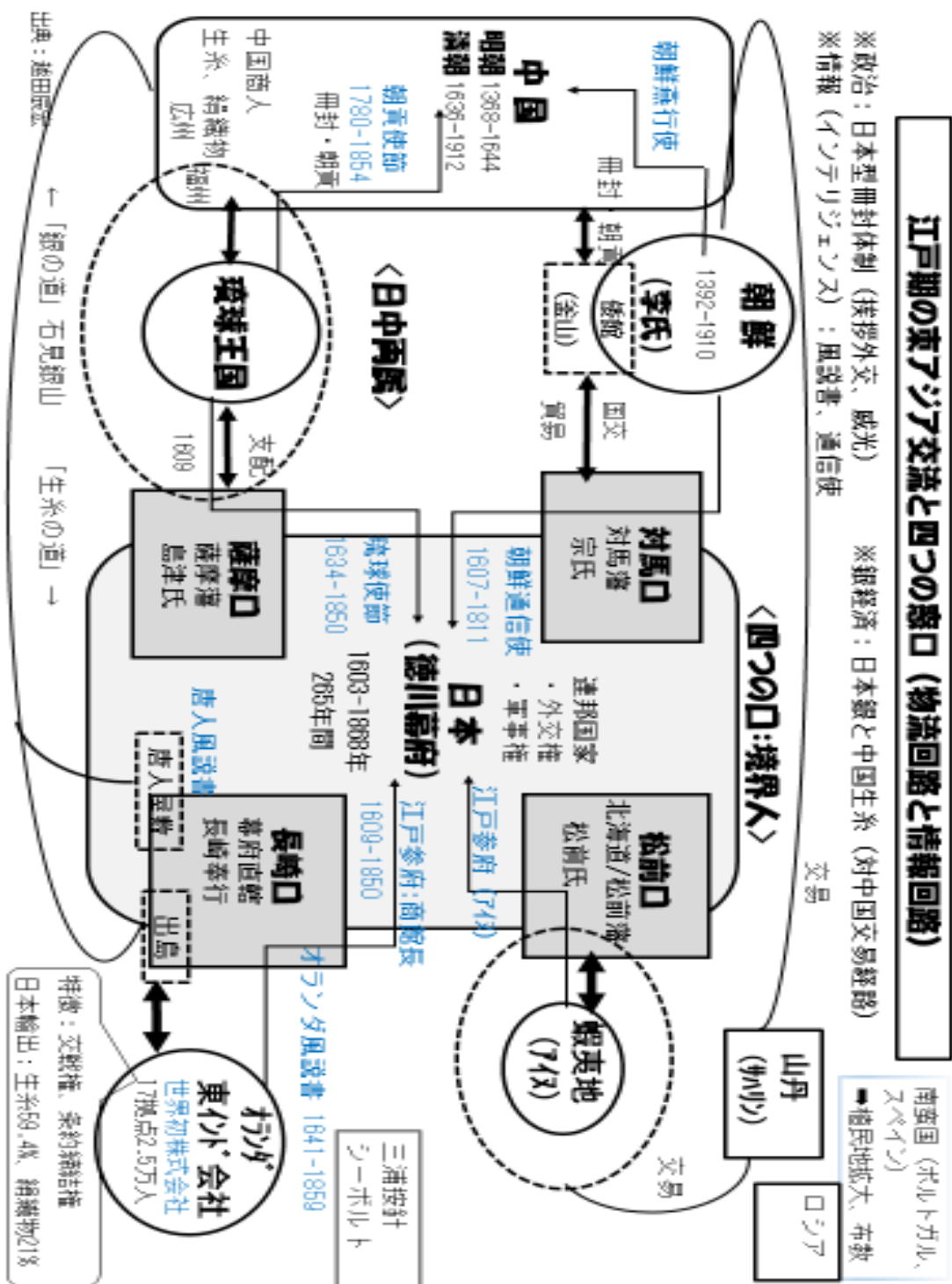


表5：江戸期の東アジアと四つの窓口（物流回路と情報回路）

出所：越田辰宏作成

第六章 三つの口

この章では長崎以外の三つの口とその役割について論じる。アジアダイナミズム班の先行研究では日本、中国、アジア諸国を中心とした各国の関係、そしてそのダイナミズムについての研究を行ってきた。近年の研究の傾向として、主に江戸時代の4つの口について重きを置いている。4つの口とは北から蝦夷、対馬、長崎、そして琉球と江戸時代の鎖国政策の下での日本の貿易拠点としてそれぞれ重要な力を持っていた。

2014年度には対馬口を通じた日中韓交流における朝鮮通信使の外交・文化的意味と現代的意義を題材とし、その論文の中でも、第三章では朝鮮通信使の近代的意味と現代的意義について記述がある。

豊臣秀吉の朝鮮侵略以来決裂していた明との国交であった、徳川幕府は国交回復を図り、日本から朝鮮通信使を再度送り、成功させた。対馬藩は朝鮮との外交で大きなパワーがあったに違いない。彼らは日朝双方の文化的習慣や独自の考え方を考慮した橋渡し役、朝鮮王朝に対する朝貢（肅拝儀礼の義務）を果たした。

交易を通して功績を重ねた結果、徳川幕府からの厚い信頼があった。朝鮮との貿易口の一つとして選ばれた対馬ははじめ地理的理由であったのにもかかわらず、対馬藩の外交戦略により、徳川幕府にとっての大きな利益となっていたのであった。

その後徐々に衰退していき、両国政府と対馬の交易における橋渡し役として役割の姿を見出せなくなる中で日朝間の外交は単純なものとなってしまう、対馬藩が大きな力を発揮していた時代は終わりを迎え、江戸時代の対馬藩が日朝交易に関与していた時代が平和であったことは多く語り継がれていた。

昨年2015年度では琉球国と東アジアの交流から見る沖縄の自立を研究題材とした。昨年の論文の中でも第2章で、東アジア交流ネットワークと琉球貿易とある。実際に沖縄からは中国製の陶磁器が最も多く発見されることやそれに次いでタイ、ベトナム、朝鮮などの陶磁器も見つけられた。

琉球は1400年代から朝鮮、中国、日本と3つの国との関係は特に厚いものとなっており、特に日中間の関係は良好でこの両国に属しているような両属国家という対馬藩と朝鮮との関係のように、日中間の架け橋となっていた。

琉球は中国との冊封体制に対して直接的に朝貢をするために対馬藩とはまた違った難しさがあったのかもしれない。しかし、明朝から清朝への王朝交代の時期には琉球と新王朝は上手くいき、福州に琉球館での貿易が許可されるまで至った。琉球もまた四つの口にお

ける地理的優位をも駆使し、貿易拠点としての存在を見せた。

6-1. 対馬口と朝鮮通信使

日本の歴史にとって朝鮮半島の重要性は、松岡（2015）が指摘するように、アジアの文化や技術の交流窓口とともに、朝鮮民族が非侵略的性質という安全保障面において大きな意味を持っていた。こうした背景から、日本は 250 年近く鎖国をする一方で、日本文化を充実させることができた。

対馬藩は現在の長崎県対馬市に位置する。江戸時代、対馬藩の存続は、幕府の国内支配に適合する形で、朝鮮との関係を実現させられるかどうかであった。対馬藩は、幕府と朝鮮国との狭間という難しい環境下で、境界人としての調整力を発揮して結果を残し、幕府に「朝鮮のことは対馬をとおして」との信頼を得ることができた。その後、対馬藩は朝鮮との交易窓口や朝鮮通信使の運營業務一切を引き受ける中で、富を蓄え、一時は「西国一の長者」と呼ばれる豊かな時代を迎えた。

こうした中で、日朝貿易は 17 世紀日本の対外貿易全体に枢要な位置を占めることになる。対馬藩の貿易利潤は、最盛期には大阪の全人口を養うに足りる（当時の米価に換算）ものであったといわれている。徳川時代の日本経済が、朝鮮貿易という一要因抜きにしては成り立ちえなかったことを示している（トビ 1990）。

李御寧（2009）の『「縮み」志向の日本人』によると、朝鮮人と日本人の食事・習慣・文化には、価値観や美意識が正反対なのかと思えるような違いが沢は山あると述べている。日本語では、主体や主語を相手の方に置く。そして、それによって自分の位置を一步控え、そこから状況を見る特色がある。

松岡（2015）は、こういう状況下において、「日本では、「間」（ま）の文化が育まれていたのではないか。韓国でそれをやったら社会性を失いかねない。自己主張をしなければならぬ。こういう二つの国の価値観や美意識が正面から衝突すれば、隣同士の近親憎悪も手伝いあまりうまくいかないのも当然かもしれない」と述べている。

対馬藩は貿易関係の実務的交渉を朝鮮と行い、日本と中国・朝鮮の貿易の現状を熟知していた雨宮芳洲は、「都があっても田舎がなければ一国が成り立たないのと同じく、中国があっても周辺の諸国がなければ、中国も生きていけない。薬材、器材など互いに助けることが多い」と述べ、中国もまた貿易で日本に依存している面があることを良く知っていた。雨宮芳洲の国際観は諸国・諸国民は相互依存又は共生の関係にあり、互いに助け合って生きているというものであった。

6-2. 朝鮮通信使外交（日朝の視点）

1607年に朝鮮使節（朝鮮通信使）が来日して国交が回復し、1609年に対馬藩を仲介した李氏朝鮮との貿易が再開された。これは1609年には朝鮮政府と対馬藩・宗氏との間で締結された「己酉（きゆう）約定」を指している。その内容は、対馬から朝鮮への年間20艘の朝貢船の派遣、釜山の倭館での交易、日本人の漢城（ソウル）往還禁止などである。

幕府は朝鮮通信使を属国から宗主国に対する朝貢使節と喧伝することで、幕府の地位を高める材料に利用した。朝鮮使節が来日する回数が重なるほど、朝鮮は日本の属国であるという言説が徐々に広まり、日本全国の武士だけでなく、庶民の自国意識に刻印されていった。

他方で朝鮮側としては、使節派遣は日本からの要望に応じるスタンスであった。朝貢の意識はまったく無く、それどころか、1607年の第1回使節において「日本、国として専ら勇武を尊び、人倫知らず」と述べているように、日本を文明のレベルは低く、風俗が乱れている国と見下していた。

朝鮮通信使の派遣について、日本側はこれを公儀の威光を讃える使節と解釈した。一方、朝鮮側は、朝鮮に朝貢する宗氏に先導された日本巡察使と位置付けていた。相互の思惑の違いを内包しつつ、軌道に乗った大君外交が徳川国家解体まで維持される。

家康は対馬の宗氏に対して、朝鮮との講和促進を求めた背景には、日本と明国との間は、国交断絶状態であることから、朝鮮経由の外交ルートを確認すると同時に、朝鮮を経由した中国産糸や絹織物の輸入ルートを確認する狙いがあった。

対馬経由の対中国貿易は、長崎経由の中国貿易と同程度の取引額をあげていた。こうしたことから、対馬ルートの存在意義は大きかった。高級な薬品として珍重された朝鮮人参に加え、京都西陣に供給する中国産の絹の白糸を朝鮮経由で輸入した。

李氏朝鮮は中国に燕行使として平均して年2回北京に赴いていたので、朝鮮通信使として来日する際の交流情報は、中国の情報源となり有用であった。

6-3. 善隣外交と征韓論

江戸時代の日本と朝鮮との関係について、朝鮮通信使の研究が進む中で、両国の関係を「善隣外交」「誠信外交」と呼ぶべき友好的・親善的なものであり、両国間には対等な付き合いがあった。朝鮮通信使の行路では、各地で日本の学者や庶民は好意的で、学問や文化面でも尊敬と憧憬の念をもっていたといわれている。江戸時代において、両国の間には目立った衝突はなく、両国の関係は善隣外交であったという見方も一面では成り立っている。

しかし、日本の庶民や学者が、朝鮮に対して好意や尊敬の念をもっていたとまでは言い切

れないのではないかと疑問を呈する論もある。江戸時代にそのような意識を表明していた日本人は、朝鮮と関係が深かった雨森芳洲くらいしか見当たらない。芳洲は『交隣提醒』などで「誠信之交」の必用性を強調しており、江戸時代の日朝関係を語る際に、芳洲が代表的日本人として紹介されるようになってきていると述べている。

1864年11月26日、対馬藩士の大島友之允は、西洋列強の侵略に先んじて、幕府海軍を朝鮮に派遣し、軍事的に朝鮮を制圧すべきとの建白書を幕府に提出した。幕府は建白書を受けて、朝鮮の国内事情を調査する方針を打ち出し、明治維新直前の幕府の対朝鮮外交は大きく変質していった。

1869年、明治政府は、新政府成立を通告する外交文書を、対馬を通じて朝鮮へ送った。しかしこの外交文書は朝鮮国王から与えられた印を使用せず、さらに中国皇帝以外使用できなかった文字（「皇」「勅」）の使用など従来慣行を大きく逸脱した物であったため、朝鮮は外交文書の受け取りを拒否し、日朝関係は悪化した。明治政府はこれを改善するため、対馬の朝鮮外交権を取り上げ、外務省官僚を派遣して事態の収拾に当たさせた。こうして17世紀以来続いてきた通信外交体制下の二重構造のうち、対馬を媒介とする日朝外交ルートは終焉を迎え、明治政府と朝鮮王朝とのルートへと統合された（大石 2009）。

江戸時代の友好的な日朝関係と、明治時代の征韓論が生じた背景を、同じ次元で説明することは難しい。征韓論の土壌として、政権を握った明治政府は、1868年従来通り対馬藩を通して王政復古の通告をしようとしたが、日本側の書簡に明治天皇を朝鮮国王の上位に置く表現があったことから、朝鮮は書簡の受け取りを拒否した。日本は朝鮮の態度を、天皇に対して無礼であると見做し、中には武力によって国交を開くべしとの意見もあった。木戸孝允が征韓を唱えるなど、明治政府の首脳の中には既に征韓の考えが存在していた。ここで疑問となるのは、朝鮮が日本の天皇に対し、無礼な振舞いをしたという理由から、なぜ、朝鮮を征伐すべしという征韓論がすぐ生まれるのかという点である。江戸時代に日朝両国は平和的で対等であったと観る考え方からは、この疑問が解けない。

征韓論が生じてくる土壌には、吉田松陰の思想にも見られる。松陰は門下生に、将軍が朝鮮国王と対等に付き合うというのも古の上下関係を忘れた恥ずべき行為であり、日本と朝鮮との関係は、本来、日本が主で朝鮮が従であると教え込んだ。その根拠としたのが、神功（じんぐう）皇后による「三韓征伐」神話¹³であった（トビ 2008）。

このような「三韓征伐」神話と朝鮮通信使とを結びつける考え方は、当時の人々が残した資料からもうかがうことができる。朝鮮通信使とは、日本幕府の要請に応じて「信」（ま

¹³ 『古事記』『日本書紀』に由来。神功皇后が新羅を戦わないうで降伏させた神話。

こと)を通わずために派遣するものであるが 1794 年朝鮮通信使接待の顛末を著した『朝鮮人來聘記』の中で、朝鮮が貢を日本に送るのは、神功皇后の御神力によるものであり、それに続いて豊臣秀吉が朝鮮を討ったので、威光は今日まで照り輝いていて、朝鮮国王が三使を選んで貢物を載せて日本に向かうとする。朝鮮通信使が持ってくる贈り物を貢物というのは日本側の思い込みであり、朝鮮側にも属国とは朝貢という意識はない。そこには、江戸幕府の意向が大きく影響されていた。幕府は朝廷や諸大名に自らの「御威光」を示すために、人々に朝鮮通信使を「朝貢使節」と思いこませようとした。そこに「三韓征伐」神話や、秀吉の朝鮮征伐という言説が加わって、「朝鮮は日本の属国だから来日し、貢物をもって来るのは当たり前」という図式が人々の心の底に描かれるようになったといえるだろう(トビ 2008)。

歴史について考えるときには、ある時代がその前後の時代との違いや時代の特徴を考えることは大切であるが、その一方で、ある時代とその前後の時代との繋がり・共通性・連続性を認識することも同じように重要である。この考え方に立って江戸時代を捉えると、江戸時代は、その直前に起こった豊臣秀吉の朝鮮侵略、その直後の征韓論といった前後の時代の対立・緊張した日朝関係と異なって、善隣・友好的な日朝関係を築いた時代とする、江戸時代の特徴や特殊性を強調した考え方がある一方で、近代の征韓論の土壌に、近世以前からの神功皇后の「三韓征伐」神話や近世初頭の秀吉の朝鮮侵略があり、神功皇后や秀吉絡みの言説が江戸時代を通じて見られることを考えると、明治期になって征韓論という形で発露する朝鮮認識は、江戸時代以前から萌芽がみられ、江戸時代にも途切れることなく根を伸ばし続けていたという連続性の考え方もあるのではないだろうか。ある時代の特殊性と連続性のどちらか片方だけを強調するのではなく、常に両方を意識しながら歴史をみていくべきだろう(トビ 2008)。

6-4. 薩摩口と琉球王国

琉球国は、1372年から中国・明朝との冊封関係を結び、以来、中国(明、清)との間で活発に交易を営んできた。その間、江戸幕府・薩摩藩からの支配を受けながらも、中国への朝貢というより、積極的な意味での進貢という語を用いて関係を深めていた。琉球政府主導で、韓国、ベトナム、マレーシアなどの東南アジア諸国とも冊封下の同朋国を理由に積極的に交易を行い繁栄の基盤を築いた。

琉球国は諸国から買い集めた物品を売る一方で、中国からは数倍もの利益が得られる物品を持ち帰って、それらを日本及びその他の国々に売り、経済的に豊かな黄金時代をつくった。「唐一倍」との言葉が示すとおり、何倍もの利益を得ることができるとても有利なものであった。それにより、琉球は、15、16世紀と18世紀の二度にわたって経済的な黄

金時代を築き上げた。1506年、琉球王・尚真は2年一貢だった明への進貢を1年一貢の最恵国待遇を受けることになった。これによって、進貢の際に購入した中国商品を南方商品との中継貿易で莫大な利益をあげることができた。

琉球国と薩摩藩の決定的な関係は、1609年に家康の許可を得た薩摩藩（島津氏）が、琉球国に侵攻した結果、琉球国は独立王国との形を維持しつつも、実質的には薩摩藩に支配されることになった。薩摩藩は琉球産の砂糖を独占するとともに、琉球経由の中国貿易も手中にした。江戸期の琉球の位置づけは微妙であり、日中両属という形の独立国であり、薩摩は琉球を「附庸」（従属国の意）という曖昧な形で実効支配した。琉球経由の中国貿易回廊の確保、琉球での黒砂糖の栽培を促して砂糖貿易を独占し、抜け荷（密貿易）にさえ関与していた。

6-5. 琉球使節と朝鮮通信使

日中両属である琉球国は、従属の意思を示すため、江戸と北京をそれぞれ琉球使節団が往来した。琉球使節による中国への使節派遣は1634年から始まったといわれる。琉球は中国から冊封を受けている国々の中では小国であったが、高い席次を受けていた。中国の周辺諸国のうちでは、朝鮮国に次いで琉球国、続いて安南（ベトナム）、ビルマの順であった。そのため、2年に1度進貢使として北京に派遣することが可能となり、周辺の他国よりも中国との交易による利益や大国中国からの様々な情報収集ができるようになった。幕府に琉球使節を高く評価させるうえで、中国における琉球の第二の席は重要視されていた。

進貢使は北京で諸外国の使臣と交流の機会があり、その機会を利用して各国情勢を知り得る立場にあった。帰国すると薩摩藩に中国情勢等を報告している。こうした琉球からの情報は、鎖国時代の日本にとっては世界の動向やアジア情勢を認識する意味において重要な役回りを演じた。1780年から1854年の70余年の間に22回北京への使節団を派遣している。一行の人数は200名程度であり、中国・福州から北京までの旅路3000キロを往復5～8か月かけて往来した。一行は二艘の船に分乗して那覇を出発し、福州に着岸する。しかし、北京に赴くことができるのは、正使・副使と従者20人余の一握りであったといわれる。

他方において、琉球使節は北京同様に江戸に使節団を1634年から1850年の間に22回派遣している。1回の人数は63名～170名で、往復6か月の旅程であった。参勤交代の大名行列について、100万石の加賀金沢藩では4000～5000人の行列であった。朝鮮通信使は300～500名の行列。1682年の時は総勢362名に対し、日本側は「騎馬50騎、弓50、鉄砲50、長柄50、雑兵1700程」とも言われ、人数比でいうと、日本人5～6人に朝鮮人1人ぐらいの割合であった。琉球使節も規模は朝鮮通信使よりも小さいものの基本的には

同様であった。

江戸幕府は琉球使節が日本の御威光を高めるのに役立つと考え、朝鮮通信使を意識して厚遇のもてなしをしたといわれる。その際、朝鮮通信使一行と同じように、日光東照宮を参拝させている。朝鮮通信使は 1764 年を最後に江戸での聘札が終えているが、朝鮮通信使が江戸に往来しなくなると、その代替わりが必要になり、幕府はそれを琉球使節に求めた（紙屋 2003）。

6-6. 松前藩の対外交易

松前藩は、ロシアなど北方との関係、アイヌとの関係、山丹人との交易など複雑な要素が入り組んだ口（トビ 2008）である。

松前口では、山丹貿易（サハリン周辺民族、蝦夷アイヌ、松前藩との交易）が注目される。満州族を中核とする清朝に対して北方諸民族が朝貢交易にすることによって、日本には北方からの中国産品（蝦夷錦の名で中国原産の絹織織物）が流入した。

蝦夷地支配の松前藩が択捉、国後島の住民からロシア人の存在を知らされたのは 1759 年であった。しかし松前藩は幕府に知らせず秘密にしていた。秘匿の理由は、藩からアイヌとの交易を請け負っている商人たちが暴利を貪っていたこと、幕府から遠隔地を幸いに、ロシアとの抜荷（密貿易）を含め、藩自体がこれら商業活動を通じて大きな利益をあげていたことなどが考えられる（志水 1984）。

日本人のロシア嫌いの歴史的背景には、1806 年～1807 年のフヴォストフ事件にある。それ以前もロシア人に対する警戒心はあったが、田沼意次に見られるように、ロシアを新しい交易相手国として歓迎する風さえあった。ところが、ラックスマン（1766 年～96 年）に続き、第二回遣日使節レザノフが対日交渉の失敗を一転して武力で解決しようとして引き起こした樺太千島の日本人会所襲撃事件は、対露警戒心を日本人の間に高め拡大してしまった。

これ以後、日本側の公式文書にロシアを「魯賊」と呼び、安全保障上の懸念材料となる。しかもオランダよりも欧州第一の大国で我が国と国境を隣接している。こうして日本の対ロシア政策の基本は和戦両様の構えを同時にもつことが幕閣の合意事項であった。ロシア船を打ち払いつつも和を求めようとし、和談をしながらも同時に武力は備えておく、この和戦両様の構えはフヴォストフ事件が日本側に与えた最大の教訓から生まれたものであり、その後の日本の露政策の原型となったのである（志水 1984）。

松前藩では場所請負人制度など特有の交易制度を設け、運上金を確保していた。松前には、北陸・近江筋の商人を中心に利潤を求めて商船が集まり、米・酒・煙草・衣類などと引き換えに、毛皮や鮭・鯨などの産品を本州に運んでいった。

鎌倉・室町時代から蝦夷地に対する和人支配が始まり、1604年家康は松前藩（松前氏）に蝦夷地での交易権の独占を認める。松前藩による全島支配が確立するのが1669年でアイヌは藩主に絶対服従を誓わされた。

6-7. 田沼意次と赤蝦夷風説考

田沼時代（1772年～1786年の15年間）において、オランダ商館長チチングの記録によると、田沼意次の指導する幕閣には開国思想を抱いていたとする主張がある。外国人を自由に国内に入れて優秀な科学技術を学ぶことを老中松平津間守が建議し、田沼意次が日本と外国との交通の許可、そのための船舶建造、外国人誘致が提議されたが、松平津間守が間もなく亡くなったので実行されなかったといわれている。

工藤平助の『赤蝦夷風説考』（1783）には、ロシアとの交易を解禁して、日本のどの港でも交易が行われるようにするという計画が提案されており、貿易こそ安全保障の第一条件というものであった。事実上、鎖国政策の否定であり、日本開国要求論であった。積極的に西洋諸国との交易を行い、日本のどの港でも交易が行われてもよいという家康の通商政策が復活するかと思われた。1785年幕府が蝦夷地に派遣した探検隊は日本政府が公式に北方に派遣した最初の探検隊であった。しかし、開明的或は重商主義的な国土開発論者であった田沼意次の方策に、強い反感を持つ松平定信の登場で、国土開国計画は潰える。定信は、鎖国は祖法という考え方を打ち出して、これを動かしがたいものとする。定信の施策は文字通り鎖国の完成であった。

工藤平助の『赤蝦夷風説考』（1783）は、林子平の『海国兵談』（1791）よりも古く、開国の議論としては最も早い時期のもので卓越な意見をもっていた。その趣意は、ロシアが段々版図を拡げ、大国となって、漂流の日本人を利用して日本（語）まで研究し、北海を乗りまわして我が国の地勢をも見届けている（辻 1980）。

辻(1980)によれば「我が国においては、このまま打ち捨てておくべきでなく、仔細に吟味すべきである。要害を固めることは第一であるが、次に抜荷（密貿易）を禁止しなければならない。そのままにすれば段々巧みになって盛んになる。大阪の商人が密かに千島などでロシア人と秘密の交易をして、莫大な利潤を得た者があった。その利益は、僅か1、2両の米と酒を持って来て、百両程の商品と交換することができた」という。

禁止するよりも、表立って露国と交易を行うしかない。それによって、自ら先方の人情も良く知ることができ、風土も明らかになる。また、そのまま打ち捨てておけば、カムチャッカの者は、蝦夷と一緒にあって蝦夷がロシアの命令に従うことになり、我が国の支配から離れてしまう（辻 1980）。

第七章 長崎口とオランダ風説書

江戸時代の日本は、貿易面ではどの程度の鎖国であったのか。鎖国日本（長崎出島の市場）をオランダ東インド会社の世界市場の中で位置付けてみるのが重要である（山脇 1980）。長崎という地名は、細長い海に突き出した岬のような丘「長い岬」が語源という説もある。このような地形は、軍事港湾施設として有用であり、長崎は日本イエズス会の軍事拠点でもあった。

教会関係者の安全を保障する堅固な場所＝避難所について、キリスト教徒領主と考えられたが、実際、有事の際には宣教師を保護・救済するどころか、逆に教会からの保護・救済を受けなければならなかったため、保護者として地位も極めて不安定な在地の個別領主権力の避難所とするのではなく、日本のキリスト教最大の力として位置づけられていた長崎を避難所とするにいたった。長崎は自然の生んだ堅固な土地であり、火急の際には人々が頼みの綱とするには実に都合のよい安全な地であったからである。その後、日本イエズス会の軍事的拠点としての機能も付与される（高橋 2006）。

7-1. 長崎口とは

長崎口は出島におけるオランダとの交易の印象が強いが、主力は対中国貿易である。年間平均 70 隻前後の中国船が来航していた。幕府は 1689 年長崎に「唐人屋敷」を創り中国人を收容した。屋敷の総坪数は約 1 万坪、二階建て家屋が 20 棟、市店 107 であった。毎年百隻前後の中国商船が渡来し、人口 5 万人の長崎の町に 4~5 千人の唐人（中国人が主体であるが東南アジアの人々も含む）が滞在して、長崎は日本の中の国際都市となった。江戸時代中期以降の知識人たちは、長崎に来て異国の風俗に触れることを念願した。

唐人風説書は、唐人（満州族主導の清の民でないという意味で漢民族）経由の情報は、唐船の船頭から通詞が中国事情、その他の国の動向などを聴取して長崎奉行に提出し、江戸表に報告した。

西暦	唐船数	オランダ商館船数	備考（出来事）
1641年	0	9	オランダ商館出島へ
1648年	20	6	1644 明滅亡
1650～59年	計 472（年平均 47）	計 72（年平均 7）	1651-54 英蘭戦争
1660～69年	計 380（年平均 38）	計 79（年平均 8）	
1670年～79年	計 300（年平均 30）	計 50（年平均 5）	
1680年～89年	計 712（年平均 71）	計 38（年平均 4）	
1690年～99年	計 797（年平均 80）	計 44（年平均 4）	
1700年～09年	計 751（年平均 75）	計 41（年平均 4）	
1710年～19年	計 498（年平均 50）	計 27（年平均 3）	1716-45 享保の改革
1720年～29年	計 320（年平均 32）	計 19（年平均 2）	
1730年～39年	計 247（年平均 25）	計 18（年平均 2）	
1740年～49年	計 154（年平均 15）	計 23（年平均 2）	
1750年～59年	計 150（年平均 15）	計 22（年平均 2）	
1760年～69年	計 124（年平均 12）	計 17（年平均 2）	1767-86 田沼時代
1770年～79年	計 130（年平均 13）	計 17（年平均 2）	1776 アメリカ独立宣言
1780年～89年	計 129（年平均 13）	計 14（年平均 1）	1787-93 寛政の改革
1790年～99年	計 90（年平均 9）	計 8（年平均 1）	
1800年～09年	計 107（年平均 10）	計 11（年平均 1）	
1810年～19年	計 103（年平均 10）	計 9（年平均 1）	
1820年～29年	計 81（年平均 8）	計 19（年平均 2）	
1830年～39年	計 71（年平均 7）	計 12（年平均 1）	
1840年～49年	計 60（年平均 6）	計 10（年平均 1）	1844 オランダ 国王開国勸告
計 1641-1857年（216年間）	計 5785隻（年平均 27隻）	計 606隻（年平均 3隻）	1861-65 アメリカ南北戦争

表 6. 長崎渡来の唐船・オランダ商館船数一覧¹⁴（船数：隻）

「御老中でも手が出せないは大奥・長崎・金銀座」といわれたほど、幕府は貿易・通訳・物資調達・船修理など交流技術を長崎に独占させたといわれる。こうして、幕府は長崎の人々が持っていた外国人と付き合い方を緩衝材として利用し、オランダ人と接したので

¹⁴出所：金井俊之編『長崎年表』をもとに越田辰宏編集

ある。幕府と長崎は相互依存の関係にあった。

その一方で、「長崎は日本の病の一つのうちにて御座候」（長崎は日本の病の一つ）の言葉は、田沼意次政権失墜後の 1786 年末から 1787 年初め頃、松平定信が、将軍家斉に上申した手紙の一節である。当時日本社会が抱える問題の一つに、長崎の統治体制（貿易政策、長崎に関係する諸藩・町人との関係、滞在する外国人の怨嗟など）を指摘している（辻 1980）。

長崎奉行としては、異国人に対する警戒の主対象がキリスト教布教から密貿易へ切り替わったのが、17 世紀後半から 18 世紀初頭であった（木村 2016）。

18 世紀初頭の長崎の人口が推定 5 万人前後で、日本各地から商人や遊学者が多数いた。19 世紀になると 3 万人を切る人口へと推移する。貿易額の減少は長崎の衰退に直結する。戦国時代末期の長崎の町は、大村藩によってイエズス会に寄進されていた時期があったことから、江戸時代もキリシタンであった人が多かった。長崎奉行は、長崎の町人は誰もが隠れキリシタンなので、万が一、南蛮船が町の近くまで入港すると、転んでいた者たちの精神バランスが崩れて、キリシタンに立ち戻ってしまい、第二の島原の乱が長崎で発生することを危惧していた。

長崎奉行の職務は、町人と異国人と幕府との間のバランス感覚が求められていた。都市長崎の市井の人々の暮らし、異国との貿易であるべき姿との間に苦慮し、ともすれば幕府内で浮上する長崎支配強硬論にも対応している。なかなかコントロールの効かない長崎の都市異国人たちに苦悩をしたり、或は、現実性に欠ける正論を伝えてくる幕府の中枢があった。長崎奉行は、上からも下からも困難を押し付けられていた。長崎の都市を支配することによって、褒めたたえられることもあれば、怨嗟の対象になることもある。利害関係が複雑に存在する長崎においては、一方的な称賛や非難とは限らない（木村 2016）。

長崎の町人に支持される長崎奉行とは、先例に任せて、貿易に対する監査なども表向きは行ったことにしている奉行であった。

長崎を構成する様々な人々にとって、都合のよい人物はともすれば搦め捕られて失脚する。かといって幕府の政策を原則論で強硬に推し進めれば、そこには怨嗟の声が満ちてくる。幕府からの指示と、実務を担う町人たちの間に挟まって苦悩する奉行の姿がここにある。

それでは、長崎で評判が良く、長崎奉行以降も出世して生き残ることができた長崎奉行にはどのような人物がいたのか。一例として、久世広民がいる。久世は 1775 年から 1784 年までの 8.5 年（平均的任期 4 年）長崎奉行を務めた。幕府の政策実行と、長崎の人々の成り立ちを考えた都市政策の両方でバランスがとれない限りは、このような長期間奉行を全うすることは難しい。久世は、佐賀藩と長崎町人とのもめ事を、公の裁判になる前に、表沙汰に

しないで穏便に対応するなど、其々の立場を尊重した。また飢饉時に幕府の米を貸付け、町人を救うなど評判が良かった。さらには、オランダ商館長とも関係が良好であった。商館長上陸時の身体検査免除については、経済的な問題（宝石などを洋服の中に隠して密輸）があったが、商館長の身体的な尊厳を優先させた（木村 2016）。

18 世紀の段階で、長崎貿易の継続が国家的損失になり得るといふ捉え方は、新井白石により認識され、改善が試みられていた。18 世紀後半になると、財政的認識のあり方はより深化し、長崎と国家利害とが対立し得ると考えられるようになっていく。

1790 年の貿易半減令は、名目としては維持しながら、実際にはその数字にこだわらないといった実態があった。こうした二重基準を用いながら貿易を実施する背景には、19 世紀の長崎奉行は 18 世紀と異なり、国際情勢の変動に気を配りながら長崎の都市支配を吸薦める必要があり、最前線に立つ長崎奉行の姿があった（木村 2016）。

7-2. 港湾都市としての長崎

本項では、如何にして長崎県が「港湾都市」となり得たのか、そして長崎県の経済についての歴史的な背景と現在、そして未来への考察等を見ていきたい。長崎県の経済は、造船業を始めとした製造業やハウステンボスを中心とした観光業が一般的に想定されるイメージであり、また港湾都市というイメージはあるものの、それが長崎県の経済においてどれほどの存在感を持っているかということはいまだにあまり明確ではない。

そこで、港湾都市としての長崎県について考察するが、。その際に最も重要なことは、長崎県の地形である。長崎県は、東に佐賀県と隣接するほかは、その周囲を海に囲まれている。また、アジア・ダイナミズム班において過去にフィールドワークで訪れたこともある対馬等、島嶼が 971 もあり、その数は日本一である。そして特筆すべきはその海岸線の長さである。長崎県の海岸線の長さは 4,137km であり、その長さは北海道に次いで国内二位の規模である。面積が北海道の 20 分の 1 ほどの長崎県の海岸線がこれほど長大なのは、島嶼は非常に多いことに加え、リアス式海岸で海岸線が複雑に入り組んでいることに起因する。この地形的特徴により、長崎県全域には総勢 83 箇所もの港湾が点在しており、その数は日本国内全体の 7.4%にも及ぶ。

この点から分かる通り、長崎県はその地形的特徴からして港湾都市としては絶好の地形を有しており、また朝鮮半島や中国とも非常に近いことから（対馬に至っては朝鮮半島との距離が約 50km ほど）、日本やアジア、そしてヨーロッパとの歴史において、地政学的観点からも重要な都市であった。

長崎県には出島のオランダ商館や唐人屋敷等、外国との関わりが深い地域である。今とな

っては、結果として長崎県が鎖国政策下における「四つの口」の一つとして海外との窓口となったようであるが、上記のことを踏まえると、長崎県が選ばれたのは偶然や結果論ではなく、必然であったのではなかろうか。また、長崎県が港湾拠点に適していることを当時のヨーロッパの国々は知っていた可能性もある。だとすれば、東アジアに進出してきた欧州の人々の世界観、いわば地政学的知は非常に洗練されたものだったのであろう。また、この頃の経験こそが、長崎県における「港湾都市」としてのアイデンティティを芽生えさせたのだと思えてならない。加えて、鎖国政策下の四つの口の他の地域と比較すると、例えば朝鮮・琉球は幕府の関与が強い状態における交流、関係であったが、長崎とオランダや中国（唐）の関係は、幕府の関与がなく、現代風に言えば民間レベルでの関係と位置付けられていた。そのことも、現在の長崎県における県民性や長崎県の多様性に関係していると考えられる。

7-3. アジアダイナミズムにおける長崎県の地政学的優位性

オランダや中国との関わり、鎖国政策下における窓口としての役割を通じて、長崎県における港湾都市としてのアイデンティティが芽生えたことは先に触れた通りである。では、その経験に基づいて、現在の長崎県の経済はどういった状況であり、今後の展望はどのようなものなのかを見ていきたい。産業構造のポイントとしては、漁業と食料品製造、輸送用機械器具（船舶）製造業等の産業競争力が高く、特に船舶や漁業は域外から稼ぐことができる必要な産業ということである。港湾数が多いことから、漁業は活発に行われている。また、造船業に関しても、三菱重工業の長崎造船所に象徴されるように、造船および関連産業が盛んである。

それに加えて近年改めて注目されているのが、観光産業である。長崎県の観光といえば、HIS傘下となっているハウステンボスや、稲佐山、グラバー園や軍艦島等であろう。もともと観光資源は豊富であり、地理的にもアジア各国からの観光客も多い。日本全体の観光産業に目を向ければ、2016年10月末時点で、1月～10月までの訪日観光客が初めて2000万人を超え、2020年の東京オリンピックに向けて訪日観光客数は高い水準で推移していくものと予測される東京が最も観光客が訪れる場所であることに変わりはないが、九州地方も観光地として高い人気を誇っている。また九州地方は、訪日外国人のみならず、日本人の国内旅行の行き先としても人気であろう。

それでは何故、長崎県は観光地として人気があるのだろうか。第一の理由としては、当然のことながら、観光資源に恵まれているからである。それに加えて、先に触れた通り、長崎県には歴史的に見て、観光地としての素地のようなものがすでに出来上がっていたのでは

なかろうか。

唐船のもたらす経済効果の例として、1隻50人が搭乗した200隻の船舶がやってきて50泊していった、という話がある。それだけで現在の価値に換算しても概ね50億円ほどの経済効果があったそうである。それに加えてオランダ商館の存在等、古くから長崎県の人々は中国やオランダ等の諸外国の人々と共に暮らしてきたのである。そして長崎県の人々は、そのような経験を踏まえて彼ら外国人との関わりを「受容しながら（自らのアイデンティティを）編成して」いったのである。それが長崎県民の県民性であり、彼らの中に脈々と受け継がれている観光地「長崎」としてのアイデンティティなのではなかろうか。

地方創生が叫ばれて久しいが、長崎県はその素地と可能性を兼ね備えた重要な町であると筆者は考える。

7-4. 出島とオランダ東インド会社

長崎出島のオランダ東インド会社は、インドネシアのバタビアにアジアの本部を置く東インド会社の出先の代表（支店長）であった。また、オランダ商館長はオランダ国家の外交官でなく私企業の会社員であった。

江戸期、長崎出島に「オランダ東インド会社」の商館が置かれ、商館長が1609年から1850年まで江戸参府を167回行なわれた。その間に「オランダ風説書」を通じて世界情勢を幕府に提供したが、オランダにとって不都合な情報は伝えられなかった。その典型が、1795年から1813年までオランダという国が事実上消滅していた事実の隠蔽である。

オランダ風説書は世界史的に見ても独特な制度であった。欧州とアジアの情報を200年以上にわたり定期的に幕閣に提供し続けたメディアであった。

長崎出島のオランダ東インド会社の商館長（カピタン）が江戸に赴き将軍へ通商免許のお礼と献上品の贈呈儀式が、1609年から1850年まで167回（通常参府166回、特派1回）行われた。1633年からは毎年1回、1750年からは5年に1回。カピタン江戸参府一行は、通常、商館長、書記、医師の3名程度。オランダ側の従僕、日本側の付添検使、同心、通詞、荷物運搬人、駕籠かきなど総勢150人を超す大行列であった。三万石の大名の参勤交代級の壮観だったと思われる。通常約90日間かけて長崎と江戸を往復した。オランダ人と日本人との直接交流として意味を持った。

1636年時点のオランダ東インド会社による日本への移送品の87.7%が繊維製品（生糸59.4%、絹織物21%、毛織物5.5%、綿織物0.9%、麻布0.5%、その他繊維0.4%）であった。繊維品以外では、皮革5~6%が最も多く、あとは染料や砂糖であった。当時、生糸・絹織物・砂糖は中国から台湾のオランダ商館に入ってから日本に運ばれた。中国から会

社の本拠地であるバタビア（ジャカルタ）に生糸・絹織物が集積され、シャム（タイ）から入る鹿革や染料、インドから運ばれる綿織物とともに、日本に輸入された。木綿は 1705 年には 20.7%まで上昇している。

輸入貿易品は、衣類の生地（中国生糸、絹織物、インド木綿織物）。そこに温かい素材、美しい色彩、模様などを採用した。その他、象牙、牛革、鮫皮、水牛の角、薬、砂糖、胡椒、書物、武器、ガラスなど。輸出品は、漆器、醤油、酒、扇、絹織物などであった。

江戸幕府が唯一西洋の国として選択したオランダは、当時西洋の最先進国であった。日本が拒否したポルトガルは過去の存在となりつつあった点では、日本の選択は妥当であったといえる。

オランダ東インド会社は、日蘭貿易は規模が小さくなり、利益も上がらなかったため、対日貿易に見切りをつけ、撤退することを何度も真剣に検討していた。しかし、会社全体の債務の主因が軍事費であり、日本においてはオランダ人の安全は幕府が保障していたため武装する必要がなく軍事費に費用をかけずに済んだことと、幕府の貿易統制による利益が少なかったが、日本との独占的な関係を断ちたくなかった。

第八章 株式会社の原点 オランダ東インド会社 (VOC)

本章では、当時重要な役割を果たしていたオランダ東インド会社を中心に、16-17 世紀のヨーロッパの情勢の中のオランダのポジションや、ヨーロッパ諸国のパワーバランス、当時同じアジア市場で貿易を行っていたイギリス東インド会社、アジアで経済圏を確立し競い合っていた日本を取り巻くアジア諸国との関係を比較しながら長崎出島のポジションを見直し、長崎口における出島の薩摩藩、そして徳川幕府の貿易技術、またオランダがどのように当時のアジアを利用し、支配していたのかをそれらの関係性から考察する。

8-1. 16-17 世紀のプロテスタント国オランダと進出するオランダ東インド会社

大航海時代におけるポルトガル・スペインのアジア進出はヨーロッパに大きな影響を与えた。1517 年マルティン・ルターの宗教革命を始めとし、1588 年にはスペイン無敵艦隊がイギリスに撃退された。そして、17 世紀初頭、東インドでポルトガル人の権威を脅かす競争者「オランダ」が現れたのである。

1517 年マルティン・ルターによる「九十五カ条の提題」の贖宥状(免罪符)批判から始まった宗教改革はカトリック国であるスペイン、ポルトガルの 2 強国が力を弱くしていったことに、影響しているのかもしれない(寺島 2012c)。ルターの教説はドイツの民衆の間までひろまっていた。それは当時進歩しつつあった活版印刷などのメディアによるプロテスタント思想の普及に深く関係している。スペイン占領時代のオランダは、プロテスタントの立場を強く持ち、カトリック勢力であるスペインと対立し、1568 年にはスペイン・ハブスブルク領からの独立を果たした。カトリック勢力であるポルトガル・スペインはアジア諸国に警戒されるようになり、時代とともに衰弱していった。カトリックと言え、1549 年フランシスコ・ザビエルの日本来航もそうである、イエズス会の創設メンバーの一人であった彼はカトリック系であり、日本に訪れ宣教活動が一度は繁栄されるが 17 世紀には弾圧され、カトリック勢力は下降していく一方であった。「1520 年代にドイツからルター派が、次いで 1540 年代にフランスからカルヴァン派が流れ込んだ。されに再洗礼派や様々なプロテスタントが亡命、流入し、欧州のプロテスタントの吹き溜まり、よく言えば集束地となった。(寺島 2012c: 20)」オランダは、はっきりと新教プロテスタントであることを主張し、ポルトガル・スペインに対立的な意識を持ちアジア進出し、オランダ東インド会社と共に海洋国家として仲介貿易により、アジアの海に影響を与えるなど、17 世紀初頭にオランダは頭角を現したのであった。

オランダは、小国ゆえに陸軍よりも海軍が力を持っていること、貴族が少なかったため市

民の力、商人階級が大きく、海洋国家としての特徴があった。毛織物の生産やヨーロッパにおける貿易の中継国という特徴があり、アジア進出後の東インドで、オランダの仲介貿易の動きは著しくに発揮された。1568年にスペイン・ハブスブルク領からの独立を宣言したオランダ（スペイン領北部ネーデルラント）はその後軌道に乗り、17世紀の初めには、世界で最初の株式会社、オランダ東インド会社設立を達するという海洋国家として動きは止まらなかった。オランダ東インド会社はバタヴィアに拠点を持ちそのあと日中間の橋渡しとなる台湾と航路を進めて拠点を持った。全盛期では長崎、東南アジア、インド、などと50か所以上に要塞や商館を展開しており、オランダ東インド会社の中継貿易という特徴をもってアジアの海に広い貿易の力はすさまじいものであった。このオランダ東インド会社の貿易は当時のオランダを象徴する強みであった。ヨーロッパ諸国はアジアを蛮族、利用されるべきという前提で考えられていたことも興味深い。

8-2. 日本の貿易体制、中国冊封制度を拒絶

長崎・出島におけるオランダとの交易は趣深い。当時徳川幕府の力はより日本全国支配されていたというよりも、全国各藩の諸侯の力に頼ることもあった。前史のなごりで藩ごとの大名の力は大きいもので、4つの口を任されていた諸侯は特に力を持っていることが期待された。当時の日本の貿易体制からオランダを受け入れるに至った利益、また出島がどのように作用したかを論じる。オランダのアジア進出の時代において、鎖国のイメージが強い日本であるが、その直前の時代背景には日本の大航海時代ともよく呼ばれる日本の貿易展開があった。実際にはアジア諸国（ベトナム、フィリピン、タイ）に7万人ほどの日本人が送られていた。

朱印船貿易では、実際に1603年から鎖国が完成されるまでの約30年間、朱印状を渡された南洋渡航船は356隻が日本から海外渡航をしていた。この日本船の建造技術が高かったことは、三浦按針の背景にもしばしば見える。交易を求めて日本に来航したリーフデ号に乗っていた三浦按針ははじめ家康に西洋船建築を手伝う様に指示されたのである、もちろん建築士でもなんでもない三浦按針は困惑したがその指示に従った。

倭寇という存在も当時の日本を象徴する一つであった。明の海禁政策により、倭寇の密貿易は16世紀には盛んであり、彼らの密貿易や海賊行為は当時のアジアの海では常識であり、日本人の利益を求めて出た国外での行動はとてアグレッシブであった。

1640年貿易再会のために来航したマカオの使節団の処刑、1642年アントニオルビノ神父一行密入国事件、遠藤周作(1966)の小説「沈黙」のモデルとなった1643年の梶目大島事件などがあるように、鎖国制度において幕府は神経をとがらせており、幕府は国を選んで

交易をしていた。

1647年ポルトガル使節が長崎に来航した際、彼らが途上でバタビアに立ち寄り補給を受けたことが分かり、今後そのようなオランダが使節を援助することが分かれば、幕府はオランダ人との貿易を禁止し厳罰に処すとまで至った。

漢民族の明から満州民族の清（1636-1912）に王朝が変わるという大きな歴史の変化があった。この政権交代は日本にとって中国の冊封体制からの独立のきっかけになった。オランダはこの両国の関係を保つ、重要な役割をしていたのではないだろうか。

8-3. オランダ支配下の台湾

1624年に台湾南部を占領し、オランダ東インド会社の拠点を築いたオランダであったが、17世紀オランダからの視界では「17世紀前半の時点において明朝政府にとって台湾は「域外」であり、中国の権益とは認識していなかったということだ(寺島 2012b: 17)」と注目されている。後にこの台湾という島は日中間貿易における重要な役割を果たすことになり、しかもその支配権はオランダが持っていたのだ。

オランダの台湾支配は日中間貿易の架け橋となり、オランダが意図したものではなかった。極東におけるポルトガルの日本、中国との独占貿易を打ち破り、海賊行為が目立つオランダであった。しかし1622年ポルトガル領マカオの駆逐の失敗から敗北の連続であった。次にスペインが掌握していた華南—マニラ間の交易の中心港、漳州に交易を計るも失敗し、そして中国沿岸の離島澎湖諸島に拠点を置こうとも明朝政府に敗れた。最後に台湾南部占領を計り拠点を築き、城を作った、それがゼーランジャ城である。1650年には本島側におよそ3000人駐屯できるプロビデンジャ城（現在の赤カン楼）も築き台湾全土を支配した。

台湾支配の波に乗ったオランダは日中間貿易に10%の関税をかけ、日本からの不満が大きくなっていった。そこで起こった事件が1628年「オランダヌイツ人質事件」である。これはオランダの悪態に痺れを切らせた船頭浜田弥兵衛が台湾長官ヌイツの息子とオランダ人5人を長崎に攫った事件である。この事件はオランダ側に不都合であり、台湾統治も日本との交易も重要視しており、ヌイツ長官は日本に引き渡され、長崎に5年間幽閉された。その後交易関係は回復し、1639年に鎖国令発布、1641年出島にオランダ商館を移転しその後20年間関係は続いたのであった。

海賊行為やオランダ長官ヌイツ事件などの悪行が目立つオランダであったが、台湾拠点という地理的優位は、四つの口に匹敵したのではないかと推測する。また、オランダの仲介貿易の力も台湾を通して発揮されていたに違いない。

このようにヨーロッパにおけるオランダと日本の政策から見るオランダとの関係、さらに

はオランダ支配時代の台湾は日中間貿易のバランスを取っていた。両国の関係性がヨーロッパ情勢、アジアの日本を追うことによって解明できるのではないかと思う。オランダの特徴である中継貿易から覇権国オランダが日本を利用しようとしていたこともまた、日本との貿易を独占できたことに関係したのではないだろうか。オランダ東インド会社がスペイン、ポルトガルとの対立を意識しアジアでの貿易を展開していったことや日本が朱印船貿易、倭寇の密貿易という政策でアジア諸国に影響を与えたことはアジア諸国の関係性を見る上で大変興味深い。台湾という国の役割も日本、中国、オランダの関係を見る上で重要な役割を持っていると考えた。四つの口の長崎口を取り巻く諸国の関係性はオランダをはじめとして複雑に入り組んだものであり、そのバランスは覇権国オランダがとっていたのではないだろうか。

8-4. オランダ東インド会社設立

オランダ東インド会社は、1602 年設立、正式には「連合東インド会社」オランダ語で Vereenighde Oost Indische Compagnie といい、略称を“VOC”と呼ばれ、喜望峰からマゼラン海峡までの広大な地域の貿易独占権を与えられた。連合東インド会社（以後略称 VOC を使用）はそれ以前にあった多くの貿易会社（アムステルダム、デルフト、ホールン、ロッテルダム、エンクホイゼン）を統合するという難しい交渉が続けられた。合併に伴い、すべてがアムステルダムの意志によって決まってしまうのではないかという懸念があったが妥協し、誕生した巨大会社である。彼らはオランダ（ネーデルランド連邦）政府から外交権や兵権、貨幣鑄造権などと国家に匹敵するほどの権限が与えられていた。

その権利を形として持っていたのが、まさに特許状である。VOC は設立に、六つの都市から集まった 6,424,588 ギルダールという大きな資本金を持ち、さらにポルトガルに対抗する意識が強く、それを追い落とすという確固たる目標もあった。この VOC の貿易は当時のオランダを象徴する強みであった。

8-5. 株式会社オランダ東インド会社の仕組み

オランダがアジア進出した決定要因として多額の出資があったことは紛れもない事実であった（羽田 2007）。1585 年八十年戦争でアントワープが陥落したことから、多くの商工業者がアムステルダムに移住した。一方、ポルトガルの異教徒弾圧から多くのユダヤ人もアムステルダムへ移住をした。VOC への出資は半数近くが彼らによるものであった。アムステルダムは 1585 年から 30 年余りの間に 75,000 人もの人口を増やし、1622 年には 105,000 人が移住する都市に成長し、急速にその経済力を増していった。

オランダの高度な航海技術とアムステルダムに集中した資本がアジアへ進出する契機に

なったことは間違いない（羽田 2007）。そして 1595 年喜望峰を超えて東インドへ向かうため、4 隻が 10 万ギルダー以上の銀貨や品物を持ちアムステルダムを出発した。

さらに、VOC には正式の本社はなく、6 つのカーメルと呼ばれた支社（アムステルダム、ホールン、エンクハイゼン、デルフト、ロッテルダム、ゼーラント）で構成されていた。各支部の 60 人からなる取締役会が存在しており、アムステルダム 20 人、ゼーラント 12 人、他 4 支部からそれぞれ 7 人ずつからなるものである。出資する株主は最低でも 10% の配当金を受け取ったが、当時の VOC の経営方針にとっては、何の影響もなかった（羽田 2007）。

VOC の組織幹部には、取締役の中から選ばれた 17 人からなる経営方針の決定をする 17 人会という取締役会があった。彼らの主な仕事は東インドへ派遣するカーメルごとの船の隻数、社員、船員、水夫の人数の決定、東インドへ送る商品の種類と数の決定、VOC への注文品の種類と数の決定、東インドからの商品の入札競売、出資者への配当額の決定であった。

また、17 人会の決定はすべて、バタヴィアのインド評議会に届けられた。情報、通信の往復に少なくとも 1 年半かかるので、基本的にはバタヴィアの総督の判断で各商館、要塞の報告や問い合わせは処理していた。17 人会に次いでインド評議会も重要な役割を果たしており、その地位は、出張所というよりアジア本社といっても過言ではないほどであった。

8-6. オランダ東インド会社に対抗するイギリス東インド会社

ヨーロッパ諸国はオランダ人のめざましい活躍を知り、イギリスも東インドへの航海を思い立ったのがイギリス東インド会社（EIC：East Indian Company）であった。そのためには、遠洋航海の強固な船、東方貿易でイギリスの交換資源として大量の銀、また船員、水夫、医師などを多く手配しなければならない。さらに、船が一度出航し再び戻るまで少なくとも 1 年半はかかり、その間には無利益という状態であるし、戻ってこなければ大きな損失となるリスクの大きい長期にわたる投資のようなものであった。このように東インド貿易はオランダをただ模倣するだけで成功できるような簡単なものではなかった。当時のポルトガル王室の財力を持ってしても、東インド貿易を単独で続けるのは難しかったのである。多くの商人や金融業者はやはりリスクが大きく資金徴収ができない東インド貿易ではなく、リスクが低く利益をすぐに生み出すことができるヨーロッパ域内の貿易を主に行っていたのである。

イギリスのロンドンの人々とオランダ諸都市の人々だけが東方貿易に意欲を持ち、そして財力を持っていたので東インド貿易に参入した。そして、イギリス東インド会社（以後力章

EIC を使用) 設立にあたって、モチーフにしたのがレヴァント会社という地中海東岸地域との貿易を専門とする会社であった。

イギリス東インド会社には喜望峰周りではなく地中海やモスクワを経由する陸伝いの入手ルートがあった。レヴァント会社の方式は資金を一 回の航海ごとに集め、公開が終わると出資率にしたがって元本と利益を出資者に戻すという決算方法をとっており、彼らは株式会社という仕組みはまだ採用していなかった。

EIC は、このレヴァント会社に大きく影響を受けている。なぜなら、第一回の航海に出資した 215 人の株主のうち 3 分の 1 はレヴァント会社の関係者であったことや、実際レヴァント会社の総裁トマス・スミスはイギリス東インド会社の総裁をも兼任していた。また東インド会社に投資した人の中にはモスクワ会社（ロシア経由でペルシアやインドとの貿易を試みる会社）やヴァージニア植民協会の株主もいた。トマス・スミスはヴァージニア植民協会の責任者でもあり、この男がイギリスに与えた影響は大きい。イギリス東インド会社へ集められた資金は 68,376 ポンド。堅実なイギリス人が毎日働いて得られる年収でも 10 ポンドほどだったことからこの数字は巨大である。1601 年エリザベス一世から特許状が発布され正式にイギリス東インド会社は誕生した。

1601 年 3 月に第 1 回の航海が実行され、マラッカ海峡でのポルトガル船掠奪もあり、帰国後、利益率は 155%と成功を収めた。又、第 2 回の航海は 1604 年に実行された。EIC と VOC は名前から国営会社だと思われるが、会社を設立したのはロンドンやアムステルダムの商人であり、国政府からは特許状を与えられたにすぎないのである。

8-7. 成功したオランダ東インド会社と追うイギリス東インド会社

東インドとの貿易は誰もができる簡単なものではなかった。EIC と VOC は二つの貿易を 17 世紀に活発に行っていた。1 つは東インド貿易、長期間に渡る航海により資金回収が難しく、リスクが大きい利益率は莫大である。もう一つはヨーロッパ域内貿易、これは反対に短期間で幾度も資金回収が可能であり、リスクも少なく安全であった。VOC は前者の貿易を重点的に、EIC は後者の貿易の割合が多かった。

二つの東インド会社は同じ東インド貿易をしているようで、その決算方法は全く異なったものであった。VOC は、資金を 10 年間据え置き、出資者には一回の航海ごとには 10% ほどの配当金を与える。資金の使い方や配当は会社が自由に決定することができた。一方、EIC は一回の航海ごとに資金回収、出資者へは出資率のとおり元本と利益を戻す決算方法であった。東インド貿易の成功に莫大な資本金やこの決算方法の相違が利益に関係していることは顕著である。VOC は、イギリスの 12 倍以上の資本金 6,424,588 ギルダーと大き

な資金力を持っているし、VOC と EIC の第一回目の航海の利益率は 399%と 155%であり、元金から見てもこの差は膨大なものである。「すでに 1600 年にイギリス東インド会社が設立されていたが、オランダ東インド会社の資本金 650 万ギルデンは英東インド会社の 10 倍以上であり、規模の面で圧倒していたのみならず、会社としての性格（出資形態）も英東インド会社が『当座企業』としての性格を持っていたのに比べ、株式会社としての先行事例があった。（寺島 2012d: 22）」

このように、決算方法、資本金、出資者、取締役会と VOC の株式会社としての運営はしっかりとシステム化されており、EIC が競争しようとも追いつけないほどであった。さらに、VOC は、東南アジア海域で勢力を広げるとともに、西アジア方面にも商館を増やしていくことを怠らなかった。インド洋西海域ではアラビア半島のモカ、ペルシャ湾のバンダレ・アッバース（ガムローン）、また西北インド・グジャラート地方のスーラトまで VOC の拠点拡大は及んだ。

8-8. 結論

当時元々、貧しい国として認識されていたオランダは低湿地が多かったため、農業には適していなく海運業が盛んだった。イギリスの私掠船問題（船を襲いその船の積み荷を掠奪する国政府公認の船）があり、大西洋上でのポルトガル船襲撃が多く見え、また、北ヨーロッパでの胡椒販売をめぐる争いも勃発しており、貿易主要都市であったリスボンでの胡椒販売がカトリック系のイタリア人スペイン人に独占され、オランダはヨーロッパで居心地が悪くなっていったのである。スペインとオランダは 1568 年から 1648 年まで戦争状態が続いていた。これらの理由からオランダ国の高度な航海技術、そしてアムステルダムに集中した資本が東インド進出への必然的であった。

オランダ東インド会社が東インドでの活躍が見られたのは、禁教によるポルトガル衰退後、日中関係の仲介役としての役割に徹したからである。今までポルトガルの役割であった日中貿易に唐船、そしてオランダ東インド会社が取って代わり参入したのである。アジア進出後、東インド会社はバタビアをアジアにおける本拠地を持ちとその後台湾占領など拠点を多く持った。全盛期では長崎、東南アジア、インド、などと 50 か所以上に要塞や商館を展開しており、オランダ東インド会社のアジアの海で拡大していく貿易の力はすさまじいものであった。

1620 年代に台湾に商館が設置されオランダ人が日本の銀と中国の生糸を交換する中継貿易の体制を確立するようになり、平戸のオランダ商館は機能を発揮した。1630 年代に入ると、VOC の船は台湾以外に、バタビア、シャム、交趾、カンボジア、トンキンなどからも来航し、

各地の特産品も大量にもたらすようになった。オランダ人との貿易のメリットは彼らがキリスト宣教師との確実な関係になかったことである。徳川政権は貿易はしたいが、キリスト教の宣教に頭を抱えていたため、オランダ人との貿易拡大を大いに歓迎した。。東南アジア諸国の場合と違い、日本中国では武力を用いて現地政権を脅すという彼らの得意技が通用しなかった。少なくとも中国や日本ではオランダ東インド会社は表面的におとなしく善良な商人の顔で貿易に従事していた。また彼らは広州を訪れ、中国と公式の貿易を要求するが、朝貢制度に従えないため拒絶されたという事実もある（羽田 2007）。

当時のアジアの海では、VOC はペルシアの王家が高値で売ろうとする生糸をできるだけ避け、民間人から購入すること、EIC と同様に関税を支払わずに貿易を行うことの二つを目標とし交渉を続けていた。

しかし、これが上手く行かなくなると裏を返すように軍事力を行使した。マカオ征服もこれと同時期に起きた。このように利益が上がらなくなるとすぐに軍事力を行使する VOC であったが、逆に言えば、どのような扱いを受けようが、長崎で兵士を見ることさえなかった日本との貿易はとても重要視されていた。

さらには西暦の建造年が刻まれキリスト教と関係していることを理由に前年に建設したばかりの石造倉庫の取り壊しに商館長は従い、1641 年に商館を平戸から長崎へ移転させるようにとの命令に従った。オランダ人は長崎の出島に移住を命じられ、基本的にそこから外に出ることを禁じられるが、それにも従っている。

オランダ人が長崎で見せる態度は高圧的で傲慢な本来の彼らの姿とは大違いで信じられないほど低姿勢なのである。彼らは、同時期に東南アジアで激しい暴力によって香辛料の取引を独占しようとしていた。東南アジアで横暴であるオランダ東インド会社だけれども、日本と交易をする時には日本に従事することが利益を上げる一番の方法だったのである。

第九章 キリスト教とアジア

世界史における宗教改革とは、キリスト教の分裂である。ローマ教皇を中心としたカトリック（旧教）に対して、ルターやカルヴァンのプロテスタント（新教）が現れ、欧州各地に広まり、近代国家のイデオロギーの基礎になった歴史的出来事である。プロテスタントとは、神聖ローマ帝国に抗議する人を淵源としている。

ローマカトリック教会は、新たに分裂したプロテスタントの勢力が強まることを恐れ、プロテスタント教会の宗教改革に対するカトリック教による対抗宗教改革の産物として、結成されたのがイエズス会であった。イエズス会は、ポルトガルの国家権力、教団内外の経済力、布教国の文化研究を布教戦略とした。

ヨーロッパ中世に起源を持つ主要修道会（フランシスコ会、アウグスティノ会など）よりも若くて新しい修道会であった。イエズス会の勢力拡大の場は、宗教改革運動によって失ったカトリック勢力圏を奪回し、新たな布教地である海外の開拓と獲得を意図していた。イエズス会は、新教プロテスタントの波が世界に届くよりも先に、旧教カトリックの波を世界隅々まで届かせようとした。

古川（1997）によると、1538年ポルトガル王ジョアン三世が、宣教師の東インド派遣をイエズス会に求めた理由は、ポルトガルが獲得した植民地を神の支配に移したいと考えたためと述べている。神の支配とは、現地人の信仰する異教を改宗させて、植民地支配の拡大と安定を図ることであった。こうした中で、松岡（2015）も、カトリックのもつ世界普遍主義（ユニバーサリズム）というものは、世界に遍く宗教を広めたいという意味（カトリック＝宗教＝世界＝普遍）によるものであったと説明している。こうして、インドのゴア、マレーシアのマラッカなどを中心とする東洋植民地支配を深化させる手段として、キリスト教の伝道が利用された。

1540年、イエズス会（スペイン語で「イエスの軍隊」の意）は、ローマ教皇パウルス三世によって修道会として承認される。翌年、スペイン人のフランシスコ・ザビエルは、アジアでの布教を目指して出発し、1549年鹿児島に上陸した。日本へのキリスト教伝来としての歴史を刻んだ。

ザビエルが旺盛な行動力によって集めた情報について、古川（1997）は、ポルトガルの布教戦略や植民地政策に大いに資することとなったと述べている。布教事業と植民地市場の維持拡大というポルトガル政府の打算は一体不離の関係にあった。ザビエルの布教活動がポルトガル国王の庇護によって可能だったというように、宣教師たちは、ポルトガル艦隊に同乗しての渡航であり、現地での旅費・生活費すべてがポルトガル政府から支出されたといわれる。

他方、キリスト教プロテスタントは、宗教改革の波に乗り、巨大なプロテスタンティズムという多くの教派をつくる。ルター派（ルーテル教会）、改革派（カルヴァン派）、長老派、バプテスト派、クエーカー派、YMCA、エホバの証人、モルモン教、メソジスト運動の流れから分かれた救世軍などがあげられる。

プロテスタンティズムは、近代社会や近代思想、社会改革運動に深く根付いた。また、勤労、労働、生産という「資本主義」と結びついている。マックスウェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の発達』はこの点に注目している（松岡 2015）。

17 世紀オランダを黄金時代と呼ぶならば、それをもたらした精神的エネルギーの淵源は、宗教改革を通じたプロテスタンティズムに遡ることができる。

ジャン・カルヴァン（1509～64）は、「自己の職業を神より与えられた天職として禁欲的に勤労すべき」という教義を唱え、当時の欧州の新しい産業社会構造の中で台頭しつつあった事業者や技術職人、商人に強く訴えるものがあり、禁欲・勤勉に神が定めた職業生活に生きることの正当性を染み込ませた。またそれを通じて得た経済的利益を肯定し、勤労に基づく営利と蓄財を正しく営為としたこの教義は初期資本主義の精神的支えとなった。

	カトリック（旧教）	プロテスタント（新教）		英国教会
宗派	カトリック （イタリア）	ルター派 （ドイツ）	カルヴァン派 イス・フランス）	イギリス国教会 （イギリス）
教義	○聖書と伝承重視 ○教皇至上主義 ○教皇無謬説（誤りなし） ○善行による救済。	○聖書主義と信仰義認説 ○主張は内面的範囲に限定 ○秩序の破壊を否定	○聖書主義と予定説 ○禁欲と勤勉の結果として蓄財を肯定	○英国国王を頂点とする国家教会主義 ○教義はプロテスタント的だが、儀式はカトリック的
範囲	○スペイン・ポルトガル、フランス、神聖ローマ帝国（中欧・南欧付近）	○北ドイツ、北欧に伝播	○新興市民層の支持 ○全西欧に伝播。資本主義社会への基盤	○貴族・富裕層が支持 ○国王の離婚問題に端を発した政治宗教改革

経過	1521 ローマ教皇レオ10世、ルター破 1534 イグナティウス＝ロヨラ、イエズス会創設（パリ）	1517 ルター『95か条の論題』発表 1555 アウグスブルクの宗教和議（諸侯・都市に信仰選択の自由、ルター派のみ承認） 1618 三十年戦争（-48）	1536 カルヴァン『キリスト教綱要』 1541 カルヴァンの改革（ジュネブ）	1521 ヘンリ8世、ルター批判 1527 ヘンリ8世、王妃との離婚問題から教皇と対立 1534 国王至上法発布、イギリス国教会成立 1555 メアリ1世、カトリック復活 1559 エリザベス1世、統一法制定、国教会確立
教派	フランシスコ会、アウグスティノ会、イエズス会	ルーテル教会		

表7. キリスト教の宗教改革と対抗宗教改革

出典：『詳説世界史図録』（山川出版社）をもとに編集

9-1. キリスト教と日本との相性

日本におけるキリスト教伝来について考察すると、日本に初めにキリスト教が伝播したのは、8世紀（736年）に景教¹⁵（キリスト教の中国名）という名前で、ネストリウス派キリスト教が日本に伝わったが、やがて消滅した。しかし、その800年後の16世紀にザビエルの布教では短期間で九州・関西地方中心に広く浸透していった。

16世紀後半の日本でのキリスト教信者は30～40万人（一説には50万人）で当時の少なくとも人口の3%以上といわれる。1800年頃のロンドンの人口が85万人、パリが55万人という中で、1700年頃の江戸は100万都市という世界一の巨大都市であったといわれる。

¹⁵ 5世紀コンスタンチノーブル（現イスタンブール）司教ネストリウスによって唱えられたキリスト教一派。431年エフェソス公会議でイエスの人性を主張したため異端とされた。7世紀中国・唐に伝えられたが、唐末期に弾圧により消滅。

しかし、その後、徹底した幕府によるキリシタン弾圧により、天草・島原の乱（1637～38年）では2.7万人が殺戮された。それ以外に江戸時代を通じて処刑されたキリシタンは約5～6千人と推計される。この大量殺戮と集団的狂気を日本人としてどう受け止めるか同じ時期の西洋社会でも、異教徒への弾圧は常識であった。ドイツの宗教戦争を終わらせたウエストファリア条約で決められたことは、領主は旧教、新教どちらの宗派を信じてもよいが、領民はその君主の信仰を信じなければならないということであった。領内では一つの宗派しか許されなかった。日本との比較においては、日本では神道と仏教の共存は数百年の伝統があり、仏教内の宗派では、特殊な日蓮宗の不受不施派が弾圧された程度で、多数の宗派の共存が常識であった。フランスではルイ14世（在位1643-1715）が、アンリ4世（在位1589-1610）が王令を発した、新教徒に個人の信仰の自由を認める「ナントの勅令」（1598）を廃止（1685）して、新教徒の迫害を行った。欧州においても国家が国教を定めて、これに従わない者を迫害することは18世紀初めまでは普通のことであった。

寺島（2013c）は、概して、一神教は異教徒に対して不寛容であり、八百万の神を奉じる日本人は寛容という議論があることを前提の上で、お上（権力）の権威づけと民衆の無知が一体となって異端者の排除に向かうと異様な集団的狂気が爆発する傾向を日本の歴史は何回か繰り返している。教義には滞りなく対応する融通無碍だが、時代の空気にはわけもなく賛成する付和雷同するという意味で日本は恐ろしい国であるとも述べている。

また、現在の日本におけるキリスト教信者は113万人（人口比1%未満）という統計がある。この浸透度合いを示す数字の意味をどのように捉えることができるのか。

欧米の教会（総本山）に依存する教義と活動の枠組みから変容しきれないことと関係があるのではないかという説がある。しかしながら、他方で韓国のキリスト教徒が1000万人（人口5100万人、2015年統計）を越すことの対照において、時代間の日本精神史の土壌変化、近世にさしかかった日本の社会構造変化などが推察することができる。それと同時に、世界のあらゆる国・地域でも伝来と普及・浸透の過程で独自の変容と発展を分析することの必要性を感じる。

9-2. 中国・朝鮮とキリスト教の相性

中国は、1530年代にポルトガル人に対して中国南部のマカオに根拠地を築くことを容認した。しかし、その後もポルトガル人又は西洋人が中国本土に立ち入ることは拒み続けてきた。この閉鎖的な態度は1600年にイエズス会の宣教師マッテオ・リッチが北京に行き、万曆帝に謁見するまで続いた。

明の朝廷や高位の官僚がキリスト教に入信をしたり、宗教としてのキリスト教に興味を持

つということは、徐光啓の例外のほかは稀であった。

続く清朝でも事情は変わりなく、康熙帝はイエズス会士を宮廷で用いたが、キリスト教には関心を示さず、宣教師に求めたのは、科学および技術であった。

その後、中国祖先崇拜を異教儀式としてキリスト教信者が行うことを禁止するローマ教皇の決定により、雍正帝はキリスト教を禁教とした。中国では日本のような急速なキリスト教徒拡大の現象は見られない。当初、イエズス会が中国の祖先崇拜を宗教行事ではなく慣習と見做したのも、そうしなければ社会的影響力のある人々を入信させることが不可能であったからである。

近世において、日本、中国、朝鮮の三国がキリスト教に接した状況について、上垣外(1994)は、中国、朝鮮では科挙を中軸とする儒教的国家体制を安定的に又は固定的に運営している時期であったのに対して、日本は戦国の騒乱のまっただ中であり、あらゆる政治秩序と価値観の崩壊した、政治学でいうアノミーの状況にあった。ここに、キリスト教という全く新しい価値観が日本に突出して受け入れられる状況にあった。中国や朝鮮においては、知識人の大部分は科挙¹⁶に合格することを最高の荣誉と考え、そのために必須の朱子学を強制と意識せずに自発的に学んでいったと述べている。東アジア 3 カ国の比較において、人々の価値観や精神的安定性の状態によって、新しい価値観としてのキリスト教を受け入れる土壌に大きく左右していったとの指摘は示唆的である。

9-3. キリスト教と親鸞

6 世紀に日本への仏教伝播は、国家宗教としての伝来だった。一方で、16 世紀に日本へのキリスト教布教は、領主のみならず民衆のレベルまで受容され広まっていった。その理由とは一体何が要因であったのか。寺島(2013b)は、次のような深い考察を提供している。

一つ目は、16 世紀日本が近世への胎動期であったことである。群雄割拠の戦国時代から統一政権樹立を模索する中で、貨幣経済の形成と商業資本の形成期であったという社会背景であった。二つ目は、日本のキリスト教理解には、浄土教的救済観が媒介した¹⁷という点である。親鸞(1173~1262)の登場によって、日本仏教は国家鎮護の仏教から民衆の仏教へとパラダイム転換したと説明している。三つ目は、宣教師は領主に接近して指導者からの布教、弱者救済、医術・武器などの先進的現物の提供によって日本人の関心と敬意をひきつけたとしている。このような歴史的変化の理由は一つではなく、人間の本質に根差した精神性と経済性の要因が、具体的引き金を伴って現出することを深く考えさせられる。

¹⁶中国で古くから行われた官僚登用試験

¹⁷海老沢有道(1966)『日本キリシタン史』

第十章 日本人の思想と宗教観

総じて思想というものが理解されるには、社会的土壌が必要であり、社会的・制度的基盤なくして思想は花開かない。

イエズス会の今日的継承者に立つ上智大学教授のピーター・ミルワードは『ザビエルの見た日本』（1998）の中で、16世紀にザビエルが抱いた日本人観は、「今まで発見されたすべての国々の中で、日本人だけが自分の力でキリスト教を発展させるのに適している」と分析している。その上で、日本人は賢く、好奇心が強く、辛抱強い心性を持っていることを言及している。

他方において、ミルワードは450年前の日本人と今日の日本人との差異について、現在は羞恥心を失い軽佻浮薄で厚かましくなっているとも語る。ザビエルの時代においても現代においても、羞恥心まさしく日本人の特徴であったとし、日本人の国民性の一部をなすものであるとする。しかし、現代の若い世代には以前にはなかったような厚かましさが共存している。この厚かましさは、大昔から日本人の気質の中にあつた羞恥心と対照的に、第二次世界大戦の終わりからアメリカの影響のもとに現れたものであることは明らかであると述べている。本章では、江戸時代と現代の宗教観を浮彫りにし、比較しながら論説を展開する。

10-1. 儒教諸派の興隆

江戸時代を支配した思想として儒学があげられる。鎖国政策を幕府が強力に推進することになった時、家光の外交顧問の地位にあつたのが朱子学者・林羅山である。林羅山以来、林家が大学頭として幕府の正学¹⁸たる朱子学を統治の基軸とした。ただし、家康が仏僧天海を重用したように、江戸前期においては儒学だけが時代を支配したわけではなかった。

朱子学とは、中国・南宋の朱熹（1130～1200年）が起こした思想体系で、明・清を通じて中国王朝の正統哲学であつた。四書（大学、論語、孟子、中庸）を重んじ、日本においても幕府の統治思想となるとともに、江戸期の支配層たる武士の基本的教養となつた。李氏朝鮮を含め、近世東アジアにおいて、儒教が統治の知的共通基盤になつた事実がある。

上垣外憲一（1994）『「鎖国」の比較文明論』は、藤原惺窩（ふじわらせいか）が17世紀初頭に『船中策』で語つた、「人はすべて天の理を受けているから外国人も自分たちと同じであり、それゆえ異国の慣習、法律を尊重せねばならないという思想は、西洋において18世紀

¹⁸正学（せいがく）とは、松平定信時代の1790年「寛政異学の禁」（学問統制。幕府公認の儒学で朱子学を指す。これに対して異学とは、学問所での講義が禁止された儒学で陽明学と古学を指す。異学者は幕府の役人に採用しないこととした。

まで聞くことの出来なかったとする。この日本朱子学の開祖の言葉は、西洋の啓蒙主義哲学に少なくとも 100 年先駆けて、格調高い人道主義を述べている。同時期のカトリック教は、儒教のような戦争否定の思想を持たず、今日我々が知るような人間性の普遍性に対する信念を持たなかった。この時期においては、世界のどの宗教・イデオロギーよりも開明的、人道主義的な思想を語り得たと述べている。

また、江戸期日本において正対した二人の代表的儒学者として、寺島（2014a）は、新井白石と荻生徂徠をあげている。新井白石は朱子学者として「正徳の知」といわれる政治改革を断行した。儒教思想に基づく「理」を重視する政策の実行であった。他方、吉宗の享保の改革では政治顧問に任ぜられた荻生徂徠は、古学の思想を軸に、実学志向の儒学者であった。実証的な文献学、その研究を通して天下を安泰に導く経世論を説いた。そして、理を重視する朱子学を批判して、「朱子流の理学、又大きな害なり」（『太平策』）と言い切り、「修身・齐家・治国・平天下」という徳目拡大型の理想主義的儒学とは距離をとって、現実を直視する実学を目指した。私益よりも公益を優先させ、社会全体の安定を志向していたことは確かで、国家主義の祖型を見て取れると論じている。

	学派	儒学者	業績
正学	朱子学 南宋の朱熹が大成。 理を重視、君臣上下秩序重視、基本的に合理主義	藤原惺窩 1561-1619	近代朱子学の祖
		林羅山 1583-1657	家康に信任。幕府の思想的基盤築く
		木下順庵 1621-98	綱吉の侍講。新井白石、雨森芳洲ら人材輩出。
		新井白石 1657-1725	家宣に仕え、正徳の政治主導。理想主義的政策実施。
異学	陽明学 明の王陽明が創始。朱子学を批判し、認識と実践の合一（知行合の実践的道德を説く	中江藤樹 1608-48	日本の陽明学の祖。孝を万事万物の道理として重視。近江聖人と呼ばれる。
		古学 日本独自の儒学。朱子学や陽明学を後世の解釈と批判。孔子・孟子教え主張。古典研究重視	伊藤仁斎 1627-1705
		荻生徂徠 1666-1728	柳沢吉保に仕え、綱吉にも進講した。実学志向。実証的文献学の考究を通して天下の安泰に導く経世論を説く。

表 8. 近世儒学の特徴¹⁹

出典：山川出版『詳説日本史図録』をもとに編集

10-2. 日本人の真心と中国の漢意（からごころ）

本居宣長（1730～1801）は、『古事記』を実証的に研究して『古事記伝』を著述した。本居は、日本古来の思想を追求し、人間生活のもとになるのは自然の感情「真心」（まごころ）であり、「もののあはれ」とした。真心を失わなければ神の意志に適った生活ができると説き、中国の国風や文化に心酔する「漢意」（からごころ）を捨て、日本古来の精神に帰ることを主張した。

寺島（2014b）は、『本居宣長とやまごころ』の中で、日本古来の思想としての「もの

¹⁹1790年寛政異学の禁で正学（幕府公認）と異学（学問所での講義禁止）に統制。

のあわれ」を知る心とは、儒学によって権威づけられた軌範を超えようとする美意識であったとすれば、その先に儒教の規範を超えた普遍の価値が必要になると論じている。

鎖国後百年以上時が経ち、18世紀に入ると、古い時代を探求しようという気風が生まれ、日本古来の道を説く国学へと発展する。国学の探求の中から見えてきたものは、日本の民族的自覚と自信の顕れが生まれ、日本を意識する、日本を肯定する知性の登場であったとする。その後、1787年に松平定信による寛政の改革が始まる中で、ロシア使節ラクスマンが根室に来航（1792年）する。ロシア帝国女帝エカチェリーナ2世の命による通商要求であった。幕府は通商を拒絶しながらも、欧米列強の接近と外圧が顕在化していく。鎖国の動揺は、武家政治の揺らぎと幕府を支える儒学的価値の限界という形で現れている。

こうして国学の理念は、日本とは何かについて提起し、日本人が意識を深く古代に繋げることで、日本人の美意識・精神の所在を確認する営為に迫っていったものと思われる。

10-3. 経済と宗教～胡椒と救霊～

イエズス会が対外的活動を行う定収入源は、ポルトガル国王からの年度給付金、税収益の一部、ローマ教皇からの年金給付、篤信家からの喜捨、インド国内の土地を主とする不動産収入であったが、いずれも不定期で少額の収入であったといわれる。

イエズス会は、そのため、前記述してきたとおり、インドや東アジア遠方地域への航海実績のあるポルトガル国王から多くの経済的庇護を受けることとなった。ポルトガル国王においても、自らの海外植民経営に霊魂と救済の安寧という宗教色を加味し、その正当性の論拠を演出する意味においても好都合であったため、両者の利益は合致し、この事業は進むこととなった。

布教地においては、布教戦略に伴う医療・先端技術などの布教活動経費、宣教師などの生活費や交通費等の莫大は費用を捻出する必要があったことから、宣教師たちは布教を行う一方で、広範な貿易活動などを行って教団の活動を維持していたという現実があった。

また、宣教師たちは、日本人の武器に対する嗜好に着目し、鉄砲などの軍需物資を外交儀礼品として提供し、それと引き換えに、領内で布教を認めさせようとの戦略に思い至った。こうした組織的な活動戦略が、日本での信者数を飛躍的に伸ばした一因にあげることができると考えられる。

こうした動きは、布教に伴うイエズス会の勢力伸長の一方で、教団そのものを世俗化させることに繋がった。莫大な経費の捻出などの物理的制約から世俗化はやむを得ぬ必要悪との見方もある。しかし、このような教団の過度の世俗化が批判を浴び、1773年に教皇クレメンス14世からイエズス会の解散を命じられることとなった。古川（1997）は、日本布教

におけるイエズス会の影について、「胡椒と救霊」の合言葉による露骨な打算を掲げた東洋布教のあり方が日本に持ち込まれたことであると述べている。胡椒と救霊とは、キリスト教の布教と胡椒に象徴される富の導入であり、ポルトガル国の植民地政策と直結するイエズス会の布教方針である。

イエズス会の布教活動には、彼らが絶対的な価値を信じて疑わないキリスト教を異教地に宣布し、霊魂を救済する宗教的動機とともに、経済という即物的な存在に規定され、制約されたことも否定できない。ザビエルが日本を離れた後も、思うように進まない布教と貿易を推進するため、宣教師の中から武力による日本制圧という不穏な声が出始めるのである。

イエズス会は「目的は手段を正当化する」という論理に立脚し、清貧の理念や会の規定に抵触する形で布教活動の物質的基盤の追求に従事せざるをえなくなっていた。

後に、イエズス会は、日本布教にもたらされていたポルトガル植民地政策への協力について、歴史的事実として認め、宣教師の中にも行き過ぎた行動があった事実を否定しなかったといわれる。こうした当時の布教につきまとった裏側の実態も正視しなければならない。

10-4. 文化と宗教

非ヨーロッパの世界では、ヨーロッパの布教方法を適用するだけでは通用しない部分が多いため、異なる方法が案出された。その一つが、適応主義政策に見られる布教地文化の研究である。異なる思想の文化圏に、イエズス会が育まれた文化を導入しても、双方の間で文化的差異が生じる。宣教師たちは、布教地の人々の思想の中に入りながら、普遍の真理として信じる神の言葉を伝道する方策を実行した。

イエズス会による方策とは、外面的な事柄では出来るだけ日本の文物に順応して摩擦をさける布教政策である。例えば、日本の僧侶は肉魚を食さないことから、宣教師も滞日中は肉食しないこととしたという。

こうした日本への適応主義に適った形で在日宣教師たちに日本の文化や習慣を学ばせることによって、逆にそれらを日本におけるイエズス会の強力な布教の武器にする狙いがあった。

日本人は、概して外面的な事柄や礼拝の儀式、立派に整えられた儀式に非常に心を揺り動かされる傾向があり、逆にこの点に過失があると、教化されずに憤慨する傾向がある。教師が日本人から評価を受ける戦略として、日本人は「形式美」を極めて尊重する国民性であることを指摘し、日本人の形式「美学」を満足させる戦略をたてることを主眼としていた。

江戸文化の本質について、田中（2009）は、循環（めぐること）と因果（原因と結果）の思想・価値観にあるとする。近代日本人は、これらを失ったことによって、勝ち負けで万事物事を考えることに力を注ぎ、欧米依存的となったと説いている。「働く」ということは、賃

金という観念でしか判断できなくなり、物の価値を値段でしか理解できなくなった。

その結果、自らが行った行為が、必ず自らに戻ってくるという感覚を失ったとき、目の前の富のためなら、文化も自然も破壊することを厭わなくなるという思考になるという。江戸時代や江戸文化は、現代社会に提起する課題を重層的に持っていると思われる。

10-5. 軍事と宗教

1549年ザビエルの日本布教開始以降、着実にその地歩を確立し、1570年までには約3万人の改宗者を獲得した。九州から畿内地方までの西日本各地に、約40の教会を設立するに至った。そして、1579年までには、約10万人のキリスト教信者が誕生していたといわれる。古川（1997）は、先行研究の多くは、日本イエズス会の活動をポルトガルの海外征服事業の一環という点にのみに、一元化させる傾向にあると思われるが、布教と軍事の問題をイエズス会がどのような経緯や事情において軍事活動に至ったのかという問題意識を考察することが肝要であると述べている。織田信長は、イエズス会宣教師を優遇し、布教を許して南蛮文化を積極的に受容した。それは反抗的な態度を貫く本願寺派をはじめとする仏教徒への対抗策でもあったが、少なくともキリスト教又はスペイン・ポルトガルの南蛮国が治世に役立つという認識によるものである。

続く豊臣秀吉の時代においては、「宣教師追放令」（1587年）が發布されるまでの間においては、大友、有馬、大村の戦国領主らが改宗してキリスト教徒の領主となり、キリスト教布教拡大に不可欠な保護者となっていた。

こうした中で秀吉のキリシタン禁制の背景について、古川（1997）は、植民地主義に相乗りしたキリスト教の布教に対する危機感から来たものであったと説明する。1580年キリシタン大名の大村純忠が、長崎をイエズス会の教会領として寄進したことや、イエズス会が大砲を積んだ船を保有する事実などが、キリシタンへの不信を深めたといわれている。

秀吉の視界には、長崎はイエズス会領、つまりポルトガル領となったことへの危機感があった。イエズス会は、長崎の防御のためとはいえ、周囲に垣をめぐらして、ある種の要塞化とした。ゴアやマラッカのように、異教徒の攻撃に備えて教会と城郭を一体化するのが普通であった。イエズス会領長崎の存在は、秀吉の天下統一の障害として認識されるのは当然であり、やがて秀吉はキリシタン追放とともに、長崎を没収した。

秀吉は、はじめのうちは、信長のキリスト教布教の姿勢を踏襲していたが、キリシタンを追放する一方で、南蛮文化そのものの吸収の道を残そうとしたのは、キリシタンと南蛮貿易が一体不離だという本質を理解していなかったことを示していると古川（1997）は述べている。

高橋（2006）によると、1560年代から70年代にかけてのイエズス会は、長崎来航船の火器

や硝石の仲介・調達程度にすぎなかったが、長崎の軍事要塞化を起点に、ポルトガル国の軍事力との連携を強化して、日本での軍事活動に編入することになったと説明している。

事実、秀吉による宣教師追放令を受けて日本イエズス会は、フィリピンのスペイン関係者に、日本へのスペイン兵派遣を要請することを決議した。在日宣教師たちによる軍事活動の位置づけについて、日本教界の救済と存続を基本的かつ不可欠の前提条件としつつも、日本対ポルトガルという、国家間戦争へと大きく変貌させるに事態に踏み込んだ意思決定を行っていたことを示唆している。

こうした日本占領計画について、古川（1997）によると、イエズス会は、これまで植民地化してきたアジア各地と違う、高度な文化を持つ日本への進出が容易ではないことに対する絶望感が生み出した非常手段だったと説明する。1599年2月5日付で長崎からペドロ・デ・ラ・クルスがイエズス会総会長宛ての書簡には、日本においては平和的手段による布教では限界があり、キリスト教国にまで成熟させることは不可能である。そのためには、どうしても武力に訴える必要があり、それは正当である。スペインとポルトガルが、日本で別々に適当な港を手に入れて武力で確保し、布教・貿易・征服のための基地とすべきである旨を書き記して支援を要請したという。

カトリック教会は、外部から不当な暴力を受け、その存続が危機にさらされた場合、教会は武力をもって自らを防御することが許されていた。自衛のための武力行使を認める戦争理論である。イエズス会の対日武力行使問題は、中世ヨーロッパ時代からカトリック教会に受け継がれてきた正当戦争理論という大きな思潮の流れの上に立ったものである。

イエズス会が、日本に本格的な軍事力の導入と行使を検討し始めたころ、すでにポルトガルは国力を失っていた。スペイン国王フェリッペ二世に併合される事態に陥っていた。そのため、日本イエズス会による軍事計画の実現性は、皆無に等しかったと高橋（2006）は述べている。

こうした事態を知る機会のなかった日本イエズス会では、少なからずの宣教師が武力行使を主張したが、そうした教団の世俗化に塗れたファビアン不干斎やトマス荒木などの会員は教団を去り、徳川幕府に教団の内実を報告するに及んで、イエズス会は実際の軍事力を行使できないまま日本を追われることになったといわれている。

10-6. 共生とアジア的思考

世界情報を掴みながら独自に生き抜いてきた江戸時代が、終わらなければならなかった理由は何か。明治維新の論議には、西欧近代の民主主義こそが正義であり、自由経済システム

こそが正しいという欧米崇拜の考えが現れている。

田中（2009）によると、明治維新の一因は、アメリカ軍事力による脅迫ともいえる圧力にあった。明治政府は、力に屈服しないために力をつけようとする暴力の連鎖であり、戦国時代への逆戻りであったと説明する。さらに、幕府はこうなる前に、幾度も制度のありようを見直す機会があったが、それをしてこなかった結果、時代は逆戻りしてしまったと述べている。

こうした明治政府の対応は、これまで江戸期の国民的合意として中華文明を源泉としていたものの、日本独自の文化の発芽の状態から、非常に短期間で、西洋の一神教を主体とする西洋文明の価値観を源泉とする思考様式に切りかえようとした。これは相当無理を伴う認識転換であった。

一神教の社会と多神多仏の社会では、その世界観の編集方法が大きく異なる。欧米社会の根幹にある性格としては、一神教の価値観があげられる。唯一絶対神を信仰する一神教は、善と悪、光と闇、精神と物質、聖と俗、正常と異常というように、多くの価値をプラスとマイナスに分けて二分するという、二者択一という思考法である。

ユダヤ・キリスト教など一神教の多くが乾燥地帯や砂漠的な風土に生まれた背景がある。このような中での死への根源的不安や自然の猛威への恐怖に直面する苛酷な風土では、判断を保留にして考え得ることはできない。松岡（2015）は、こうした環境下では、リーダーは一人であるべきで、神の如き絶対的リーダーの判断に従っていく道を決める考えが求められると指摘する。

他方において、森林型の多神多仏の信仰に発する社会では、当面の事態をじっくり観る、しばらく時期を待つ、多くの意見を聞くといった、保留やお預けの考え方が必要となる。つぎはぎ的であり曼荼羅（マンダラ）的であり、リーダーが専門別に何人もいる世界であると指摘する。

明治以降の日本人は、何を目指して頑張ってきたのか。お金を稼ぐことに躍起になって日本の高度成長を支えてきた日本人は、現在では過労死と老後の不安とワーキングプアに苦しむという一面がある。

幕末から明治の日本を記録した外国人の眼には、当時の日本人は、にこやかに満ち足り、笑い上戸で冗談が大好きで好奇心溢れる日本人の姿を見た。田中（2009）は、日本の高度成長の中で、日本人は、何らかの喪失を体験したのではないだろうか。それは、あの、少々のことでは動じない人々の安定感と笑いとは知恵、他人の生活と自分の生活とが截然とは途切れていない不思議な空間、動植物と人間とが入れ込み合ったような生き方ではなかったろうかと主張し、現代の心の貧困を何よりも危惧する。

日本文化は、中野孝次(1992)『清貧の思想』によると、清貧にもとづく文化であるといわ

れる。日本の伝統は、何世紀もの間、清貧を身上として栄えたとの指摘である。しかし、ピーター・ミルワード（1998）によると、国民というよりむしろ政治家や商人が世界の富裕な国々の仲間になると、彼らは清貧という豊かな伝統から転じて、フランス人が「ヌーボーリッシュ」（成金）という言葉で蔑む育ちの悪さを露呈していることと指摘する。今の日本人は美のセンスを失い、西欧の現代の事物をやみくもに礼讃すると述べている。

寺島(2014a)は、戦後時代を生きた日本人は、「和漢洋の教養」といっても、戦後教育の影を投影して大概は漢籍の素養に欠け、半知半解の洋と薄っぺらな和の学識によって知性を装っているにすぎないと述べ、現在の日本人の心のあり方に猛省をうながしている。

こうした最近の日本人の心のあり方について、田中（2009）は、次のように述べている。自然界の法則に則った「因果関係と縁」の思想により、物は循環していたのである。植民地主義や覇権主義は、勝ち負けを想定し、勝つことでできる限りの面積を自分だけのものにしようとする発想である。分配には限りがあるので、その範囲を囲い込もうとするのが国家であることから、国家が保守的で暴力的であるのは当たり前である。国家は家族の保守性、個人の保守性の延長にあるとする。

こうした近代国家を形成するためには、江戸時代の因果・循環といった重要な思想を忘れ去る必要があった。勝って分け前を確保することに価値を置く典型的な近代人である。このような勝ち負け文化の席卷する時代に、因果と循環の江戸文化は、それどころでないと忘れ去られた。物事を勝ち負けで分ければ理解しやすいという価値観が蔓延している。勝ち負けとお金がセットになり、勝って金持ちになることが人生の成功であり幸せという図式が、現在の日本の姿と重なって見える。

今日の世界における因果と循環との関わり方として、例えば、働き方がある。競争社会では他者より成績が上回ることが勝ちとなる。しかし、他者の衰微や崩壊は、いずれ自分に降りかかってくるという考え方が因果と循環の考え方であるといわれる。

非正規雇用が 3 割を越える現代社会の問題は、ワーキングプアの発生だけではない。生活費を得るといふ以上の価値を見出せない労働、自己の消費しか感じられない働き方に、現代人の虚無感を観ると田中（2009）は述べている。

明治維新以来、因果と循環と引き換えに、取り入れた勝ち負けを争う自由競争と暴力では、世界のバランスを保つことができない。勝ち負けを基準にすると、今行っていることがどのように自己に振り返ってくるのか見えなくなる。地に足のついた知恵や知性が必要との論考は非常に示唆的である。

	日本	欧米
理念	共生	民主
宗教	多神教	一神教
世界観	共同、プロジェクトリーダー	善悪、二者択一、リーダーシップ
働き方	因果と循環、共同利用	自由競争、勝ち負け

表 8. 日本と欧米の価値観比較

出典：越田辰宏作成

有馬と李（2011）によると、西洋文明が「民主」という理念をもっているとすれば、アジア文明は「共生」という理念・社会的価値観を持っていると述べている。西洋では、自由に行動ができ、経済活動も自由にできる。社会がダイナミックに発展して豊かになる。

一方で、アジアは共同利用するシステムを作っていて、共に村で生き抜いていくという共生社会を有している。自然と人間が共生すると同時に、人間が村を超え、民族を超えて共生するという理念がある。共通のアジアの語り方を形成するためには、相手への歴史認識への理解と寛容が求められる。歴史認識の急速な変更を求めることは現実的でない。今必要なのは、日本人の東アジアではなく、東アジアで生きる人々の東アジアなのである。

誰のための東アジア史が必要なのか。アジアの人々が各人語るアジアとは、同じものなのか。それは、いつ、だれが、だれに向かって語るかによって意味合いと内容は異なってくる。たとえ概念が同じであっても、文脈によって概念の意味が違うように解釈されることがある。

これまでの日本人の世界史は、欧州人の構想した世界史ではなかったか。これまで世界史と呼ばれている歴史体系は、欧米人の世界史であって、東アジアに生きる日本人のための世界史ではなかった。西洋史中心ではない世界史観が必要とされている。グローバル・ヒストリーの歴史認識の必要性である。

おわりに

「現代は 17 世紀の逆立ちの世界史」の意味を再考してみたい。大航海時代に欧州諸国によって席卷された世界は、胡椒と救霊（経済性と精神性）であった。そして、現在の混沌とした世相を改めて凝視すると、世界の多くの問題の本質は、時代を超えて、カネ（マネーゲーム）と宗教にあるように思われる。

グローバル化の中で日本を考えることは、何よりも、アジアの中で、アジア諸国の視点から日本の歴史を考えることにある。

日本の鎖国的発想とは、江戸時代ではなく豊臣秀吉に代表される戦国時代にあったといわれる。それは欧州の植民地拡大の発想と同じ価値観に当たる。植民地主義の発想は、中国が東アジアで行ってきた冊封システムとは内容を異にする。鎖国的発想とは、他を顧みることなく、自国の利益を押し広げることのみに徹した、秀吉の無知・無理解による狭量な思考と行動にあった。

こうした文脈の中で、江戸時代は、辛うじて平和を維持した時代であった。この時、徳川幕府は、東アジアの中国、朝鮮、ベトナムと対等になろうとした。それは軍事力に依拠するのではなく、文化の高さと技術力において対等になろうとした。江戸時代の平和主義、官僚機構の整備、インフラ整備、治安の良さ、教育水準の高さは、そのような幕府の施策・行動の現れでもある。江戸時代は、自己と他者を同時に考えられる文化、緑と社会を育てる文化、食欲と浪費より配慮と節度を重んじる価値に重心を置いていた。

庶民から信じられていた幕府の威光とは、圧倒的な幕府の軍事力にあった。しかし、幕府は、西洋に攻撃されたら反撃や追撃は到底できないという認識を持っていた。それ故に、幕府は戦わなくても済むように、「風説書」や「四つ口」から事前の情報活動に傾注し、インテリジェンス能力を高めていた。江戸時代の日本は、強い国力づくりではなく、安全・危機管理能力を高める防災・予防力に力を注いでいたと想像される。

現代のグローバル社会は、物質文明の席卷と拝金主義がまかり通る社会である。反対に言えば、具体的な「モノ」という形では現れにくい宗教や倫理などに対する相対的な無関心が加速化している世界ともいえる。日本もこうした退廃著しい中で混迷・先行きの見えない不安度を財官民共に深めている。

こうした閉塞感を打破するためには、今日に至った戦後日本の構造を再認識する必要性を強く感じる。黄金時代といわれた「17 世紀オランダ」を中核において世界史を論考することは、世界的インパクトを解明し、日本近現代に投げかけたものを世界史との相関の中からアジア史、そして日本史の考察を深めることができる。

江戸時代は、鎖国政策下で、西洋文明や中国文明から直接的な影響を回避する過程の中で、

日本とは何かをじっくりと考える時間をもつことができた時代であった。「自立」とは、沢山の人の生き方を観るなかで、自分なりの生き方を能力と変化に沿って探り、自分で考えながら組み立てていくことといわれる。こうした文脈の中で、中国に精神的にも物質的にも依存しないとす意思の中から、日本は自立という思考を熟成してきた。

史学者トインビー(1957)は『歴史の教訓』で、英国人が歴史の中で身に付けた基本的態度を「節度を重んじる穏健な態度」A Considerable Sense of Moderation と表現している。また、キッシンジャー(2014)は、ワシントンポスト紙寄稿 How The Ukraine Crisis Ends で「フィンランド方式」を示唆し、独立を維持しつつロシアとの敵対を避け、かつ西側との協力関係維持を目指すべきと論じ、曖昧な状況を抑制的に受け入れる大人の知恵の重要性を説いている。

歴史認識から学ぶべきことは、近隣との協調と相互信頼を基盤とした自立自尊の構想あり、柔軟で賢明な進路選択である。アメリカは、日中両国への外交として、東アジアにおける米国の影響力を最大化する「あいまい作戦」をとっている。日本人は近代の本質的意味を理解していないまま、今日まで生きている。近代合理主義の源流を自らの思考の血肉として確認する必要がある。

人間は環境の子である。時代環境に規定されながら生きていくものの、生きた情報は、受け手の受け入れ能力比例してしか伝わらない。決定的事態に直面するまで自己変革は難しい。多くの問題は自らの心の鎖、自己規制した固定観念でしか世界を見ないという壁にある。これは今日的課題でもあり、戦後の枠組みの中で、米国を通じてしか世界を見ない現代日本の時代認識に共通するものがある。

ユダヤ・アメリカによるグローバリゼーション戦略の中で、アジア人が共通の土俵でアジアを語ることの難しさがある。日本は、中国や韓国と共に共通の文脈の中でアジアを語るために、何をすべきか。中国には本当にアジアが存在するのか。中国は本当にアジアとの対話を望んでいるのか。中国にはそもそもアジアという概念をもっていなかったのではないか。中国は、中国の文明、国家づくりを中心に考えているのであって、水平的思考をもってアジアと対話をする意思はないのではないか。

東アジア史は問題解決にどのような貢献ができるかを考える上で、日中韓が同じような共通の歴史を歩んできたという共通性を探し出して、調和的な一体性を描いたものでだけで終わってはならない。歴史は現在に立脚して、現在に対する分析とその問題解決を求め、問題の矛盾を生じた由来を遡及していく発想で描かれなければならない。こうした視界を追及する歴史認識を高める姿勢が求められる。

歴史を突き動かすエネルギー源は、周辺と境界にプールされるといわれる。琉球国と対馬藩は日中と日韓の狭間に立たされていたからこそ、強く逞しく、したたかに生きることができた。この生きる知恵は、中心（大国）における周縁（辺境）に属するがゆえのポジティブな特質である。多くの試練とともに多くのビジネスチャンスを活かみに利用し、大国（強者）間の調整役・リエゾンとして頼りにされてきた彼らの生き方こそが、現代のビジネスパーソンが求められているサバイバビリティ性をもった、今、最も求められている姿なのかもしれない。

日中と日韓の相互不信という東アジアの問題を解決する糸口を見つめるうには、ヨーロッパ人のための世界史ではない「グローバル・ヒストリー」という、アジア人のための世界史があり得るという視点から東アジア史を考える必要がある。。現在において抱え込んでしまった問題がいかんにして生じたのか、そのような矛盾が根拠としてきた共通の根源的な思想の問題点を探し出すことを可能とする東アジア史のあり方への探求である。歴史の父・ヘロドトスは「すべての歴史は思想の歴史である」と語った。我々は時間をかけてその歴史の思想を理解することへの一歩を踏み出すことが必要なのである。

歴史観 → グローバル・ヒストリーの歴史認識の視界（西洋中心でないアジア人の世界史観へ）

	中世・近世	近世(江戸期)	近代(明治～昭和戦前)	現代(戦後)
日本史	<ul style="list-style-type: none"> ● 拡大社会 ● 競争、勝敗 ● 銀経済 ● 世界の3割 ● 国家統一 	<ul style="list-style-type: none"> ● 縮小(縮み)社会 ● 産業育成(内需拡大) ● 鎖国政策:自立と自覚の過程 ● 四つの窓口:通信と通商 ● 漢意から大和心 ● 銀の枯渇(国際競争敗退) ● 自国生産へ転換→「自立」へ ● 農業・手工業発達、交通整備 	<ul style="list-style-type: none"> ● 拡大社会 ● 西洋文明の価値観 →一神教思考:価値の二択(善悪、精神と物、勝敗) ● 帝国主義と国家主義 ● アジア蔑視(日清戦争) ● 劣等感から優越感 	<ul style="list-style-type: none"> ● 米国崇拜 ● 科学根拠 ● 数量評価 ● 歴史認識 ● 日中、日韓の構造変化
世界史	<ul style="list-style-type: none"> ● 価値観:共生、多神教、中庸、アロノクアリ、ター、循環、経済(万民救済) 	<ul style="list-style-type: none"> ● 中国冊封(宗属、華夷秩序)→周辺:朝鮮、琉球、南越等 ● 欧州に蔑視意識→中国文化の威信(孔子哲学、装飾) ● 平和産業の比較優位(絹、陶磁器、茶) 	<ul style="list-style-type: none"> ● 17C:オランダの時代 ● 近代合理主義、自由裁量 ● 米国DNA(連邦、寛容性) ● アロクスタデイズム(資本主義の精神的支柱) ● 18C:第2次アロクスタデイズム(産業革命、市民革命) 	<ul style="list-style-type: none"> ● 帝国主義・植民地化 ● 近代化と西洋のアジア進出
世界史(欧米史観)	<ul style="list-style-type: none"> ● 価値観:民主、一神教、善悪 ● 二択、勝ち負け、アロクスタデイズム、自由競争、経済(利潤追求) 	<ul style="list-style-type: none"> ● 16世紀 ● 大航海時代 ● 第1次グローバル化(布教と植民地拡大) 	<ul style="list-style-type: none"> ● 17C:オランダの時代 ● 近代合理主義、自由裁量 ● 米国DNA(連邦、寛容性) ● アロクスタデイズム(資本主義の精神的支柱) ● 18C:第2次アロクスタデイズム(産業革命、市民革命) 	<ul style="list-style-type: none"> ● 帝国主義・植民地化 ● 近代化と西洋のアジア進出
			<ul style="list-style-type: none"> ● 中国の夢 ● 中華民族復興 	<ul style="list-style-type: none"> ● 東アジアで生きる日本人のための世界史 ● 東洋的な見方(足元からの国際交流)

出典：越田辰宏

表9：グローバル・ヒストリーの歴史認識の視界（西洋中心ではないアジア人の世界史観へ）

出所：越田辰宏作成

補足資料

1. 年間スケジュール

2016年インターゼミ・アジアダイナミズム班 年間スケジュール(12/17現在)

【メンバー】9名 ①学部3名(山口、西條、和泉)②院生等4名(城崎、越田、塚原、王)

③教員2名(金、大場)

【担当】リーダー(城崎・山口)、副リーダー(西條)、議事録:全員、スケジュール管理(城崎、山口)

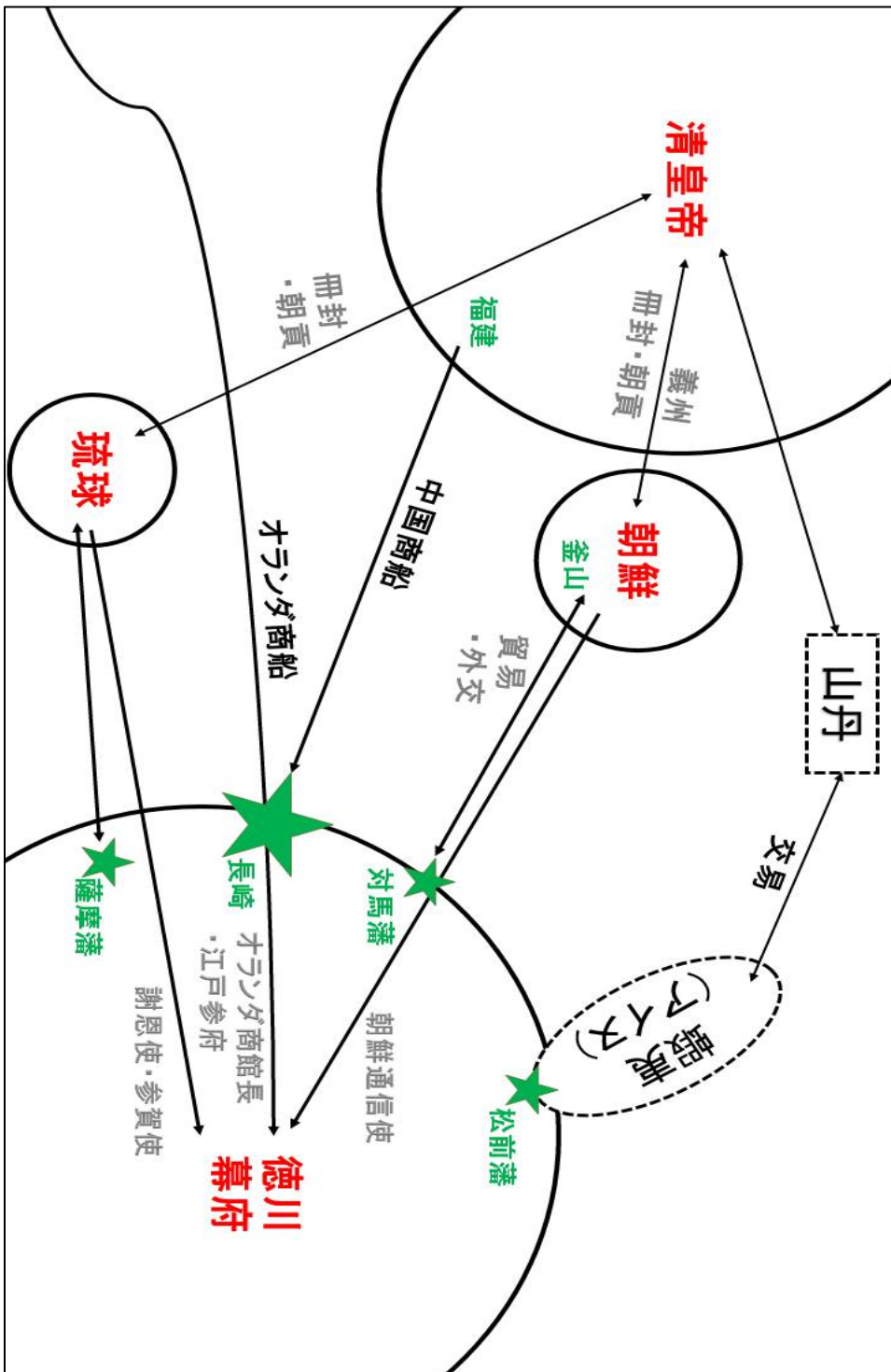
	月	日	議 題	文献調査	フィールドワーク (FW)	備 考	議事 録
1		9	概要説明、自己紹介				×
2	4月	16	自己紹介、テーマ決め	17世紀オランダからの視 界(以下「論考」)論読			塚原
3		23	感想発表(①歴史、②キリスト教、 ③論考3~5)	17世紀、長崎に関する文 献調査		グループ決定	和泉
4		30	感想発表(論考)		FW 日程調整、担当確 定	年間スケジュール、懇親会 計画	城崎
5		14	感想発表、中間発表案(タイトル、 概要・目的、目次)、発表者	『長崎県の歴史』の感想	人数確認、日程決定、 訪問先検討	キーワード、目次作成を念 頭に読む、年表作成 越田欠席(5月中)	
6	5月	21	中間発表案の確定	『長崎県の歴史』の感想		発表原稿作成 PPT	和泉
7		28	発表資料の作成		日程表	発表原稿作成 PPT 金教授、和泉研修のため欠 席	
8		4	中間発表リハーサル スライド(PPT)原稿作成				西條
9	6月	11	◎研究計画中間発表① 発表7分、PPT			6/17 SGSで研究計画予行 練習	×
10		18	◎研究計画中間発表②(学長出 席)	●発表内容:研究テーマ、目的、問題意識目次、文献、フィールドワーク 発表者:城崎、西條、和泉 ●指摘:			王
11		25	中間発表反省 中間発表へ向けた計画		訪問先調査	アジア班懇親会実施	城崎
12		2	FW予定変更 箱根合宿発表、目次立て	点検、発表に向けた討議	9/1-3に変更		山口
13	7月	9	問題意識担当割り振り	問題意識レポート、PPT作 成(宿題)	各自担当FW訪問先 の調査		和泉
		16	(授業なし)				
14		23	各担当執筆部分の完成版発表、夏 合宿発表資料確認	発表PPT(発表者、資料) 最終論文⇒宿題(担当執 筆)	FW 役割分担決め	8/1 SGSにて中間発表予行 練習 8/3 箱根湯本駅に10時半 集合の後喫茶店ルノアール	

						にて発表練習	
			夏休み	夏休み:学部:8/3-9/17、大学院:8/17-9/20			
	8月	3-4	8/3(水)-4(木) 夏合宿(箱根)中間発表 合宿先:箱根水明荘(箱根町湯本702)TEL0460-85-5381(代) http://www.suimeisou.com/access/index.htm	●発表内容:1研究概要、2長崎の地政学、3問題意識、4参考文献・FW 発表者:城崎、山口、西條、和泉 ●指摘: ●合宿日程: (1日目) 12:30 会場集合、13:00 集合(B1F)合宿日程説明、13:05 中間発表(15分)+質疑応答(20分)、15:40-16:40 教員発表、16:40~全体講評(久恒先生)、夜 懇親会 (2日目) 9:00 寺島学長講話、10:40 グループ学習、12:00 過ぎ解散 (連絡:学長室 高野)			和泉
		1-3	長崎現地調査		9/1-3 長崎現地調査	8/23 SGSにてFW最終確認	城崎
15	9月	24	長崎FW報告 後期の日程確認	各執筆原稿の発表(状況報告)	長崎FW報告(講義内)		山口
16		1	分担、各自発表	各執筆原稿の進捗度発表	次週10/1FW 逸見FWのセッティング:西條		和泉
17	10月	8	横須賀(逸見町)現地調査		横須賀(逸見町)現地調査	14:45 京急・逸見駅集合	
18		15	過去執筆データについて 作成に当たっての注意	逸見FW報告書提出(和泉)、各執筆原稿提出	逸見FW報告(講義内) 学長のコメント:三浦按針の宗教観の認識の再確認		山口
19		22	分担、各自発表	逸見FW報告書提出(和泉)、各執筆原稿提出			西條
		23	FWシンポジウム「アジアをつなぐ長崎ロード」		「アジアをつなぐ長崎ロード」シンポジウム参加	12:30 江戸東京博物館集合	×
20		29	執筆文章推敲				和泉
21		5	執筆文章推敲スライド(PPT)作成		「アジアをつなぐ長崎ロード」シンポジウム参加報告(講義内)		西條
	11月	12	学園祭(講義なし)			11/12-13 多摩大学学祭	×
22		19	PPT完成、論文推敲作業				山口
23		26	PPT推敲、AL祭・最終発表予行練習			12/1 アクティブ・ラーニング祭(AL祭)配布資料提出締切日	西條
24		3	AL祭・最終発表予行練習、論文推敲作業			12/8 AL祭発表資料提出締切日	和泉

25	12月	10	発表・アクティブラーニング(AL)祭 論文推敲、各種担当決め、スケジュール調整	●発表内容:これまでの研究を踏まえた今年の研究、長崎の地政学、四つの口、研究成果(学部生担当部分のみ)、FW報告 発表者:山口、西條、和泉 ●指摘:研究に対する現代的意義、研究目的は何か。VOCの意味			山口
26		17	最終発表 論文目次調整、論文推敲、スケジュール調整、役割分担	●発表内容:過去2年の研究を踏まえた今年の研究意義、 発表者:越田、山口、西條 ●指摘:来年は宗教改革から500年の節目の年、年表ではない歴史観、立体的世界観の認識、大航海時代と宗教改革について、アメリカ建国史(ピルグリム・ファーザーズ)、東海岸独立、そして何よりオスマン帝国の脅威、イスラムの壁が挙げられる。そのイスラムもペルシャに脅威を感じていた。			山口
		24	論文提出日(完成版)	論文提出担当:山口 ⇒教員は冬休み中に論文確認		12/24 年内最終授業 12/27-1/5 冬休み	
27		7	論文最終調整、目次調整	教員からのフィードバック 最終修正部分確認			西條
	1月	14	センター試験(講義なし)	論文最終確認作業			×
28		21	最終論文提出日(完成版) 最終講義+懇親会	提出者:山口、提出方法 (電子媒体)			×

授業回数 計28回(前後期:各14回)

2. 四つの口 (図解)



出所：「近代日本の国際秩序—17世紀半ば～19世紀前半—」²⁰を基に山口夏実作成

²⁰出所：<http://www.nippon.com/ja/features/c00104/> (参照日：2016年6月1日)

三浦按針	長崎	日本	アジア	オランダ
<p>1564 生誕</p> <p>1577 ニコラス＝デ・ギンズの弟子</p> <p>1588 フルマタの海戦</p> <p>1589 マアリー＝ハイントと結婚</p> <p>1800 臼杵に遷葬</p> <p>1800.5 大阪城で徳川家康に謁見</p> <p>1800.9 関ヶ原の戦いで、リーフデ号の積み荷の武器使用か</p> <p>180? 大伝馬町の店主の娘・雪と結婚、2人の子を授かる</p> <p>1804 伊東で造船ボツクを設計する</p> <p>洋式帆船建造 (80t)</p> <p>1807 最大船を造船 (120t)</p> <p>180? 三浦祥逸見村250石の領主になる。(三浦按針の名を与えられ旗本身分の侍となる)</p> <p>1808 オランダ商館設立に貢献</p> <p>1813 グローブ号来航の手助け</p> <p>1813 平戸の英国商館設立に貢献</p> <p>1814 大阪冬の陣で英国商館員として重傷を負う</p> <p>1818 平戸商館を退職</p> <p>1820 平戸で死没</p>	<p>1543 種子島鉄砲伝来</p> <p>1570 開港</p> <p>1600 リーフデ号漂着</p> <p>1809 平戸にオランダ商館設置</p> <p>1813 イギリス船クロウゾ号入港、平戸英商館設置、禁教令発布</p> <p>1818 欧州船入港地を平戸に制限</p> <p>1822 元和の大殉教</p> <p>1824 采船禁止 (イヌバニア、スベイン)</p> <p>1628 平戸商館を閉鎖</p> <p>1633 奉書船以外の渡航を禁ず</p> <p>1635 外国船の入港地を長崎に制限</p> <p>日本船の海外渡航全面禁止</p> <p>1639 ポルトガル船の采船禁止</p> <p>鎖国完成</p> <p>1841 オランダ商館長崎出張</p> <p>貿易制限</p> <p>1888 長崎に唐人屋敷建設</p>	<p>1549 フランシスコ＝ザビエル</p> <p>1565 福田開港</p> <p>1587 伴天連追放令</p> <p>1591 天正派遣使節帰国</p> <p>1592 朱印船貿易</p> <p>家康、江戸幕府成立</p> <p>幕府府制度</p> <p>岡本大八事件</p> <p>有馬晴信許教事件</p> <p>全国に禁教令を発布</p> <p>大阪の役</p> <p>諸宗結本山法度</p> <p>イギリスが日本より撤退</p> <p>紫衣事件</p> <p>朱印船貿易廃止</p> <p>島原の乱</p> <p>南蛮貿易廃止</p> <p>葡使節团长崎受難事件</p> <p>榎目大島事件</p> <p>慶安の御触書</p> <p>大村の群衆乱</p> <p>武家結法度で殉死を禁じる</p> <p>諸宗寺院法度</p>	<p>1592 壬辰・丁酉の倭乱</p> <p>オランダ外による澎湖諸島占領</p> <p>朝鮮通信使・再</p> <p>後金 (清)</p> <p>三十年戦争始</p> <p>海賊行為禁止 (英蘭→ポ)</p> <p>オランダが台湾占領、ゼーラツヤ城</p> <p>オランダヌイッ人買事件</p> <p>幸自成の乱</p> <p>三田徳の盟約</p> <p>オランダによるワラツカ占領</p> <p>明朝から清朝に、清に南京を占領される</p> <p>三十年戦争終</p> <p>ウェストフリア条約</p> <p>鄭成功が台湾占領、清と対立</p> <p>三藩の乱</p> <p>ネルチンスク条約 (中露)</p>	<p>1568 ハブスブルク領株立</p> <p>1571 レバントの海戦</p> <p>1578 エトレピト同盟</p> <p>1580 スベイン、ポルトガル併合</p> <p>1588 英国、スベイン無敵艦隊壊滅</p> <p>1602 オランダ東インド会社 (VOC) 設立</p> <p>オランダ、スベインと休戦条約</p> <p>シヤウ島のバタヴィア市建設</p> <p>フンボイチ事件</p> <p>台湾占領</p> <p>蘭東インド会社ワラツカ占領</p> <p>タスマンがタスマニア島発見</p> <p>ウェストフリア条約独立</p> <p>80年戦争終</p> <p>ケープ植民地建設</p> <p>第1次英蘭戦争</p> <p>南ネーデルラント継承戦争</p> <p>オランダが暹羅戦争</p> <p>スベインが『エチカ』</p> <p>オランダの戦争(vs フランス)、名管革命</p>

3. 年表

出所: 西條史都、和泉蓮作作成

4. フィールドワーク報告書

4-1. 島根の石見銀山

2016年7月、世界遺産として名高い石見銀山を体感するため、アジアダイナミズム班の越田は島根県大田市を訪問した。歴史のある場所を視察・調査するときは、想像力を逞しくして、銀を求めて北東アジアやヨーロッパからやってきた当時の土地の情景や匂いなどの五感を使って思いめぐらすことによって楽しみが増してくる。

島根県の石見銀山については、島根県及び大田市の資料（パンフレット、ホームページ）、『日本の世界遺産 20 石見銀山』（2012年、朝日出版社）などの文献研究とともに、島根県大田市の「石見銀山ガイドの会」（石見銀山ガイドの会事務局）などから当時の状況・歴史の奥深さなどについて聴き取りを行った。

銀山の歴史は、人間の欲望の歴史でもある。石見銀山は、1526年筑前国（九州）博多商人の神屋寿禎（かみやじゅてい）が出雲国（島根県）に向かう船上で、日本海の沖より南方に光る山を見つけ、石見銀山を発見した（『石見銀山旧記』）という説話がある。以来、1923年の休山まで約400年にわたり採掘された世界有数の鉱山であった。

16世紀戦国時代に発見された銀山は、軍資金を必要とした戦国大名が各地の鉱山開発を飛躍的に進めた時期である。

銀山の領有をめぐり、大内・尼子・毛利の三者による激しい争奪戦が展開され、1562年毛利元就が領有者となった。毛利は石見銀を軍費の他、幕府や朝廷など上級権力への贈答、厳島神社の祭礼・修繕費など、軍事・政治・信仰など多方面で利用された。下克上を目論む戦国大名の垂涎の的として戦費を銀で賄われた。

その後、1600年関ヶ原の戦いに勝利した徳川家康は銀山の領有化を図り、以来266年間、石見銀山は幕府の直轄領（天領）として支配し繁栄することになる。幕府直轄領であったことから、領主には59名の奉行・代官が当てられた。初代銀山奉行には、3万石の八王子の大久保硯守（いわみのかみ）が赴任し、銀開発を積極的に進め成果を収めたことから、120万石に加増されるなど、この時、最盛期（当時銀生産の最盛期：年間37.5万トン）を迎えた。

こうして16世紀から17世紀にかけて世界的な交易システムが構築される中、日本もそのシステムに組み込まれていった。戦国時代の16世紀半ばから江戸時代の17世紀初めにかけて最盛期を迎えた。日本の銀は、世界の銀の3分の1を産出し、17世紀初頭には年間200トンであった（田中2009）。その大部分が石見銀山（良質で高い信用）であったといわれる。

日本史上稀な銀生産の隆盛により、大量の銀が貿易を通じてアジア諸国とヨーロッパ

諸国へ流通したことにより、東西の異なる経済・文化交流が行われる重要な役割を果たした。とはいっても 1 キロの鉱石から銀産出量は 1 グラムにすぎない。現在でも銀の産出は見込まれるが採算が合わない。現在では携帯電話機器内の資源の方が採算合致（都市鉱山）とのことであった。

また、石見銀山には、当時約 1000 件 5000 名が住んでいたとの記録があるという。石見銀山で働く鉱夫たちは、囚人でなくサラリーマンであった。収入は 5 時間当たり 2 万円（月収 50 万～60 万円程度）と高給であったが、月 2 回の休みと過酷な労働によって鉱夫の寿命は 30 歳未満であった。多くの人間が命を懸け、命を落とした。そこには銀山の歴史の中に、人間の欲望の歴史が重なりあう。

石見銀山跡は、2007 年 7 月、ユネスコから、環境に配慮し、「自然との共生」した鉱山運営（「緑の鉱山」）が特に評価された。世界遺産の文化的景観とは、自然景観ではなく、人為 が関わった人と自然との共同作品と呼ばれる景観をいう。

石見銀山の緑は、単なる自然の景色でなく、江戸幕府が行った植林政策に起因している。鉱山という環境下においても、そこに暮らす一人一人は坑内から出された不要な石・砂粒は敷地造成や道路に用いられるなど環境に配慮していた。

こうしたモノを活かしてモノを使う、モノを無駄にしない意識は、自然の中に多くの神が宿るという自然観・宗教観は、ある意味において当然のように、ヒトと自然との間で培ってきた日本人の叡智であるが、21 世紀の現代においても強く求められるテーマである。

世界遺産に登録された金銀銅鉱山は、石見銀山で 14 件目、鉱山遺跡としてはアジアで初めて世界遺産（世界遺産：地球の生成と人類の歴史によって生み出され、過去から現在へと引き継がれてきたかけがいのない宝物である。現在を生きる世界中の人々が過去から引き継ぎ、未来へと伝えていかなければならない人類共通の遺産）に登録された。

このうち銀鉱山は 7 件目である。石見銀山とほぼ同じ時期に発見されたのが、大航海時代のスペインによって開発されたラテンアメリカのボリビアとメキシコの銀鉱山である。

4-2. 長崎県視察 (2016年9月1日～3日)

長崎フィールドワーク日程表

	時間	場所	備考
9/1 (木)	7:00	羽田空港	第二ターミナル出発ロビー2階 ANA カウンター前にある時計台3番の所に集合
	8:15	羽田空港発	ANA661 便
	10:05	長崎空港着	長崎空港発マイクロバスで平戸へ向かう。
		オランダ商館	学芸員から聞き取り調査
		松浦資料博物館	徒歩移動(約 10 分) 学芸員から聞き取り調査
		按針の館	徒歩移動(約 10 分) 休憩所
		三浦按人墓	バス移動(約 5 分)
		崎方公園発	〒859-5102 崎方(さきがた)公園 【住所】平戸市大久保町2529
		ホテル着	【電話番号】0950-22-4111 平戸港交流広場から徒歩 15 分
		夕食 ホテル	バス移動 ホテルニュータンダ、チェックイン ホテル内レストランシーボルトにて親睦会(卓袱料理コース) 各自解散、就寝
9/2 (金)	9:00	長崎大学	【住所】長崎市文教町 1-14【電話番号】095-819-2030 (内線 3466) 多文化社会学部 木村直樹先生からお話を聞く 長崎大学文教キャンパス正門内守衛室前予約済。タクシー2台にて移動(光タクシーTel: 0120-158-901 / 095-843-8818)。
		長崎大学発	
		サントドミンゴ教会跡	学芸員から聞き取り調査。
		二十六聖人記念館	長崎駅より徒歩。館内見学。

		出島 グラバー園 夕食、親睦会	スタッフによる案内。 園内見学。 各自解散、就寝
9/3 (土)	9:00	長崎歴史文化 博物館着	【住所】長崎県長崎市立山1丁目1-1【電話番号】095-818-8366 スタッフから聞き取り調査。
	10:00	長崎歴史文化 博物館発	リムジンバスで長崎空港へ。
	11:00	長崎空港着	
	12:20	長崎空港発	
	14:05	羽田空港着	SNA038 現地解散

本フィールド・ワークの参加者は城崎、和泉、西條の3名と金教授、大場専任講師、9月2日から塚原が途中参加した。

平戸オランダ商館 9月1日

平戸オランダ商館は、1609年（慶長14年）オランダとの正式国交が開けた時に平戸に設置され、ヤックス・スペックスが初代商館長となった。民家72戸分を立ち退かせて建設した。1628年にタイOWN事件で一時間閉鎖されたが、1632年に再開。しかし、1640年、建物の破風に西暦年号が記されているのを口実に江戸幕府はオランダ商館の取り壊しを命じ、当時の商館長フランソワ・カロンがこれを了承、1641年に長崎の出島へ移転した。以後、幕末に至るまでオランダ船の発着、商館員の居留地は出島のみ限定された。出島に滞在するオランダ人は商館長（カピタン）、次席（ヘトル）、荷倉役、筆者、外科医、台所役、大工、鍛冶など概ね9人から13人で、自由だった平戸とは違い「国立の牢獄」と呼ぶほど不自由な生活を送っていた。商館長は年に1回（のち5年に1回）江戸に参府し、将軍に謁見した。滞在した社員にはドゥーフ（館長）ツンベルク（船医）シーボルト（医員）ケンペル（医員）ティチング（館長）らであった。

オランダ商館は長崎奉行の管轄下に置かれ、長崎町年寄の下の乙名がオランダ人と直接交渉した。出島乙名は島内に居住し、オランダ人の監視、輸出品の荷揚げ、積出し、代金決

済、出島の出入り、オランダ人の日用品購買の監督を行った。乙名の下には組頭、筆者、小使など 40 人の日本人がおり、通詞は 140 人以上いた。出島商館への出入りは一般には禁止されていたが長崎奉行所役人、長崎町年寄、オランダ通詞、出島乙名、組頭、日行使、五箇所宿老、出島町人は公用の場合に限り出入りを許された。1856 年に出島解放令が出され、出入りは完全に自由となった。1858 年、日蘭通商条約の成立により商館長は外交代表に任命され、1860 年には商館はオランダ総領事館を兼ね、商館長は総領事となった。

また、オランダ商館には江戸初期から幕末に至る 230 年余りの出来事などを記した『オランダ商館日記』が保存されていた。なお、1793 年にオランダ（ネーデルラント連邦共和国）がフランス革命軍に占領されて滅亡してから 1815 年にオランダ（ネーデルラント王国）が建国するに至るまでの 22 年間、オランダの領土はこの地球上に存在していない。そのため、1797 年にオランダ東インド会社と傭船契約を結んだアメリカの船が出島に入港するようになり、1799 年にオランダ東インド会社が解散しても、アメリカの船は 1809 年まで出島に入港して貿易を行った。1609 年には三浦按針が設立に貢献した記録が残っている。

平戸オランダ商館は、2011 年に復元されたが、当時の商館に関する資料が相当細かく残されていたため、復元が可能となった（例えば漆喰を使った量の記録があり、建物の内部にも漆喰を使用していたことが分かった。）。オランダ人は計算に聡く記録を忠実に細かく残すという一面がある。VOC、アジアの都市を循環する中継貿易を行っていた。そのため、その社員らは現地の言葉を結構覚えていた。VOC は、日本では行使していないものの、領土権や交戦権も持っていた。VOC は一企業ではあるが、領土のない国のような位置づけである。平戸にオランダ商館があった時代（1609～1643）は徳川家康の時代とおおよそ重なる。また琉球にとって海賊行為も仕事の一つであった。そして 1640 年に、大目付井上政重の命令によりオランダ商館が破壊される。キリスト教に関係するからというのはいわば言いがかりで、実際のところ VOC が持つ武器の脅威があったからではないかと考えられる。ところで、平戸は倭寇の本拠地であり、アジアにおける貿易の本拠地でもあった。そのため、自由な交易が行われていた。南蛮貿易の金額は平戸が飛びぬけていた。その後、出島にオランダ商館が移転したのは、長崎の商人らの嫉妬もあったのではないかと推測される。VOC の社員は貴族ではないが、それなりに身分の高い者だった。平戸で貿易をしている商人らは、彼らが VOC という一会社の社員であることは認識していなかったのかもしれない。バタヴィア港の絵画に松浦家の家紋が記された船が描かれていることから、松浦家の船がバタヴィアに行き、貿易をしていたと考えられる。



写真 2. 平戸オランダ商館前にて2016年9月

松浦資料博物館 9月1日

現在の博物館の場所には江戸時代初期より松浦家が館を置いていた。戦後、1955年（昭和30年）に当時の松浦家当主陞より平戸市へ建物及び敷地が寄贈されたのを改装して同年10月に開館した。博物館の主な展示場は1893年（明治26年）に松浦詮が謁見応接の間として建てた「千歳閣」である。松浦家伝来の武具や松浦家歴代当主画像、絵画、蒔絵、茶道具ほか、什器・文書・図書類合わせておよそ12,500点にのぼる。

ポルトガル人が平戸の地を知りえたのは偶然ではなく、中国の海賊に連れてこられたことがきっかけであり、その後自国の船で平戸に入港した。松浦家がポルトガルと貿易を盛んに行った理由は、松浦氏が新しもの好きだったのかという質問に対し、どちらかといえば、あまのじゃくな一面があったからかもしれないそうである。

ところで、平戸松浦氏は本家筋ではなく分家筋である。国が不安定な時代は海賊行為を行い、安定していれば一藩主としてきちんとふるまった。その時代によりカメレオンのように、または日和見のように変化していた。また平戸は日本の領土であるが、日本と異なる中国寄りの一面がある。日本の領土の中では辺境であるが、アジアとの貿易の中心である。豊臣秀吉と松浦家の結びつきは強い。したがって徳川家康にうとまれる恐れがあり、平戸城に自ら火をつけたという経緯がある。



写真 3. 徳川家の家紋である三つ葉葵の太鼓
出所：和泉遼撮影



写真 4. 松浦資料博物館前にて 2016年9月1日

長崎大学（多文化共生学部オランダ学科）9月2日

長崎大学は、経済学部、多文化共生学部、医学部などと幅広い分野で、世界に開かれた日本の窓口として多文化交流の先駆的役割を果たしてきた国際都市としての伝統的地学を継承し、豊かな心を育み、科学の創造、社会の調和的発展を基本理念として持つ大学である。私たちの研究では、特に、多文化共生学部オランダ特別コースが趣深い。オランダ特別コース

では、オランダについて人文科学的な角度で学ぶ学科である。オランダ現代社会論、オランダ文化論、日蘭比較文化、日蘭交流史などの専門科目が設置されている他、一年間のライデン大学への留学が必修となっている。

2016年9月2日、17世紀の中国と日本周辺海域におけるモノの流れの構造について情報を収集すべく、長崎大学多文化社会学部木村直樹准教授から聞き取り調査を行った。

初めに、当時中国と日本にはそれぞれ明確な需要があった。中国では、一条鞭法という明朝後半から施行されていた銀で税を納める形式の税制であったため、銀に需要があった。銀は加工がしやすく、大衆が使いやすい貨幣であった。「金は1万円、銀は5500円から1000円、銅は小銭というイメージである。金は使ってもおつりが無い、銅は少額すぎてたくさん紙幣が必要になる、そのため銀がよく流通するようになった」（木村先生）

一方日本は、17世紀まで国産化されることがなかった生糸に需要があった。江戸時代は身分制であるため、絹の着物を着ていれば、身分の高いものと判断された。絹は甲冑を作る（装飾やパーツをつなぎ合わせる）ためにも必要であった。また、当時は徳川幕府により統一された世の中であったが、いつ戦争に突入するかもしれないという思いがあったため、甲冑は必要であった。それに加え、日本と朝鮮のモノの流れも重要である。17世紀の西陣織の中で最高級のもは、朝鮮との間でやり取りされたものである。朝貢は国家の威信をかけているため、最も質が良い物をやり取りしていた。唐船やVOCが持ってきたものは、実用品としては十分であるが、朝鮮が持ってきたものと比べると一段落ちる。

そしてそのモノの市場に現れたのが、オランダ東インド会社（VOC）である。中国製の生糸と、日本製の銀の貿易仲介を誰が行うか、ということでポルトガルが出てきたが、キリスト教との関係で実現しなかった。その次に出てきたのが唐船であり、VOCであった（VOCは参入者である）。幕府はオランダと国交を結んでいたわけではなく、VOCはあくまで貿易商人として見られていた。オランダ本国と連絡を取ろうとすると2年程かかるため、VOCが本国の指示を受けて動くことはなかった。さらに、幕府がVOCと貿易を続けたのは、やはり幕府にも儲けがあったためであり、幕府自身もVOCに出資をしていた。

オランダが海外進出をした理由は経済的な理由と、政治的理由の両方がある。まず、オランダは自国に目立った産業があるわけではなく、貧しい国であったため、リスクを取って一攫千金を狙って海外進出をしてきたという背景がある。ただ、17世紀になると経済的に豊かになりオランダの社員が減って、出稼ぎとしてやってくるドイツなどの社員が増えてきた。次に、政治的な面で、オランダはスペインからの独立を目指していた。1580年にポルトガルがスペインに併合されると、ポルトガルをつぶすことがオランダ独立という目的にかなうことだという認識になった。香辛料を得るためにアジア貿易に進出し、利益を数百パーセ

ントと生んでいたが、次第に衰退した。

幕府は生糸を調達するために、マカオ経由でイエズス会を通じたルートを使用していた。しかし、キリスト教の脅威があり何とか追放したいと考えていた。そこで、実績はないが、VOC と貿易を行おうということになった。実は、VOC もアジア諸国で仲介貿易。密貿易も行っていた。VOC が島原の乱で一揆軍に対し砲撃を加えたのはサービスである。あくまで幕府と関係を築くため、要請を受けて攻撃したが、評判が悪く、武器だけ残して早々に撤退した。

朝鮮と外交を結ぶ際のエピソードに次のようなものがある。先に親書を持って行ったほうが格下になるという背景がある中、幕府の親書と偽って対馬藩が偽の親書を朝鮮に持って行った。朝鮮側は偽の親書であると勘づいていたが、再度戦争し破綻するよりはいいと思い、親書を受け入れた。今の時代を考えると、各国が言いたいことを言い、それぞれの国の威信を高めることに重きを置いている風潮がある。2 世、3 世の政治家がのびのび言いたいことを言える半面、戦争を経験していないため、その悲惨さを想像できない。

逆に、江戸時代初期は、どの国も戦争という現実を知っており、リアリストであったため、忍ぶところがあり、また我慢できた。要はリスクを負ってまで戦争ができるかという思いがある。ところが、こうした姿勢は戦争をバーチャルでしかとらえられない今の世代からすると弱腰に見えてしまう。当時の方が、国と国が衝突する難しさを良く知っていた。豊臣秀吉の朝鮮出兵で、日本はどこと戦っていたのかー朝鮮と戦っていたという認識があるが、実は明と戦をしていた。属国が戦をすれば、その親玉が出てくるのは当然のこと。休戦したものの、再度、明と国交樹立するための交渉テーブルにつくまでもいかなかった。家康は、日中関係を立て直し、勘合貿易のような仕組みを再現したかったのではないか。

また、木村先生は、三浦按針やキリスト教についても講義した。三浦按針の位置づけは、幕府の世話人であり、誘致のキーパーソンである。海外情勢の知識、新教の存在等を伝え、海外から来る者を仲介（実務者として調整）した。徳川家康は、周りに様々な人を侍らせたが、三浦按針もそのうちの一人である。ただし、家康の政策決定に直接影響を与えたわけではない。今でこそグローバルに見えるかもしれないが、政権のトップとして外交、貿易の必要性を感じていただけのことであるという話しを聞いた。徳川家康の時代を見る目は、

キリスト教の宣教師は、らい病などの不治の病で世間から見捨てられた人の収用所を作ったり、院を建設したりという慈善事業を数多く行っていた。そのため、貧しい人々にとって、キリスト教は求心力のある存在になっていった。こうした事業は幕府ではできなかったため、幕府も簡単にキリスト教を弾圧しなかった。しかし、島原の乱を経験し、集団となったキリスト教に脅威を覚え、やはり怖い、ということで弾圧が強化されていった。オランダは移民、ワークシェアリング、そして LGBT などと日本にとって課題先進国である。国の規模が違

うためオランダと同じ政策を日本で採用できるかは別であるが、オランダの問題は将来の日本の問題を考えることにつながっている。



写真 5. 長崎大学前 9月2日
出所：和泉遼撮影

サントドミンゴ教会跡資料館

サントドミンゴ教会跡資料館でも、聞き取り調査を主に行った。キリスト教の宣教師は医療・養護施設を作るなど慈善事業を数多く行っている。高山右近や細川ガラシャといったごく一部を除いて、一般人はキリシタンの教義など全く理解していなかったと考えられる。キリスト教はコミュニティにおけるツールであったのかもしれない。農業を主な生業としている時代で、移動の自由がない中、誰ともコミュニケーションを取ることができないというのは、仕事や生活ができなくなるのと同じことなので、いわば保険のような役割があったのかもしれない。当時、人間の居場所を作ることは難しいことであった。欲があって人間が生きていくことは、昔の今の人間はそう変わらない。

教会で発掘された伊万里焼の裏側に「大明年製」と記載がされており、当時明（中国）を敬う気持ちが相当大きかったのだと考えられる。しかしアヘン戦争で清が負け大国が負けたという驚き、日清戦争、日中戦争を経て、帝国主義が中国を負かしてしまったという事実から中国への信頼が大きく低下している。現在の中国に対する意識はコンプレックスの裏返しではないのだろうか。

宗教は生活のひとつ、習慣のひとつである。キリスト教信者になるきっかけは様々である。キリスト教信者には、親がクリスチャンだから自然に自身もクリスチャンになるという人が多かった。自分の出自を、存在を確認するための宗教という意味合いでもある。教会の跡地に長崎代官の屋敷が建設されたのは、禁教下の中で、キリスト教の痕跡を残さず何もなかったかのように見せるためだったのではないか。



写真 6. サントドミンゴ教会跡資料館にて 9月2日

出島

出島は、1636年に築造された出島は、1859年にオランダ商館が閉鎖されるまでの218年間に渡り、わが国で唯一西欧に開かれた窓である。



写真7. ミニ出島
出所：和泉遼撮影

長崎県フィールドワークで、我々は、出島へも足を運び、そこには香辛料、絹、陶磁器などと様々な展示があった。出島は当時の世界への窓の役割をしていたということもあり、出島現地のオランダとの交流史が根深いものであるということがわかった。長崎の場合は他の四つの口と異なっていることがあり、それは幕府が直接関わっておらず、あくまでも民間レベルでの関係であったということである。

1630年代からはオランダ商館長が毎年江戸参府を義務付けられ、費用は全てオランダ側持ちであった。また、出島の賃貸料や貿易品の荷揚げや船積み等にかかる費用、滞在中の生活費など、かかる諸費用は全てオランダ側の負担であった。出島そのものは幕府の命令によって長崎市民の負担で建設され（建設当時の町人25人による出資）、賃借料としてオランダ側から支払われる形であった。ここから察するに、民間・市民レベルでの交流という一面が想像できる。

貿易品に関して、当時日本に流通していた砂糖のほとんどが出島で扱われていたことから、カステラを始め甘味のお菓子が長崎で根付いたこともわかった。バドミントン伝来もオランダから出島を経由して、ということもあり、貿易のみならず文化交流も盛んであったことが見て取れる。あくまでも貿易を目的とした長崎口、出島であったが、実際の現場での交流はもっと地元・市民に根ざした、人と人の交流そのものであったと感じた。



写真 8. 出島内にて 9月2日

長崎文化博物館9月3日

鎖国時代から西欧に唯一開かれた窓口として栄えた長崎その街の様子や出島で行われたオランダとの貿易など長崎ならではの海外交流の歴史や文化を身近に学ぶことができる。また、長崎奉行所を当時の資料をもとに一部を復元した世界的にも大変ユニークな博物館です。本館は長崎県と長崎市が一体となってできた博物館である。今年度、我々は時系列では江戸初期を中心に研究を進めているが、当然のことながら本館は江戸初期のみならずもっと長いスパンで歴史・文化に焦点をあてて展示、企画展を開催している。

その一方で、やはり日本史（アジア史・世界史）において長崎県が注目されるのは西洋との出会いであり、キリスト教伝来から長崎開港、オランダ商館や出島、唐人屋敷等、今年度我々が研究している時代の展示がメインである。

出島や唐人屋敷等、オランダや中国との貿易についての展示も豊富だが、加えて当時の長崎の人々の暮らしや長崎の美術・工芸、蘭学等、長崎そのものに焦点を当てた展示が充実している。

また、個人的に印象深かった展示は、長崎奉行所関連の展示で、特に「犯科帳」のブースは興味深かった。貿易が盛んであった町だからこそ、密貿易もありそれらを取り締まるのも長崎の人々にとって重要な役目であったと感じた。

最後に、本館は常設展示とは別に企画展も充実しており、我々が訪問した際はちょうど

「エヴァンゲリオン展」が開催中であり、長崎歴史文化博物館という名称でありながら、全く趣の異なる展示を、かなりのリソースをかけて行っていた。

2016年4月～5月"	《篠山紀信展 写真力 THE PEOPLE by KISHIN》 4月9日～5月29日	2016年
2016年7月～9月"	「エヴァンゲリオン展」 (日)	2016年7月2日(土)～9月4日(日)
2016年10月～12月"	「アールヌーヴォーの装飾磁器展」 (日)	2016年10月29日(土)～12月4日(日)
2016年12月～翌年2月	「没後150年 坂本龍馬展」 (日)	2016年12月17日(土)～2017年2月5日(日)
2017年2月～4月"	「よみがえれ！シーボルトの日本博物館」 (日)	2017年2月18日(土)～4月2日(日)

表9. 長崎歴史文化博物館特別展示リスト

こういった展示は「地方創生」の一環でもあり、長崎県や長崎市、そしてこの「長崎歴史文化博物館」が、今までの枠にとらわれない、チャレンジングでイノベーティブな発想を持って、実行していることを実感することができた。

そしてオランダだけでなく、中国と、日本の交流史に関する展示品も多く見うけられた。印象としては、17世紀の長崎における貿易から一般庶民の生活をうかがい得ることが出来た。また、象を東インド会社から輸入したが、餌代が高く、育てるのに大変なお金がかかるなどの理由から返品した点、そこから、東インド会社は日本に多くの物や、動物を売ろうと考えていたが中には失敗したという話を聞くことが出来た点などが印象に残っている。

平成 11 年 12 月	長崎県政策創造会議から、「諏訪の森再整備構想提言書」が提出される。
平成 12 年 11 月	長崎県と長崎市が共同で、「諏訪の森再整備に関する基本方針」を公表。
平成 13 年 3 月	「歴史文化博物館（仮称）」基本構想専門会議から、報告書が提出される。
11 月	長崎県と長崎市で「歴史文化博物館（仮称）建設基本構想（案）」を公表。パブリックコメントを募集。
12 月	長崎県と長崎市で「歴史文化博物館（仮称）建設基本構想」を策定。
平成 14 年 2 月	プロポーザル方式により、展示設計者に「(株) 乃村工藝社」を、建築設計者に「(株) 黒川紀章建築・都市設計事務所」を決定。
平成 15 年 3 月	建築設計、展示設計の概要を発表。
7 月	起工式
平成 16 年 10 月	長崎歴史文化博物館条例を公布。
平成 17 年 4 月	館運営に当る指定管理者に「(株) 乃村工藝社」を指定。
7 月	初代館長に大堀哲（日本ミュージアム・マネジメント学会会長）就任。
11 月	開館

表 10. 長崎歴史文化博物館の歴史

出所：和泉遼作成

4-3. 神奈川県横須賀市逸見町視察 浄土寺

アジアダイナミズム班は2016年10月8日に、城崎、山口、西條、和泉の学生4名と、卒業生の塚原、そしてアジアダイナミズム班指導教員の金教授、大場専任講師の以上7名で逸見フィールド・ワークを行った。

逸見とは神奈川県横須賀市にあり、三浦按針塚がある。日本で唯一外国人・三浦按針が領主として治めていた歴史上重要な町だ。逸見の浄土寺には、三浦按針の念持仏であるといわれる八角の冠をつけた観音菩薩が安置されている。また紙ができるより以前に樹皮に経典を書き記した「唄多羅葉（ばいたらよう）」などが三浦按針ゆかりのものとしてある。

浄土寺の逸見道郎住職は2014年から2015年まで2年間に渡り神奈川新聞にANJIN TIMESという三浦按針に関する記事を執筆しており、逸見住職への三浦按針に関する聞き取り調査も実施した。

さらに1840（天保11）年に江戸日本橋三浦按針町の人々が寄進した打うち敷しき（本尊の前机に掛ける敷物）なども残されており、江戸後期には浄土寺を中心にして三浦按針の法要が営まれていたことが分かる。

何故家康は逸見に領地を与えたのか、それには諸説あるが浦賀が東日本唯一の貿易港となっていたことに関係している。浦賀にも「アンジン屋敷」と伝えられている所がある。したがって、三浦按針は浦賀と逸見を往復していたと考えることが出来る。

4-4. アジアをつなぐ長崎ロード～日中の絆を深めた人々～シンポジウム参加

我々アジアダイナミズム班は最後のフィールドワークとして10月23日に江戸東京博物館にて行われた「アジアをつなぐ長崎ロード～日中の絆を深めた人々～」に参加した。参加者は山口、西條、和泉の学生3名と、塚原、王、金教授、大場専任講師の卒業生、教員各2名の計7名であった。

このシンポジウムに参加した目的は、4月から続けていた先行文献研究で得た知識と、長崎、逸見（横須賀市）へのフィールドワークを通して見えた学生の気づきを踏まえ、改めて歴史的な中国と長崎の関わり、長崎の文化的成り立ち、長崎に根付いた華僑文化、そして長崎の持つ地理的・歴史的価値を再度考察することにあつた。

このシンポジウムは、長崎県、長崎県中日親善協議会、日本華人教授会議が主催し、第一部では東京大学名誉教授の濱下武志氏、長崎大学多文化社会学科教授を務める王維（おうい）氏、そして多摩大学学長を務める寺島実郎氏による講演が行われた。続く第2部では『偉人や交流史を通じて「日中を繋ぐまち長崎」の新たな魅力を掘り起こす』をテーマに、東京大学名誉教授の濱下氏、孫文を支えた長崎の町商人梅屋庄吉の曾孫にあたり、現在日比

谷松本楼代表取締役副社長の小坂文乃氏、長崎福建会館理事長及び長崎中国交流史教会専務理事などを務める陳東華（ちんとうか）氏、株式会社アジア太平洋観光社代表取締役社長の劉莉生（りゅうりせい）氏、武蔵野美術大学教授の廖赤陽（りょうせきよう）氏、以上の5人のパネリストと華人教授会代表を務める朱建榮（しゅけんえい）氏がコーディネーターを務めパネルディスカッションが実施された。

一部の基調講演では濱下氏が「アジア太平洋海域世界の中の長崎と九州—長崎から見える歴史の転換点—」をテーマにアジアは独自の認識を持ち、そして発展を遂げ、この点は歴史研究の中で大切なポイントであると指摘した。また講演内では長崎の地理的な要素に注目し、長崎を中心に同心円を描いた際長崎から上海、そして長崎から東京がほぼ同等の距離にあるとし、長崎の人にとって中国は現代の日本人が思ってる以上に「隣国」の意識があったと説明した。

また、移民によるヒトの移動が長崎に文化を伝播し多様な文化表現を長崎に生み出した要因であると論じた。その代表として長崎のチャンプルー文化（混成文化）が取り上げられ、マレー、琉球・沖縄、長崎、そして韓国の文化が混在していると解説した。また具体例として福建からの繋がりががあるとされる四海楼ちゃんぷるを紹介した。

このように、長崎の文化は A、B と分けられるものではなく、西洋文化と長崎の文化そのものが積み重なって構成されたものであると濱下氏はまとめた。そして最後に中国（華僑）文化が人の異動や交流などによって土着し、土着した中国文化を吸収し発展したことにより、西洋文化をつかむことが可能になり、現在に至るまでの長崎の力が発揮できたと結論づけた。

続く王氏による講演では、長崎に根付いた中国文化、特に華僑文化について説明があった。王氏は長崎の観光資源の多くは異文化性を有しており、特に中国からの影響を受けているが、それには、長崎の地理的位置が関係している。従来上海、釜山、東南アジアなど東・東南アジア地域との交流の窓口であった長崎には、異文化に対する「寛容性」があり、長崎が異文化性を有している理由はそこにあると述べた。

次に日本の朱印船貿易は東南アジアを中心にほとんど華僑のルートが使用されており、日本にとって中国と唐人の役割はとても重要であったこと、そして海外との交流の中、アジア、特に中国は重要な位置にある上に、モノを運ぶ重要な存在であり、当時の長崎の人口の実に 1/6 は中国人であったと解説した。

長崎に残る華僑文化の多くは現在観光資源になっており、その代表として唐寺、隠元禅師、唐人屋敷、唐通事、唐人風説書、長崎新地、孔子廊と孔子祭を上げ、各自の詳細を説明した。

また、王氏は食文化では精進料理の1つである普茶料理、和・華・蘭が融合し中国式の円卓を使用する卓袱料理、そして長崎ちゃんぽんを紹介した。音楽では、江戸時代に中国から

日本に伝来した音楽、明清楽を取り上げ、明清楽では手前で剣舞、その後ろが楽器隊となっていると補足した。

講演の最後に、王氏は華僑と日本人が一緒になって想像した長崎文化が、現在にも残っており、その代表例として媽祖（まそ）あげ（現在はランタンフェスティバルでの媽祖行列）、灯籠祭（現在はランタンフェスティバル）、孔子祭があると解説し、長崎の観光資源とは華僑文化が混ざったものが多いとまとめた。

第一部の最後は、多摩大学学長、寺島実郎氏による講演があり、全体知の中でも長崎県の立ち位置の認識が大事であると冒頭で指摘した。長崎の観光戦略は歴史ツーリズムがキーワードであり、長崎県の平戸で今年開催される予定であった（熊本地震の影響で中止）ANJIN サミットのサポートを寺島氏自らもしており、長崎大学多文化社会共生学部の立ち上げにも協力していたと説明し、長崎と縁があるのを話していた。また、今回の講演のキーワードはグローカリティであると述べ、ローカルをつなげていけば新しい何かが見えてくる視点がグローカリティであると主張した。

グローカリティの例として、寺島氏が岩波書店出版の雑誌世界に長期に渡り執筆をしている論考「十七世紀オランダからの視界」に触れ、17世紀のオランダはまだ連邦共和国であり、プロテスタントを支持する宗教の自由な国であった。そして現在自由の国として知られるアメリカは、実はオランダからの影響を受けていたと解説し、このようにローカルな歴史を深めるとグローバルな歴史が見える、これがグローカリティであると述べた。

そして、寺島氏にとって「長崎とは地名ではなく思想」であるとし、その時代の国をしっかり知らないと今日に至るまでの問題が理解できないと強調した。

第二部では『偉人や交流史を通じて「日中を繋ぐまち長崎」の新たな魅力を掘り起こす』をテーマに、5名のパネリストと1名のコーディネーターの計6名でディスカッションが行われた。

まず講演で既に指摘があったように、長崎の観光資源の多くは中国文化と融合されたものが多いという点に触れ、長崎と中国の交流は鎖国政策下であっても、唐船を通じた交流が続けられており、その数は年間70隻、つまり週1隻以上の頻度での交流があった。

また、台湾と中国の両方で国父と尊敬されている孫文の辛亥革命の拠点は実は日本であり、その縁は長崎商人の梅屋庄吉との出会いが関係したと説明がなされ、長崎には入ってくるものを受け入れる懐の深さと、困っている人をほおっておけない気質がある。そして梅屋だけでなく、長崎には豊かな革命家が多かったことも関係しているのではないかとの議論があった。

長崎の吸引力とは蓄積された人的資源のことであり、長崎県の海岸線の長さが北海道に続き日本2位のことから、長崎には吸引力だけでなく発信力も備わっている。また発信力が備わっているからこそ、アジアだけでなくヨーロッパを見ることもグローバル時代において非常に重要であると締めくくった。

参考文献

1. 赤瀬浩(2005)『「株式会社」長崎出島』講談社
2. 朝尾直弘(1993)「十六世紀後半の日本 -統合された社会へ」朝尾直弘・石井進・早川庄八・網野善彦・鹿野政直・安丸良夫(編)『日本通史 近世 1』第 11 巻, 岩波出版, 3-14 頁
3. 浅野和生 (2010)『台湾の歴史と日台関係』早稲田出版
4. 有馬学・李也市他 (2011)『いま「アジア」をどう語るか』絃書房
5. 石澤良昭・生田滋(1998)『東南アジアの伝統と発展』世界の歴史 13, 中央公論社
6. 岩生成一 (2005) 『鎖国』日本の歴史 14, 中央公論社
7. 市村佑一(2004)『江戸の情報力ーウェブ化と知の流通』講談社
8. 稲盛和夫(2004)『生き方』サンマーク出版
9. ウイーレ、B (1958)『17 世紀の思想的風土』深瀬基寛訳, 創文社
10. 大石学 (2009)『江戸の外交戦略』角川学芸出版
11. 大島昌宏(1999)『海の隼 参謀・三浦按針』学陽書房
12. カー、H (1962)『歴史とは何か』清水幾太郎訳, 岩波新書
13. 国立劇場 (1977)『近世の外来音楽 : 長崎の明清楽・隠れキリシタンのオラショ』国立劇場事業部
14. 清水速雄 (1984)『日本人のロシア・コンプレックス』中央公論社
15. 大場秀章 (2001)『花の男シーボルト』文藝春秋
16. 岡崎市美術博物館(2016)『大鎖国展』中日新聞社
17. 岡本隆司 (2016)『中国の論理』中公新書
18. 片桐一男 (2000)『江戸のオランダ人』中公出版
19. 片桐一男(2008)『それでも江戸は鎖国だったのかーオランダ宿日本橋長崎屋』吉川弘文
20. 加藤榮一(1994)「出島論」朝尾直弘・石井進・早川庄八・網野善彦・鹿野政直・安丸良夫編『日本通史 近世 2』第 12 巻, 岩波出版, 329-345 頁
21. 上垣外憲一 (1994)『「鎖国」の比較文明論』講談社
22. 紙屋敦之 (2003)『琉球と中国・日本』山川出版社
23. 紙屋 敦之 (2005)『江戸時代長崎来航中国船の情報分析』紙屋敦之.
24. 紙屋敦之・木村直也編 (2002)『海禁と鎖国』展望日本歴史 14, 東京堂出版
25. 木方十根・山田由香里 (2016)『図説 長崎の教会堂 風景のなかの建築』河出書房新

社

26. 岸本美緒・宮嶋博史(1998)『明清と李朝の時代』世界の歴史 12, 中央公論社
27. 木村直樹 (2016)『長崎奉行の歴史』角川選書
28. クレインス・フレデリック (2010)『十七世紀のオランダ人が見た日本』臨川書店
29. 小市和雄・鈴木哲雄・錦昭江・樋口州男・増田正弘 (2000)『東アジア交流史事典』新人物往来社, 206-207 頁
30. 清水勝(1985)「鎖国」日本歴史大辞典編集委員会(編)『普及新版 日本歴史大辞典』第五卷, 河出書房新社, 97-98 頁
31. 高橋裕史 (2006)『イエズス会の世界戦略』講談社
32. 高藤晴俊 (1996)『日光東照宮の謎』講談社現代新書
33. 田中裕子 (2009)『未来のための江戸学』小学館 101 新書
34. 田中裕子 (2012)『グローバリゼーションのナカの江戸』岩波ジュニア新書
35. 竹内誠 (2008)『外国人が見た日本-日本人再発見』角川学芸出版
36. 壇上寛 (2013)『明代解禁=朝貢システムと華夷秩序』東洋史研究叢刊之七十八, 京都大学学術出版
37. 月川雅夫他 (1985)「長崎の食とその背景」日本の食生活全集長崎編集委員会編『長崎の食事』日本の食生活全集 42, 中央公論新社, 346-347 頁
38. 辻善之助 (1980)『田沼時代』岩波書店
39. 帝国書院編集部編 (2011)『最新世界史図説タペストリー 九討版』帝国書院, 151, 155, 159-165 頁
40. 寺島実郎監修 (2008)『多摩大学創立 20 周年 現代世界解析講座』多摩大学
41. 寺島実郎 (2010a)『時代との対話 寺島実郎対談集』ぎょうせい
42. 寺島実郎 (2010b)『世界を知る力』PHP 新書
43. 寺島実郎 (2010c)『脳力のレッスン 日蘭関係の原点、リーフデ号の漂着とは何か——七世紀オランダからの視界 (その 2)』「世界」12 月号, 岩波書店
44. 寺島実郎 (2012a)『脳力のレッスン日本の大航海時代—朱印船貿易から鎖国へ——一七世紀オランダからの視界 (その 7)』「世界」3 月号, 岩波書店
45. 寺島実郎 (2012b)『脳力のレッスン台湾をオランダが支配していた時代 — 一七世紀オランダからの視界 (その 9)』「世界」7 月号, 岩波書店
46. 寺島実郎 (2012c)『脳力のレッスン宗教改革が突き動かしたのもの — 一七世紀オランダからの視界 (その 10)』「世界」8 月号, 岩波書店
47. 寺島実郎 (2012d)『脳力のレッスン東インド会社という装置 — 一七世紀オランダからの視界 (その 11)』「世界」9 月号, 岩波書店

48. 寺島実郎 (2012e) 『大中華圏 ネットワーク型世界観から中国の本質に迫る』NHK 出版
49. 寺島実郎 (2013a) 『脳力のレッスン石見銀山と銀の地政学 — 一七世紀オランダからの視界 (その16)』「世界」6月号, 岩波書店
50. 寺島実郎 (2013b) 『脳力のレッスンキリスト教の伝来と禁制 — 一七世紀オランダからの視界 (その17)』「世界」9月号, 岩波書店
51. 寺島実郎 (2013c) 『何のために働くのか 自分を創る生き方』文春文庫
52. 寺島実郎 (2013c) 『脳力のレッスンそれからのクリシタン — 一七世紀オランダからの視界 (その18)』「世界」10月号, 岩波書店
53. 寺島実郎 (2014a) 『脳力のレッスン新井白石と荻生徂徠 — 時代と正対した二人の儒学者— 一七世紀オランダからの視界 (その25)』「世界」10月号, 岩波書店
54. 寺島実郎 (2014b) 『脳力のレッスン本居宣長とやまごころ— 一七世紀オランダからの視界 (その26)』「世界」12月号, 岩波書店
55. 寺島実郎 (2014c) 『若き日本の肖像 — 一九〇〇年、欧州への旅—』新潮社
56. 寺島実郎 (2016) 『中東・エネルギー・地政学』東洋経済新報社
57. ドナルド・キーン (1982) 『日本人の西洋発見』芳賀徹訳, 中公文庫
58. トビ、ロナルド (1990) 『近代日本の国家形成と外交 (State and Diplomacy in Early Modern Japan)』速水融・永積洋子・川勝平太訳, 創文社
59. トビ、ロナルド (2008) 『「鎖国」という外交』小学館
60. 長崎歴史文化博物館 (2009) 『阿蘭陀と NIPPON』東京新聞
61. 長澤和俊 (1989) 『海のシルクロード史 四千年の東西交易』中公新書
62. 沼崎一郎 (2014) 『台湾社会の形成と変容～二元・二層構造から多元・多層構造へ～』東北大学出版
63. 林 陸朗 (2010) 『長崎唐通事: 大通事林道栄とその周辺』長崎文献社
64. 羽田正編 (2016) 『地域史と世界史』ミネルヴァ書房
65. 羽田正 (2007) 『興亡の世界史第15巻 東インド会社とアジアの海』
66. 姫野順一 (2009) 『龍馬が見た長崎』朝日新聞出版
67. ピーター・ミルワード (1998) 『ザビエルの見た日本』松本たま訳, 講談社学術文庫
68. 福井憲彦 (2008) 『興亡の世界史第13巻 近代ヨーロッパの覇権』
69. 藤井讓治 (1992) 『江戸開幕』日本の歴史12, 集英社
70. 藤井讓治 (1994) 「十七世紀の日本 武家の国家の形成」朝尾直弘・石井進・早川庄八・網野善彦・鹿野政直・安丸良夫編『日本通史 近世2』第12巻, 岩波出版, 34-64頁
71. 藤田覚編 (2000) 『十七世紀の日本と東アジア』山川出版社

72. 古川愛哲(2011)『原爆投下は予告されていた』講談社
73. 古川薫(1997)『ザビエルの謎』文藝春秋
74. 逸見道郎(2014)『青い目のサムライ 三浦按針タイムズ ANJIN TIMES 第5号』
神奈川新聞
75. 逸見道郎(2015a)『青い目のサムライ 三浦按針タイムズ ANJIN TIMES 第10号』
神奈川新聞
76. 逸見道郎(2015b)『青い目のサムライ 三浦按針タイムズ ANJIN TIMES 第14号』
神奈川新聞
77. 逸見道郎(2015c)『青い目のサムライ 三浦按針タイムズ ANJIN TIMES 第15号』
78. 逸見道郎(2016)『青い目のサムライ 三浦按針タイムズ ANJIN TIMES 増刊号』
神奈川新聞
79. 外園豊基編(2011)『最新日本史図表四訂版』第一学習社, 154-155頁
80. マクニール,H.ウィリアム(2008)『世界史』上, 増田義郎・佐々木昭夫訳, 中公論新
社
81. マクニール,H.ウィリアム(2008)『世界史』下, 増田義郎・佐々木昭夫訳, 中公論新
社
82. 松井圭介(2013)『観光戦略としての宗教』、筑波大学出版会
83. 松岡正剛(2015)『国家と私の行方』春秋社
84. 松方冬子(2010a)『オランダ風説書―「鎖国」日本に語られた「世界」』(中公新書
2047)中央公論新社
85. 松方冬子(2010b)『オランダ風説書』中央公論新社
86. 水本邦彦(2008)『徳川の国家デザイン十』小学館
87. 山口美由紀(2008)『長崎出島―甦るオランダ商館』同成社
88. 山脇 悌二郎(1980)『長崎のオランダ商館 世界のなかの鎖国の日本』中公新書
89. 横山宏章(2011)『長崎唐人屋敷の謎』集英社
90. 李御寧(2007)『「縮み」思考の日本人』講談社学術文庫
91. ルーガイド編集部(2009)『てくてく歩き⑭―長崎・ハウステンボス・博多』実業乃日
本社
92. 若木太一(2013)『長崎・東西文化交渉史の舞台：ポルトガル時代オランダ時代』勉誠
出版
93. 若木太一(2013)『長崎・東西文化交渉史の舞台：明・清時代の長崎：支配の構図と文
化の諸相』勉誠出版

94. KLM オランダ空港編 (1994) 『日蘭交流の歴史を歩く』 NTT 出版

ウェブサイト

1. ウィキペディア「長崎県」
出所：<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E9%95%B7%E5%B4%8E%E7%9C%8C> (参照日：2016年6月12・19日)
2. 経済産業省 九州経済産業局
出所：<http://www.kyushu.meti.go.jp/> (参照日：2016年8月20・21・28日)
3. 財務局 福岡財務支局「長崎県内の経済情勢」
出所：<http://fukuoka.mof.go.jp/html/nagasaki/keizai.html> (参照日：2016年8月20・21・28日)
4. 地域経済ラボラトリ「長崎県の地域経済」
出所：<http://www.region-labo.com/archives/prefecture/nagasaki/> (参照日：2016年8月20・21・28日)
5. 長崎県庁「長崎県庁ホームページ」出所：<https://www.pref.nagasaki.jp/> (参照日：2016年6月12・19日)
6. ながさき旅ネット「長崎歴史文化博物館」出所：<http://www.nagasaki-tabinet.com/guide/60486/> (参照日：2016年12月10日)
7. 長崎県 平戸観光教会達人 Navi 平戸「按針の館」出所：http://www.hirado-net.com/?post_type=tourism&p=491 (参照日：2016年8月17日)
8. 平戸オランダ商館 Official Site 出所：<http://hirado-shoukan.jp/> (参照日：2016年8月17日)
9. 松浦資料博物館 出所：<http://www.matsura.or.jp/> (参照日：2016年8月17日)
10. 魅力あふれる平戸の観光情報 ほっこり♡HIRADO「三浦按針の墓」出所：<http://www.city.hirado.nagasaki.jp/kanko/rekishi/re07.html> (参照日：2016年8月17日)
11. 山本詔一・逸見道郎「三浦三浦按針ゆかりの地 逸見」出所：https://www.city.yokosuka.kanagawa.jp/0130/culture_info/documents/miura_anjin_yokosuka_h24_02ver.pdf (参照日：2016年10月10日)

映像資料

1. BS-TBS 未来へつなぐ 土曜スタジアム「月刊寺島文庫」 6月 25 日放送 『三浦按針から世界を捉えた男 徳川家康の慧眼』

謝辞

最後に、本論文を作成するにあたり、インターゼミ主宰の寺島実郎学長、久恒啓一副学長をはじめとする多くの先生方から助言を頂きました。アジアダイナミズム班の指導教員である金美德教授、大場智美専任講師にはテーマ設定から、文献研究、フィールドワーク、論文執筆に至るまでの研究の大きな指針と共に、アジアの中の日本、そして周辺国との外交、貿易関係、政経分離などの複雑な国際情勢を歴史から紐解き、現代的意義を考察し、未来について考える、その重要性を教示頂きました。

長崎フィールドワークでは長崎大学の木村直樹教授には研究テーマの長崎が拓いた交流につき大変貴重な意見を頂きました。神奈川県横須賀市逸見町のフィールドワークでは、浄土寺の逸見道郎住職から貴重な意見と共に三浦按針の持念仏等歴史的に大変価値のあるものを直接見せて頂く機会を得て、文献調査では得られない所感も頂きました。

この場を借りて、今回の論文を執筆するに当たり、協力して下さった全ての方々に感謝の意を表します。誠にありがとうございました。

2017年1月12日

多摩大学インターゼミ アジアダイナミズム班一同